
連続転生物語～現在ネギま！編～

墮落の書

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連続転生物語〜現在ネギま！編〜

【Nコード】

N6489Q

【作者名】

墮落の書

【あらすじ】

警告 この作品は処女作品です、クオリティの高さなんて望めません。

また、作者は現在の転生先のネギま！を1冊も持っていないので著しいキャラ崩壊特に一部キャラが話しの都合により酷い劣化や本を持っていないことによる改変等が発生する可能性があります。

2/12原作突入前にネギま！本を16巻までしいれました。なので、可能な限り既に予約で入ってる原作キャラの修正なども行われます。・・・詠春の外見とかラカンの外見（写真確認）とか予想外

だった・・・マツチヨなおっさんだと思つてのに（ラカン）ただ、
買つてもなお崩れてる人は単に作者の実力不足ですorz

他にも、強いアンチ・ヘイトやキャラの脱落など見る人にとっては
不快を催すと思われるので、上記に書かれているものが苦手な方
は閲覧をご遠慮下さい。

更に、自己満足で書いてるだけなので緊急時を除き完走優先で修正
が無いことを予めご承知下さい。

最後に、上記警告を御覧になつても尚、閲覧してくださる読者の皆
様に無限の感謝を。

お知らせ タグにつけたボーイズラブ・ガールズラブは2/7の
時点で意図せずから悪乗りで発動が確定しました。ご不快に思われ
る方はやはり閲覧をご遠慮下さい。

1. プロローグだよ！

おっす、オラ・・・じゃない俺死人！

いやいや、冗談じゃなく本当に死んだんだよなー・・・通勤途中で犬に吠えられて驚いた拍子に道路に出て、同じく通勤途中だっただろう車に轢かれてアツサリ死亡。

俺を轢いた人や周囲は朝からさぞかし気分が悪かっただろうに、自分が同じ立場だったら絶対恨むぞ。

え？死んだことを悲しめって？

こんなアホな死に方してどう悲しめるんだ、むしろ恥ずかしくて生きていけん・・・もう死んでるから大丈夫か。

強いて悲しむなら、そろそろ発売されそうなエウシュリーソフトの大帝賊を未プレイで死んだこと程度だし。

え、いろいろやばいからもう少しまともな奴にしろって？だが断る！

（キリ

さて、こんな長々馬鹿なこと考えてるんだが今いるところがおかしいんだよね、てつきり三途の川もしくは白い部屋or空間を想像してたんだけど、いるのは窓も扉が無いこと以外少し広めだけど普通の個室なんだ。

そこにパイプ椅子でちょこんと放置されてるのですが・・・これは待てばいいのか、自分から動けなのか判断に迷う。

そんなことを考えてると背後から突然声を掛けられた。

「なにか考えてたみたいですが、そろそろいいですか？」

驚いて後を見ると其処には天使のコスプレをした小学生くらいの幼女が居た。

・・・いや、まてまて。いくら死んだからって妄想の具現化は大変いただけない。

それにコスプレするなら天使じゃなくて、魔砲少女とかカード・キャプターか年齢的ならそっちのほうが似合うはずだ！

「むう、また何か考え始めたみたいですが、時間がないので私の話を聞いてくれませんか？」

ふむ、どうやら無視して考え事したことにご立腹のようだ。

どうやら幻の類じゃないみたいなので答える事にする、そのほうが疑問が解けそうだし。

「えっと、天使（？）で間違いないですよ？俺死んだはずだけど何で此処に？」

どう考えてもこの部屋はおかしいのでまず其処を聞いてみる事にする。

「質問ですが私は天使で間違いなく、この空間はあなたに説明する為に特別に用意した空間です」

疑問には答えてくれたが、俺の為に用意した？・・・なんで？

もしかして俺、生きてる時になんか神の逆鱗に触れる事したの？それともこの死事態、事故でしたとか？

いや、事故なら急に部屋が用意されてないだろうし・・・やっぱ逆鱗？？

そんな俺が少し青くなってるが、天使は構わず喋り疑問に答えをくれた。

「何を青くなってるか分かりませんが、おめでとうございます！あなたは神が選んだ連続転生ツアー、ドキッ危険だらけの転生先に見事当選しました！！」

と幼女が満面の笑みで答えてくれやがりますが・・・はい？なんですかその極悪な当選は？

えっと神は俺に死ぬだけじゃ足りないから、連続で苦痛を味わってこいつて事なのかこれは？

そりゃ、生前はニート生活もしたし、親のスネ齧りまくったしダメ生活三昧だったがこれは酷くないか？

俺が混乱してる間も天使は喋り続ける。

「このツアーは、神様が日ごろ退屈なので、適当に死んで人間として終わってる奴を、適当に見繕って適当に強化して、適当に作った

世界で俺TUEEEEさせて、それを横から適当にちょっかい掛けてニヤニヤと眺めるらしいですよ?」

まで、いろいろまで、なんだそのツアーは。

神が暇なのはこの際いい、いやダメな気もするが俺的にはどうでもいい。

だが何だこのツアー内容は。神の娯楽の為に一人の魂、輪廻からぶっこ抜いて新たに世界作って其処に突っ込んで掻き回せて、更にその上からちょっかいかけて楽しむって悪趣味すぎるような……。まあ、俺としては行く世界次第で楽しめそうだからいいけど。

「適当に作る世界は終わってる奴が飽きないように知ってる漫画・アニメ・ゲーム等から土台は出すそうですし、妨害要員もそれに基本順ずる見たいですから終わってる奴も楽しめて一石二鳥ってやつですよ!」

俺が考えてる間に天使が次々話していくが、所々毒があるのは気のせいかな?

しかも俺が受ける前提だし、……。まあ、話し聞く限りだと俺的には最高だけど、一応拒否できるか聞いてみるか。

「因みに……。俺に拒否権は?」

「ん?嫌なんですか?一応あるにはありますが……。お勧めしませんよ?既に輪廻の輪からぶっこ抜いてるわけですし更にコレを拒

否するって「神様の機嫌を損ねるって事ですから、よくて輪に戻って苔類か最悪単細胞生物ですね、勿論神様の機嫌を損ねた罰として強制的に人の意識を持ったままで、ですが」

ちよ、なにそれ怖い。

こんなの拒否権無しと同じだろーが！

拒否したら精神的苦痛が大きすぎるし、妨害入るとはいえ俺TUEE E Eできるんだから此処は転生しかない！

「じゃ、そのツアー受けます。それで行き先とか能力とか自分で決めれるんですか？」

行くと決めたからまずはこれだよ。

何処がいいかな？学園都市？リリカルな世界？王様とかカードの世界がいいかな？いやいや神様が飽きないようににもうちよい過激な世界じゃないとダメなのかな？

と、俺から聞いたときながら思考の海に浸っていると、天使は申し訳無さそうに答えた。

「考え中すみませんが、行き先や能力とか外見などは一切決められないんですよ・・・」

うーむ、やっぱりそう上手いこと事が進むわけないか。

と言う事はあれか？行き先や能力は神様が決めるって事なのか？

世界の相性とか妨害のバランスとか大変なんだろうな。

などと考えてると、天使の横に突然巨大なスロットが姿を現した。

「運に身を任せたほうが楽しいそうとの判断で行き先、能力、容姿等はこのスロットで決めることになってます」

まてやごらあ！！#

いくらなんでも適當すぎるだろ！という思考回路してるんだよ神様って！

そんな姿を見て、何を勘違いしたのか天使はどんどん話を進めていく。

「納得なさったみたいですし、早速最初の行き先の方を決めますね、
・・・えい！」

天使の掛声と共にスロットは動き出し次々と行き先を決まっていくなるほど、行き先は原作・介入年数・出発地点をきめるのかって、おい！一応確認取れよ！

「行き先はネギま！の原作約650年前、ヨーロッパのどこかですね！・・・しかし、下界の好みは分かりませんね、なんで漫画のタイトルに野菜？いや料理でしょうか？とにかく食品の名前をつけるだなんて」

確かに、タイトルは奇抜だと思うがよりにもよってネギま！かよ。

しかしヨーロッパのどこかてなんだよ！ん？650年前？って事は・
・。

「エヴァと何らかの接触をしろって事か？これは」

どう考えても能力の確認期間とエヴァの一族搜索時間にしか見えな
い件。

「そうなんですか？私は下っ端なのでどうでもいいんですが。魔女
狩りの天然オプシオンももれなくつくでしょうし。まあ、気にせず
能力張り切っていきましょー、まずは能力の数！」

ちょっと待て、非常に不吉な発言をさらっと流すな！・・・いやも
ういいや。

どうやら能力の部門は能力の数・どんな能力かの2種類で流すよう
だ。

「まず能力の数は・・・3！続いて能力は・・・1つ目は変身（人
外限定）、2つ目はソード・ワールド2.0の信仰を除く全能力、
3つ目は2つ目の関係でパートナーです！」

いやいや、パートナーを能力にするな！てかパートナーって能力な
のか？

しかも1つ目の変身の人外限定ってなんだよ！諦めた筈なのに突っ

王の財宝とか、どうかの貴族で魔法主義な世界とか、忍術とかなん
かの実だとか色々あるだろうに何故人外！しかも2番目のソドワな
んで2・0なんだ？無印じゃあれか、魔法の数が足りないからか？？

1つ目は随分融通が効く能力だな、これ1つで俺TUEEEEで
きるんじゃないか？

でも人外じゃどうやってても悪役だよなあ・・・、基本悪事か本体晒
してしたくない事向けって事か。

怖っ！なにそのチート。神官15でコール・ゴットすらできるじゃないか。

アルケミとか無くても十二分に酷いよこれ。
てか、今の説明で気になったんだけど・・・

「俺は無理って事だけど、ネギま！の世界で仮に信者獲得した場合
はそいつが神になれるのか？」

”俺”は神になれないって明言はされたけど、今から行く世界に
しては指定されてないからどうなんだ？

「いい所に気がつきましたね。その通り、”貴方”は別世界に転生
する義務があるので神への昇格は不可能ですが、それ以外のコレか
ら作られる世界の住人は貴方が伝え、育てれば神官技能以外でも神
になる可能性はありますね・・・一応。ただ、始まりの剣は作られ
た世界には当然存在しないのでソドワの世界よりは格段難しいです
し、可能性があるとすれば神に氣に入れることですかね？ただ神
様も本来の世界の方が優先ですし本当に可能性があるだけですね。
他にも説明不足な点はパートナーにでも聞いてください」

まあ、そりゃそうだよな。異世界でそんなに簡単にソドワの神様が
生まれたらえらい騒ぎだ。

しかもぱつと神候補思い浮かべるだけで、紅き翼か薬味だしなあ・・・
・布教活動はおおっぴらには出来ないな。

あれらに万が一でも神になられたら恐ろしい、ナギならまあル＝ロ
ウドに近い存在になるだろうが、薬味は予想がつかん。

可能性って意味で第三の剣とかそれ以降てのが有力そうだけど、あ
れの内側に確か闇があつたはずだから第二の剣て事も考えられるか

ら絶対無理だな。

しかし、パートナーに聞けって完全に便利屋扱いだな。

「最後の3つ目ですが、これは後回しにして容姿決めちゃいましょう。・・・そいや！」

パートナーは後回しか・・・、でもどんな容姿になるんだ？

ルーレットを凝視してみると、ケストラー・セフィロス・ミルドラス等の文字が・・・どこの悪役だよ！

しかもセフィロス以外、魔王だし！せめてまともな人型を祈るしか・・・もし酷かったら暴れてやる。

「容姿は・・・冥王フィブリゾに決定！なんかちっこいですが見た感じ身体能力は高そうだし変身もありますし、大丈夫でしょう」

よし！容姿は当たりだ、こうして改めて見てもフィブリゾは魔王に使える5腹心には見えないな。

だって年の頃11〜2歳の、緩いウェーブのかかったつややかな黒い髪をした少女と見まごう美少年を誰が魔王の腹心だと疑う？まず俺は無理だ。

「名前は貴方が新しく決めてくださいね、後素体が入らないのでネギま！仮契約にも若干差し支えるのですが、それも後でパートナーから説明受けると思います。・・・っと、もうこんな時間？急が

ないと」

どうやら、名前をじっくり考えさせてくれる時間も無いようだ。少し考え込みすぎたか？

仮契約とかも気になんだが聞ける雰囲気じゃないから自重するか。

「パートナーは容姿以外は固定なんで、さくつと回して決めちゃいますね。回してる間に能力の説明も併せて行いますっ！」

能力は固定って事は1か2のどちらかに密接な関係があるのかな？
まあ、聞けばわかるか。

「能力の方ですが3つあって1つ目はソード・ワールド2.0の神官技能含む全能力・全アイテムの保持ですね。一部触媒とか向こうには存在しない物があるので、パートナーから補充してもらってください。2つ目は召喚でこれはソード・ワールド2.0に存在する全ての魔物の中から1日1回1種類を任意の数だけ召喚して使役出来る能力ですね。ある程度力と数がないと神様さくしゃがつまらないそうなので、ある程度は自重して欲しいですが好きなだけ召喚してください。最後の能力ですが、これは無事ここに戻ってきたら発動する能力なので気にしなくても大丈夫です！」

なんか一気にいわれたから3行でまとめると・・・。

- ・1つ目は貴方のソドワ能力の上位版だよ！
- ・2つ目はソドワのモンスターを使えるよ、やったね！

・3つ目はこれは今の貴方には禁則事項です！
て感じか？3行目が若干違う気もするが、まあ意味は同じだし問題ない。

てな感じで早口で説明されてるうちに容姿が決まったみたいだが・
・出てきたのは古ぼけた本、本？book？？

「さて、容姿が決まったみたいです。じゃ、この子の名前を決めるのとか話し合いとか向こうでしてください！」

なにをとち狂ったんだこの幼女天使は！誰がどう見てもあれはあれは本であって、断じて話しあうものではない・・・てなんですかその某撲殺天使が持つような危険な武器は・・・え？天使の標準装備で貴方を送る為に必要だった？

そんなので殴られたら2度目の昇天確定だろってアッー！！！！

俺の抵抗むなしく、幼女天使に撲殺され意識を失うのだった。

2 パートナーだよ！

目が覚めると泉が綺麗な森にいました、現在ナナシの俺です。

随分手荒かったけど、どれどれ・・・水鏡に映る自分はフィブリゾそっくりだ、やったね！

でも、この外見で俺口調はいろいろ勿体無いから普段は『僕』で通すか。

外見ガキで俺口調じゃ折角できるぶりっ子が台無しだしな。

「さつて、いきなり手荒く送られたけどパートナー（？）はどこに居るのかな？」

探したらすぐに見つかりやがりました、ええ間違いなく本です。

ぱつと見は新品の外装が皮製の質素な本ですね。

これはパートナーというより最早説明書では？とりあえず手にとつて確認してみますか。

「えつとタイトルは・・・幻想の書？まあ、ソード・ワールドの世界観持つてるならおかしくn・・・って、うわ！」

タイトルを読んで本を開こうとしたら、突然本が発光し始めやがった！

慌てて手放したが、本の発光は収まるどころかどんどん光を増して

いきやがる。

つたく、天使はどんな奇天烈な本を寄越しやがったんだと思ってた時期が自分にもありました。

暫く目を閉じて、光が収まった頃に目を開けた先には、ネギま！には居るはずのない『人』が居た・・・。

「っ・・・、いったい何・・・が・・・え？ヴィー・・・タ？」

発光が収まり目を開けた先には、投げ捨てた本の姿は無く変わりに紅の鉄騎、鉄槌の騎士ヴィータの姿がそこにあった。

いやいやいや、おちつけ俺いや僕、なんでヴィータだ此処に居るんだよ。

ここはあれか？リリカルな世界なのか？それとも何かの原因（例えばロストギアとか）でリリナノとの平行世界が繋がったのか？それともあれか？天使か神様のうっかり（笑）なのか？？

結論から言えばそのどれでもなかったのだが、突然のヴィータの登場で混乱してる僕に、ヴィータ（？）は更に爆弾を叩きつけた。

「問おう、おめーが私のマスターか？」

は？なんとおっしやりました？マスター？Fate？なに言い出すのですかこの子は？こんな所で聖杯戦争でも始める気ですか？てか貴女リリカルなキャラで月な世界には関係ないですよ？

僕は確かにヴィータは好きだが、ヴィータには既にはやてという立派（？）な主が居るし、なにより貴女は夜天の書の防衛プログラムですよ？流石に無許可に他人の子（？）を誑かすほど堕ちてはい

ないと思いたい。

「うん？この言い方だと間違いないのか？やっぱタイトル名乗らなきゃ私はだめなのか？・・・仕方ない、わかってないおめーの為に改めて問うぞ、おめーが私「幻想の書」のマスターか？」

ん？幻想の書？てことはヴィータじゃない？

どうやら目の前のヴィータっぽい子は、天使が寄越したパートナーの人型形態てことか？

そして、よく見ると・・・帽子の飾りであるのろいうさぎの帽子がアナ口熊になってやがる。マイナーチェンジなのだろうか？

とりあえず答えておかなければ今にも噴火しそうだ。

「あ、ああ。君が幻想の書なら僕がマスターで間違いないよ」

「よし、おめーがマスターだな。んじゃ次は名前を教えてください、マスター登録したいからな」

マスター登録？これまた聞きなれない台詞だ。

どうやら名前が必要なようだ・・・あの天使が急かしたせいでまだ決めてないんだが。

うーむ、仕方ない。適当でいいか、ヴィータ（仮）の頼みなら断れるわけが無い。

「ガロード・デイルだ、よろしな！」

「ガロード・デイルか・・・っておいおい、いくら私達の外見がパ・リだからっても少し捻ろうという意味はないのかよ」

う・・・、すまん！ネーミングセンス皆無な僕にはこれしか思いつかなかったんだorz
てか何でヴィータ（仮）がガン・ムネタわかるんだよ！おかしいですよ！！

「何かいいたそうだから先にいつとくが、マスターの知識は一通り私も知ってるからな。いざって時の保険と、意思疎通の最適化の為にそうだよ」

な、なんだと・・・。てことはあれか、俺のやってたエロゲーとかそんな知識までフィードバックされてるって事か？

ヴィータ（仮）恐ろしい子！

「うん、マスターの考えてることが手に取るように分かるんだが、まだマスター登録終わってないから自分の世界から帰ってこいな」

ヴィータ（仮）に軽く怒気を含んでいることが目に見えてわかったので、ふざけてられないか。

「わ、わかった。で、後は何が足りないんだ？」

「とりあえず私の名前だけだな。マスター、さっきからぜってー私のことヴィータ（？）だのヴィータ（仮）だのつけてただろ。私とヴィータは別人だからややこしいし、私がないがしろにされてるよ。うだからさっさと決めやがれ！」

むう、僕としたことがすっかり機嫌を損ねたしまったようだ。

確かに自分と姿形が殆ど同じ人間が居て、自分の名前を呼ばれずに別の人間の名前だけで呼ばれたらすげー嫌だからな。

これは完全に僕が悪いな。でも、名前か……。

「……よし、今日から君はフィオナ、フィオナ・デイルだ！」

「フィオナ・デイルだん……って、マスターと私、名前同じかよ！なんだ？夫婦か？嫁か？性奴隷か？私犯されるのか？マスターってやっぱり体目当てなんだな！！」

うーむ、外見が近いから兄妹で通そうと思ったんだが、此処まで拒絶反応が出るとは。……若干ライカさんでも混じってるのか？てか僕、完全な性犯罪者扱いだよね？流石にそんなことしてないよ？ぎりぎりYesロリータ、Noタッチ！を守ってきた変態というなの紳士だよ！

「誤解されてるみたいだけど、別にやましい気持ちはないからね？
外見年齢が近かったから兄妹で通そうかと思ったんだけど、そんなに嫌なら別の名前にしようか？」

「・・・へ？い、いや冗談に決まってるじゃないか。うん、兄妹が年齢的には違和感はないな。んじゃ、さくつとマスター登録終わらせるぞ！」

あれは絶対本気だったような・・・。まあ、触れて欲しく無さそうだし本契約を済ませますか。
にしてもヴィータは何で僕の正面なんか立つのだろうか？

「汝ガロード・ディール、天上との契約により我フィオナ・ディールとの永久の契約を此処に締結するものとし、儀式を行う！」

といきなり神々しいまでの気を纏い・・・僕に突進してきた。なんです！

当然ながら突然の事に体が対応できるわけも無く、僕とフィオナの身体は重なり僕のこの身体でのファースト・キスの奪取と、頭突きのプレゼントをくれました。

「いてて・・・。とにかく、ここに契約は成った！我フィオナ・ディールはガロード・ディールを永久の主と認める！」

「・・・一つ聞くが、頭突きも契約の一翼をになってるのかな？」

だとしたらその契約は根本からおかしいと思うんだ、うん。

血液交換とかなら分かるけど、頭突きってどんな意味があるのか気になる。

「う・・・、あれはマスターが私をいつまでも名前をつけなかった罰だ！」

そう返してきたか、そう言われると僕が悪いんだから勝ち目はないか。

「ごめんごめん、わるかったって。これから宜しくなフィー」

「わかればいいんだよ、ってフィー？それは私の愛称か？」

「そうだよ、向こうは愛称は厳しいだろうし差別化が図れるかなと思って。後僕の事はマスターじゃなくてガロードって呼んでくれなかな？」

僕だって、まったく考えなしに名前を考えたわけじゃない。そりゃ、自分の名前は安直だけど、だからってこれから共に歩くパ

ートナーをないがしろにしたいしな。

「フィー・・・、フィーか。うんこれから宜しくな、ガロード！いや、この場合はガロード兄ちゃんとも言えばいいのか？」

ブッー！！！！な、なんてことをいいやがりますかこの子は。
や、やばい鼻から何かが溢れてきそうだ・・・、これは破壊力が高すぎるだろ！

「い、いや、普通にガロードでいいから、いやお願いします。可愛すぎて出血死するから頼む！」

「な、なにいつてんだよ馬鹿ヤロー！」

いや、だっていくらなんでもいきなり可愛い妹が出来ただけでも出血ものなのにそのうえ、あんな台詞を言われたら多分道中で出血死は免れないからな。

俺の反応は別におかしくないはずだ。

「まったく、んじゃ天上の奴が言いそびれたやつや補足を早速説明するぞガロード」

「ああ、頼むよ」

一通りは教えてくれてたけどどっか抜けてたからな、あの天使は。天界は人材不足なんだろうか？

「まず初めは・・・そうだな。仮契約と本契約のの事でも話しとくか」

「うーん、やっぱり種族的な問題？」

この体は魔王とはいかなくてもその幹部5腹心の1人の身体だから当然、上位魔族なわけだ。
やはり人と契約したら悪影響でもでるのか？

「その通り、まず本契約の方だがわりーがこっちは諦めてくれ、下手に強すぎるパイプを作るとそいつが確実に魔族化して更にこっちに襲い掛かってくるかもしれないからな」

守ってくれるはずの従者に襲われたのなら本末転倒だし、これはしかたないな。

「じゃあ仮契約なら何人でもいけるの？」

「いや、仮契約の数は問題ないが、魔族化しない代わりにお前の眷属となってお前と生涯を共にしちまうようになるな」

「それって、半不老って事か？」

「そうだな、不死じゃないから自分の気持ち次第で死ねる分、幾分か楽だろうがきちんと人は選んでやれよ。でもだからってまったく選ぶなどはいわないからな！」

この身体になった対価って奴か。まあ、しょうがないよな。

しかし、フィーは優しいな、きちんと僕の事を考えてくれてるみたいだ。

「んじゃ、次の話しに入るが・・・ガロード、おめーなにを信仰したい？」

「へ？信仰？？」

突然の宗教勧誘か？いや、待て待て多分アレだ。ソード・ワールドの宗教だな。勿論2・0の方の。

2・0となると・・・、やっぱりギリギリ発動しても大丈夫で信仰的にも間違つて無さそうなアレかな？

「大神、ル」ロウドかな？教義が『自由』だし、そんなに問題ないと思うんだ」

「大神か・・・コール・ゴットが使いたいなら小神までにしといた方がいーぞ。ガロード死亡」この世界でのゲーム・オーバーとみなして次の世界に行くしな。それに此处では全員知名度0だから魔力（MP）消費なんて差がないな」

それなら使えないし小神のほうがお徳だな・・・、なら一部では少女神とも言われる君に決めた！

「なら、小神ルーフェリアにするよ」

「ガロード、だからおめーの欲望は見え見えだつての・・・まあ、いいんだがよ」

つく、少女・幼女が好きで何が悪い！

（一応）犯罪ごとなんかに手を染めてなんか無いのに！！

「犯罪者予備軍って言葉知ってるか？ガロード」

「はい、フイー。次の説明はなんですか？」

あー、あー。僕は何も聞こえないー。

「ったく、ろくでもねーマスターだな。ほら特製のルーフエリアの聖印だ、大事につけとけよ。まったくかわいそうな神様だ」

聖印をつけた瞬間、はっきりとは言えないが確実に何かが変わった感じがした。これが神官になったって奴か？しかし、明らかに精霊の声っぱいのも聞こえるんだが・・・。

「どうだ？その聖印つけたら、ソード・ワールド系の全ての能力が開放されるらしいから劇的に変わっただろ？」

それが原因だ！なるほど、つまりフェアリータイマーの技能で分かるようになったって事か。

他の能力も機会があったらどんどん試さないとな。

「よし、無事能力が定着したみたいだし、さっさと移動するぞ」

「なんだよフィー、もう少し位試しても・・・」

そんな浮かれてた僕にフィーは、目の覚める特大の言葉を掛けてくれた。

「馬鹿、ガロードはマグダウェルが吸血鬼化する前に見つからなくてもいいのか？」

「っ、そう言われたら動かざる得ないか」

「気をつけるよ？年数なんて曖昧なんだから、気にしてるんならこっちを優先しないとな。なーに、道中訓練すればいいじゃねーか」

「そいえば吸血鬼化って年数結構大雑把だし、早めに見つけるに越したことはないか。」

「まったく良くできたパートナーだ、僕には勿体無いくらいに。」

「ほら、ぐずぐずしてると置いてくからな！」

「ちょ、まってよフィー！」

2 パートナーだよ！（後書き）

まさかのヴィータ似！・・・痛い、やめて石を投げないで！！

さていきなり始める次回予告は、早速エヴァの出番？魔法の打ち合い？果たして2人は無事エヴァに会うことが出来るのか！？こっご期待！

3・エヴァ？だよ！（前書き）

2 / 7 6 : 3 9 エヴァの年齢を間違えてると気づく。吸血鬼化を10歳の誕生日じゃなく9歳の誕生日にしてたorz

また、吸血鬼化を誕生日翌日と勘違い。なったの当日の朝なのか・
・。なので速攻、微調整。・・・誕生日の日数間違いは痛かった、
タダでさえ不自然なのが更にやばくなったのを重ねてお詫びします。

3・エヴァ？だよ！

あれから37年後ようやくエヴァが預けられた城を見つけたわけだが・・・、既にエヴァは9歳で潜り込んだ翌日が10歳の誕生日の前日でパーティーとか・・・危なかったぜ。なんたつて、指摘されなきゃ10年は修行する予定だったからな・・・そんな事してたら時間切れ確定だったぜ。

因みに現在の僕とフィーは使用人（見習い）です。・・・なんでそんな面倒な事してるんだつて？

当たり前だろ！エヴァは貴族の大事な一人娘、正直も少し兄弟作らないと貴族的にはヤバイと思うのに溺愛してるみたいで、こんな人様の城に預けられてるのに盛大なパーティーとか開かれてるし、外に出てるときの護衛の数がやばすぎる、城の兵の三分の一つてなんだよ！

その為、当初旅人を装って接触を図ろうとしたけど一人で居る機会なんてまず無いし断念。あーでもない、こーでもないで悩んだ末に使用人（見習い）として潜入しました。んで、今何してるかといえば・・・。

「おい、新入り！この料理を向こうのテーブルに置いとけ！絶対傾けたり、落したりするんじゃないぞー！」

「は、はい！」

はい、聞いている通り誕生日の料理を運ぶお仕事ですね。

なんでこんな忙しい時期に疑いもせず疑いもされずに雇われたか

つて？そりゃ、フィーと僕との名演技で泣き落t・・・懇願したら1発OKでした。

あ、後ソード・ワールド系の能力も一通り試せました。正直15Lv舐めてました。どう考えてもありゃ人外ですよ！

物は試しでちよつと大目（約1000人規模？）のガラの悪い傭兵達が強請つて来たので、2人グラップラー技能と後半の搜索のためのスカウト技能だけで1時間もかからずに片付くとか・・・どんな化物だよ！！しかも全然本気出してないし、息も切れてないとかとかおかしいですよ！！！！

「新入り！もたもたするな！！次はこつちだ！」

「はい！」

はあ、心の中でこう色々叫んでますが、お仕事は絶賛続行中です。こんな胡散臭い兄妹を理由も聞かず使用人にしてくれるとか、他じやまずない破格の待遇してくれるこの城に感謝ですね。

因みに、兄妹にしたんですがものすごく目立ってます・・・。理由は僕の髪色。フィーはなんか受け入れられたけど、黒髪は大抵NGでした。

過激な信仰の場所では悪魔の使い！とか言われて昼夜問わず追い掛け回されたのは焦った。流石に山賊とかと違って普通の村人も居るから問答無用で抹殺！とかしたくないし。

だから、ここも信仰はしてるはずなのに普通に受け入れてくれるだけでも感激ものですよ。

「新入り！それ運び終わったら今度はこの料理だ！ぐずぐずするなよ！！！」

「わかりました！」

会った時は優しい方だったのですが、今は勤務中で更に猫の手も借りたい状況なので皆さん気が立ってるようです。

因みにフィーは更に奥で料理のお手伝いをしています。あの身長で料理を運ぶお仕事は流石に無理と判断されたようです。

忙しさMAXのこの状況もようやく収まり、ただいま就寝時間です。え？場面が早すぎるし、エヴァ出せて？無理だよ、所詮子供だから出来ることが限られるし、パーティーの主役にどう接触しろ！因みに飛び入りで入ったおかげでフィーとは同室です。まあ、こんな小さな兄妹だし問題ないと思われたのでしょうか。正直別々だと次に行動に移れないので助かりましたが。

「よし・・・、皆寝静まったよな」

「いんや、まだ寝てねーやろーが居るみたいだぜ？しかも怪しげな魔力漂わせてるし、突入するか？」

「げ！もう始まつてるのかよ！！」

まさか、もう手遅れでしたって落ちじゃねーだろうな！

「よし、急いでいくぞ!!」

「了解！一気にいくぜ、テレポート！」

フィーは使用人（見習い）になってすぐに領主様達の部屋以外に案内されたようです。どうやらお部屋直しとかを主軸に考えてたようですが、こつちにとっても好都合で一度見た場所ならテレポートすれば一瞬だから助かります。

さて、怪しい魔力の元についたわけですが・・・其処にはこれでもかつて程に怪しい魔法陣と、自分達を見て固まってる貴族様・・・たしか遠い親戚かなにかだったず。

「き、貴様誰の許可を得てここに入った！いや、それ以前にどうやって入ってきたんだ!!」

どうやらものすごくテンパっていらっしやられますが、とりあえずこの起動してる魔法陣をどうにかしますか。とりあえずこれでダメなら即抹殺して、いけたらOHANAHSIしてから抹殺ですね。

「答える義務なんてありませんよ。パーフェクト・キャンセレーション！」

僕が呪文を唱えると怪しい魔法陣は消え去り、貴族様はまた固まっ

てしまいました。ネギま！の魔法（？）に効くかは疑問でしたが、無事無効化できたみたいで一安心です。

まあ、いきなり呪文一つで仰々しい魔法陣が消されたらたまらないからな。

「な、なんて事をしてくれたんだ貴様！お前がいったい何をしたのか分かってるのか！！折角私の悲願がもう少しで成就される所だったのに・・・！」

フリーズから立ち直った貴族様はいきなり怒り狂い始めました。まあ、どれ程の手間があつたかは不明ですが、真祖の吸血鬼化なんて並大抵の呪文じゃないですからね。

しかし、そんな並大抵じゃない呪文を消されたのなら、まず怒り狂う前にすることがあるだろうに・・・例えば目の前のもの達から逃げるとか？あまりの事に怒りで我を忘れてるならいいけど、おつむが弱いほうだったら面倒なんだが。

「なあ、ガロード。もうコイツ殺しても大丈夫なのか？」

「こら、フィー。いくら最終的には殺害するにしてもまだ早すぎるよ」

思考している間にフィーが物騒な事を言い始めたが・・・、まだ動機と入手経路聞いてないから自重してもらわないと困る。

「ふん！貴様程度がこのギルバート・フォン・アーチボルトを殺すだど？そんなことが出来るならやってみろ！リ・ルラ・フォン・ネイキッド 魔法の射手！！ 雷の一矢！！」

怒りで我を忘れてると思ったのですが、杖を取り出すといきなり魔法の射手を唱えてきやがりましたよ奥さん。

流石に岩も砕ける魔法に当たりたくないので迎撃します。・・・でもソード・ワールド的には食らってから反撃の方がいいんだろうけど、避けれる痛みは避けたいしね。

でもあれか？魔法の射手が1本だけって、どんだけ疲れてるんだ？まあ温存なんだろうけどさ。

「エネルギー・ボルト！」

相手の呪文も初歩で更に1本だけだし、Lv1でも十分なはずだ！・・・そう思ってた時期がありました。

しかし・・・、エネルギー・ボルトと魔法の射手が重なり合ったかと思えば、エネルギー・ボルトが魔法の射手を粉碎、勢いそのままで貴族様にぶち当たって爆発。

見事杖を持った方の腕を吹き飛ばしたよ！やったね！・・・あるえ？何で相殺目的で腕が吹き飛ばんだ？あれか？こいつは実は見習いとかそんなクラスだったのか？

「ぎゃああああ！！！！！！私の腕が、腕がー！！！！！！」

ちっ、腕が1本消し飛んだせいでわめき出しやがった。こうなると城の住人や、他の貴族が起きてしまっじゃないか！

「おいおい、ガロード。腕吹き飛ばしてどーすんだよ？やかましいし、これじゃのんびりOHANASHIできないぞ？」

呆れ顔でフィーが僕を見ってくるが、冤罪だ！

いくらなんでも相殺目的で放ったエナジー・ボルトで腕が吹き飛ばとか誰が予想できるんだよ。

「しかたない、フィーこいつを連れて適当な場所にレポートしてくれないか？」

「ん？そりゃいいが、もうここに用なんて無いだろ？まさかエヴァンジェリンと会話するまで離れたくないとか言い出すのか？」

「そうじゃないよ、フィー。エヴァンジェリンの脅威が本当に除かれたのか確かめただけだよ」

そう、真祖化はとりあえず阻止できそうだが、もうありえないだろうがこいつ以外にこんな馬鹿げた事をされたらたまらないしな。

それにどうもコイツは小物臭が強すぎる。こんなのが真祖化なんて大それた事考えつき、尚且つ実行可能にできるとか怪しいからな。

「ん、わかった。私の変わりはどうするんだ？」

「とりあえず何か丸めてごまかしとくよ、でもソレを運び終わった
らすぐ戻ってきて欲しいかな？」

「ぐううう・・・き、貴様らこの私をどうするつもりだ！」

本当にやかましい貴族様だ。とりあえず僕はこの貴族を素早く気絶
させるとフィーの方に渡した。

どうも外が騒がしくなってきたし、そろそろ人が着そうだから退散
しないかね。

「んじゃ、後でなガロード。テレポート！」

「フィーも行っだし、テレポート！」

こうして僕達は部屋から退散したわけだが・・・当然ながら大騒ぎ
になった。

まあ、当たり前と言えば当たり前だ。パーティーので集まったその
夜にここに泊まった貴族の一人が悲鳴だけ残して行方不明。更に、
入った部屋には多量の血痕。

これでは騒ぎにならないほうがおかしい。当然、当主や預けられて

るエヴァ、他に宿泊された貴族の安否やメイドや執事、使用人全ての確認が行われた。

少々危なかったが（どうも運ぶついでにOHANASHIまでして戻ってくるのが遅れたため）これを何とかごまかしきり、数日後、城付近の森の中で片腕を無くしてボロ雑巾のようになって死亡してるギルバートの姿が搜索中の城の兵士によって発見されたらしい。

まったく・・・OHANASHIする手間が省けたのは有難いが、誤魔化すほうの身にもなってほしい。

まあ、OHANASHIの結果、聞けた話によれば真祖化を狙った隣の領主で、預けられた子を利用して城の人間や親しい貴族を排除、全ての罪をエヴァになすりつけこの土地を併呑する狙いがあったようだ。

なんて酷い人間だと思ったが、同時に実行を他の貴族にさせて自分は苦も無く土地を得れる手だと頭は回るやつとも思ったな。

で、相手もわかったし、城からお暇を頂いていざ、潰しに行こうと思ったのだが、何故かフィーから待ったがかかった。なんでさ？

「ガロードや私が襲いにいくと確実に賞金首になるぞ？それに今の時期に暇を頂いてたらどの道ばれるな」

悔しいがフィーの言うとおり間違いなく賞金首になるだろう。

この時期から賞金首になったりしたら、悪目立ちもいい所だし何より後の予定してる交渉ごとに大きくマイナスだ。

「んじゃ、どうするんだ？僕やフィーは潰しに行く領主の土地なんが入ったことはないしレポートは使えないのに」

「んなの私なんか召喚して潰させにいけばいいじゃねーか、召喚は少し離れた場所にレポートしてから行えばねーし、いくらなんでも化物を使うとか誰が想像できるんだよ」

フィーに言われるまですっかりそのことを失念してた……。そういえば便利な召喚って能力があったな。

さて、どの化物を送り込んでやるのか……。エヴァを真祖化させ、全ての罪をなすりつけようとした奴なんかは遠慮はしないが、強すぎる城だけじゃなくて付近まで一緒に吹き飛ばしそうだし。

結局悩んだ末に、ドラゴネット1体を贈って差し上げることにしました。やったね！倒せばドラゴンキラーとして伝説になれるね！

因みにドラゴネットは産まれてから100歳未満の幼体だが、空も飛を飛べるしブレスだってはけるから備えのない城なんてひとまりもないはずだ。

え？過剰戦力だろ？まったくもってその通りですが、竜が現れたって事が大事でそれを理由に暇も貰えるだろうし一石二鳥になるはずだ！

「じゃ、フィー明日早速ドラゴネット1体を召喚して攻撃してもらってくれ」

「おいおい、ドラゴネットって……。国が動いても知らねーからな」

「大丈夫だよ、後でちゃんと回収すれば100年もすれば収まるっ

て！」

「まあ、それもそうか」

随分大雑把な計画に最初フィーは不満そうだったが、長生きするんだし些細なことだと思ってくれたようだ。

まあ、普通の人間なら天変地異が起きたみたいは大騒ぎするだろうが・・・まあ、不幸な事故だと思って諦めてもらうしかないな。

「んじゃ、明日ドラゴネットを召喚するからな、私が居ない間ごまかし頼んだぜ」

「わかってるよ、でもなるべく早く帰ってきてくれよ？もうフィーの声真似なんてこりこりだからな」

3・エヴァ？だよ！（後書き）

あれえ？今回こそ原作キャラ出す予定だったのに、気がつくときエヴァの出番がないままフェードアウト。

・・・エヴァファンから石とか宝具とか投げつけられるかもしれんがエヴァは出番はないまま退場、どうしてこうなった！

後今回、初めてソードワールドの呪文が2つ使われたけど、詠唱は？発動体は？A・詠唱はルルブだけだから魔法の名前しかなくて割愛しました><独自で作っても良かったんだけど、それで元の魔法が分からなくなったらこまるので。発動体は本編で描写がないです
マナリングが腕輪です。

さて投げつけられる前に次回予告！放たれたドラゴネット、恐怖するヨーロッパ！そして初変身する主人公！2人はこの事態を収拾できるのか！次回を待て！・・・エスクカリバーはやめてー！！

4・賞金稼ぎだよ！

どうもドラゴネットのによる混乱は分かってたけど、分かってなかったガロードです。

ドラゴネットを放つてから大体50年前後、原作550年前、西暦に直せば1450年頃になったよ！

あの後、伝説と言われてた竜が突然隣の城に強襲・城を更地に変えたせいでヨーロッパ中が恐慌状態に陥ったよorz

いや、ある程度の混乱は望んでたからいいんだよ？でもね、まさかローマ教皇直々に討伐命令を各国に出すとかどんだけだよ！

命令が出た各国も伝説のドラゴンキラーの栄誉と、ドラゴンの討伐した時の莫大な報奨に目が眩んで、ヨーロッパ限定だけど戦争が一時全部停戦してドラゴン退治に殺到って！

なんか瀕死の帝国と突然の停戦って事で結構な騒ぎになってたし！
！ちなみに、ドラゴネットは後でこっそり回収したから討伐はされてないよ！

おかげで物騒だからって理由で暇は簡単にもらえたけど、賞金稼ぎの他に聖職者まで来て何度か悪魔の使いとか言われて追い掛け回されたよ！

うん、自業自得なんだけど納得いかねー！で、どうしたかと言えばこのままだと、どの道賞金首確定（外見だけで）になるから変身を使ったわけですよ。

で、何に変身したかと言えば・・・。

「その金髪似合ってるぜ、ガロード」

「うう、こんな事で変身使うとか。これじゃヨーロッパ離れるまで

元の姿がとれないじゃないか」

「いいじゃねーか、王の財宝だっけか？アレも使えるんだし」
ゲート・オブ・バビロン

そう、今僕はギルガメッシュに変身しているのだ！

なんでギルガメッシュになれるのか？そりゃ、ギルガメッシュが”人外”に該当するからだよ。

ギルガメッシュは自身が嫌い否定してるとはいえ神性：Bの持ち主、普通の人間が神性なんて持つてゐるわけが無いから十分人外の資格はある。

いつそ子供バージョンになってやろうかと思ったが、魔女狩りが活性化して子供2人旅だと変に疑われて裁判に掛けられてはたまらないので通常のままで現在にすこしてゐるんだ。

ただ・・・、稀に人攫いに間違えられるのだけは勘弁して欲しい。

いや、子供1人に金ピカの甲冑着た人間なんて不信人物であつてゐるだろうけど、人攫いは酷すぎる。

「んで、この道で本当にあつてんだらうな？」

「うん、この先に山賊が出現するみたいだよ。・・・”悪魔の力”を使うね」

今、僕達が何をしてるかといえば、ぶっちゃけ賞金稼ぎである。

子連れの悪趣味な賞金稼ぎが居ると言うことで悪い意味で話題になつてゐるが、これは仕方ない。流石にフィーが一人だけだと人攫いの

被害にあいかねない。

この時代はこの世界だけかもしれないが思ったより変態が多いようで、子供の誘拐がちよくちよく起こる。まあ、フィーなら余裕で返り討ちに出来るが後が面倒である。

で、仕方なく一緒に探して回ってるのだが、ちよくちよく同業者や聖職者に説教を受けてしまう。

だが、信用できる人間も預ける場所もないし、なにより賞金稼ぎ自体”ある目的”さえ達成できれば、もう用はないのである。

因みにエヴァの賞金首化の話もなく、エヴァが世話になっていた城などは健在だそうだ。（竜騒動で暫く注目を集めたので情報が得やすかった

「お、少し遠いが魔力の反応があるぜ距離にしたい20Mくらいか？、多分奇襲が来るだろうな。今のうちに準備しとくか？」

「いや、今回は準備無しでいこう。魔法世界じゃないし大物なんて居ないだろうから、どの程度の相手がゆっくりみたいしね」

「OK、そういうことなら私はゆっくり見学させてもらっさ」

考えても見て欲しい、今僕は何に変身してる？そう黄金律という、こんな危険行為に身を晒さなくてもいい素敵能力があるではないか！ただ、現在の目的は金だけではないので賞金稼ぎを併せて行っている状態だ。では何故してるのか、答えは至極簡単、ネギま！の魔法を習得する為だ。

もっと詳しく言えば、ネギま！の”認識阻害”の魔法と”記憶消去

”の魔法である。

何故この2つなのか？別に犯罪がしたいわけじゃない。むしろ逆である。これからする”事”にはどうしてもその2つが必要なのだ。そんな無駄なことを頭の隅で考えてたせいだろうか？それともこの体になって慢心しすぎたせいだろうか？魔法の射手程度だと思っていた相手の攻撃は大きく予想を裏切ることになる。

「サー・ゴル・デス・ウィル 来れ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧
！！！！」

っ、雷の斧だつて！当たったら、ただじゃすまないじゃないか！！
だが今からじゃ間に合わない！
まさかの雷の斧に一瞬固まってしまい、僕の目の前には雷の斧が迫
つてきて……。

「馬鹿、なにぼさつと突っ立てんだよ！！」

「っ……、ごめん」

「まったく。慢心するのもいいが、お前までそれが理由で死んじまっ
たら情けなさ過ぎるだろうが」

フィーが全力で引っ張ってくれたおかげで、直撃こそ免れたものの、
左腕に掠り少くないダメージを貰ってしまった。

でもこの体だギルガメッシュし戦闘には問題ないだろう、そう思って僕は奇襲してきた方を睨みつける。

「ふむ、あの呪文を見て生きていられるとは中々幸運なようだね」

其処に居るのは少し薄汚れたいかにも魔法使いですって主張したようなローブを着たおっさんがいた。

「貴様、誰に対して手を上げたと思ってるのだ雑種！」

いきなり攻撃してくる相手に好意的に接する必要はないので、高圧的に接するのは当然だよね。

まあ、完全に頭に血が上ってるわけではないのでギルネタする余裕があるけど、直撃したら何しでかしてたか僕でもわからないや。

「ふむ、では問うが君は誰なのかね？生憎私には君みたいな患者に知り合いは居ないのだがね？」

「うわー……。すっぱー物言いだなあいつ。で、どう返してやるんだ？」

フィーが怒鳴った顔から一転してニヤついた顔をこちらに向けてくる。

どうやら後で僕をからかうネタにでもするのだろう。

「ほざけ！貴様ごとき雑種が俺の名を問うだと、貴様命はいらんとみえる」

「ふむ、それは恐ろしい。では君と邪魔をしてくれたそこのお嬢さんには仲良く死んでもらうでしょう。・・・やれ」

おっさんが最後に短く命令すると、今まで隠れたと思われる山賊達ザコが一斉に湧き出てきた。

「どうすんだ？なんか一杯沸いて出たぞ？」

「ふん！有象無象がいくら集まろうとも俺の敵ではないわ！王の財ゲイト・オブ・バビロン宝の前にひれ伏すがいい！」

正直、雑魚戦するのも面倒だし、この身体で有効な攻撃ってコレと乖離剣程度だし、ぶっちゃげ使いかってが悪い。

だって、乖離剣エアの真名開放とかオーバー・キル過ぎるし、また各国が大騒ぎする。

まあ、そんなこと考えてる間に開放した王の財宝から様々な武器の原典が出てきて贅沢な串物に変えていく。

あ、おっさんさっきまで高圧的だったのに今は真っ青だ。まあ、誰だって100は超える味方が次々と串物になって絶命していくのを

見たら青くなりますよね。

「き、貴様何者だ！それになんだ、あのデタラメな攻撃は！！」

「ふん！雑種」ときに答える必要などないわ！！」

軽い錯乱状態に陥ってるおっさんが声を掛けてきたから、律儀に返してやる。

え？質問も返してあげろって？そんな無駄なことはしない！

「すっげーな、青くなったと思ったら今度は赤くなったぜあいつ！」

フィーはころころ表情が変わるおっさんに大変満足しているようだ。まあ見ていて飽きないが、フィーの物言いに不満があるようで更に呪文を唱えるみたいだ。

「ん？おっさん、この私と勝負するつもりなのか？」

「ほざけ、糞餓鬼が！サー・ゴル・デス・ウィル 雷の精霊 30
0柱！！ 魔法の射手！！ 連弾 雷の300矢！！」

おっさんが勢いよく唱えると、魔法の射手300矢が一斉にフィー

に殺到していく。

だが俺は手を出さない、フィーの顔が手を出すなと僕に楽しそうな笑みを浮べてきたからだ。

「私にそんな攻撃なんて届かないぜ、カオスショット！」

フィーは僕がやったように相殺を選択した様で、殺到する300本の魔法の矢と複数の精霊の力を凝縮した塊がぶつかり・・・完全に相殺してしまった。

「ちつ、相殺だけか。カオスブラストの方が良かったのか？」

どうやらフィーは相殺ではなく、僕がしたように魔法を打ち破った上でそのまま相手にダメージを与える事が目的だったみたいだ。

しかし相手も300本かかったとはいえLv4の妖精魔法を相殺か・・・ナギの千の雷だったらLv15のカオススマッシュで粉碎できるかな？やってみないとわからないけど。

もつとも、もう相手は自身の多分自慢の魔法が相殺されたせいだろうかな？真っ青になって逃げ腰なんだけど。

つと、悲鳴が聞こえないと思ったら、いつの間にか全員終わってたみたい。王の財宝ゲート・オブ・パレロンの無駄遣いだし、しまっておかなきゃ。

「ひ、ひいいい！き、貴様ら何が望みなんだ！！」

どうやらおっさんは逃走でも徹底抗戦でもなく降伏みたいだ……。まあ、逃げたりこれ以上抵抗してたりしたらさくつと逝ってもらったし命拾いしたのかな。

さて、このおっさんが目当ての魔法を覚えてくれてるかな？

「ふん！ 雑種^{ぞうしゆ}ごときが手間取らせるとは……。まあいい。喜べ、雑種。貴様が俺の求める物を献上すれば見逃してやっていいぞ」

「な、何を差し出せばいいんだ？ 金か？？」

「貴様ら雑種のはした金などに興味はないわ！ それより貴様が今まで習得してきた魔法全て俺に献上せよ」

こいつは、これだけ膨れ上がった盗賊団を率いてただけあつて多量の金を持っていると言われているが、黄金律の前でははした金に変わりはないので放置しておく。

正直さつさと殺してもいいけど、それでもし分からなくなったら骨折り損だし、逆に取引を持ちかけた相手を一方的に殺すのは趣味じゃないからね。

「わ、私の魔法ですか！ そ、それは……。わかりました、私の本拠地にある研究書をお渡しします」

流石に、自分が苦勞して手に入れた研究をおいそれと他人に献上は

したくないのか戸惑っていたが、僕が後から王の財宝をちらつかせたらあっさりと折れてくれた。
立派な恫喝だが相手は山賊、何処にも問題ないね。むしろ殺さないだけ感謝して欲しいくらいだ。

「まったく、マスターは悪ふざけが過ぎるぜ」

「ほっとけ」

フィーがからかってきたが、気を使ってか名前ではなくマスターに呼び方を変えたのは助かる。

こんな奴に名前がばれたらろくな事にならないしな。

「では、こちらなのでついて来てください」

おっさんは色々諦めた顔で僕達を本拠地へと案内していった。

4・賞金稼ぎだよ！（後書き）

うん、竜呼んで騒ぎにならないとかおかしいんだよね。ローマ教皇はやりすぎかもしれないけど、城吹っ飛ばした竜なんて邪悪の象徴にもってこいかなと思ってやっちゃったぜ！

因みに、ここで戦争が停戦したのは東ローマ帝国VSオスマン帝国で、普通に進んでたら1453年には東ローマ帝国は滅亡してるから、東ローマ帝国の歴史が若干変わっちゃったね！

さて今回は、動き出す主人公の計画、激化する魔女狩り！そして勃発する薔薇戦争！史実も絡めた物語でフィーは何を思うのか！初めて来るシリウスとは？貴方は新たな歴史の目撃者になる・・・。

5・話し合いだよ！（前書き）

2 / 8 0 : 0 3 累計 P V 4 , 0 9 0 アクセス ユニーク
1 , 0 3 5 人 お気に入り 9 人 達成！

こんな駄作にユニーク 1 0 0 0 人や、お気に入り 9 人も・・・あ
りがとう御座います！

5・話し合いだよ！

あの後、お目当ての魔法を得てほくほく顔のガロードです。

これで事をスムーズに運ぶことが出来る。まったく、雷の暴風や他の属性系統呪文はなかったけど雷にだけかなり特化して研究してたぞあのおっさん。

多分あのおっさんが天寿を迎えるまで生きてられるなら雷の暴風までたどり着けるかもしれないな。・・・発動できるかは生命力次第だけ。

「おい、ガロード。本当にあいつ生かしていいのか？」

「ん？フィーはまだ気にしてるの？」

「あたりめーだ！あいつは盗賊なんだよ！」

「しかたないよ、もう取引は成立してるし。それにあの付近どうやら彼らは土地の領主の逆鱗にも触れてたみたいだし、再活動したらあつという間にお陀仏だよ」

そう、いきなり大技の奇襲から始まって不可解だったあの行動は実は、狙いは僕達じゃなく領主の兵隊だったようだ。

どうやら彼らの足取りを掴んで追ってる最中にヘマをして領主の逆鱗に触れてたらしい。多分今頃は死屍累々の盗賊達で溜飲を下げて

る頃だろう。

だから、また同じ事をすれば今度こそ死は免れないだろう。なんて
って領主がダメなら国が動くしね。じゃないと威信にかかわるし。

「ガロードがそう言うのなら諦めてやるけどよ、これから何する気
なんだ？変身まで解いて魔法覚えるなんて、外見以外にもぜってー
裏があるだろ」

そう、今僕はギルガメッシュの姿ではなく、元のフィブリゾの姿で
移動している。・・・勿論認識障害を使いつつ。

流石にずっと一緒にいるフィーはごまかし切れないようだ。まあ、
隠す意味もないし、手伝って欲しいから話しますか。

「目的は1つ、魔術結社「時計塔」を作ることだ！」

「・・・は？頭イカレたか、ガロード？神秘の秘匿はどうするk・・・
・そうか、だから認識障害や記憶消去なんて物を欲しがったのか」

そう、僕の今回の目的は来る魔法世界に対応できる魔術結社「時計
塔」を作ること。

どうも天使の話から、自分1人では対処させないような話を匂わせ
てたからこれは此処に存在する以上義務に等しい行為だ。

確か、関東魔法協会は明治の中頃、埼玉県に来るはずだからそれま
でに確固とした形を整えておきたい。

ただ、何が起るかわからないし、自分が作る組織には必ず非戦闘

要員が産まれるはずである。そのことを踏まえ、本部は日本ではなく、ここヨーロッパに置く事も決定事項だ。

「しかし、人はどうするんだ？ 神秘の秘匿をするなら人員確保なんて無理だろ。まさか騙して集めるきか？」

「その事は心配ないよ、フィー。この時代、誰からも必要とされず疎まれる者、逆に多数から必要とはされるが人扱いされない者、そして最後にいつの時代にも生まれる者の基本3つの種類に属する人達だけでやっていくつもりだからね」

「3つの種類……。ガロード、お前まさか魔女狩りにあう人と奴隷で構成つもりか！」

「その通り、どちらも特に絶望的な者達を仲間に取り込みれば結束の硬い組織になる。特に魔女狩りにあった人間なんて大抵冤罪だ。だからこそ、本物の神秘が人目に触れた時の恐ろしさは分かるはずだ」

そう、例えば後になって所属しなくなつたと言われればその記憶を消し、一般世界に戻してあげればいい。

構成員の誰だつて一度は世界に排された者達だ、喜んでとまではいかないだろうが、一定の人達は理解してくれるはずだ。

この構想にあたっての弊害は、自分が考え付く限りもし『所属しなくなつたら』の一点のみだったが、それも消えた。

実際、神秘は秘匿しないといけないのに記憶消去ができない。もし

そのまま別れたら、いずれ終息する魔女狩りの再来を演じてしまう恐れがある。それだけは阻止しないとイケない。・・・たとえば僅かな間、仲間であったものの命を犠牲にしても。

だからこそ”記憶消去”そしてそんなものに頼らず円滑に活動する為の”認識阻害”これだけはネギま！に数ある魔法の中でもその必要性は計り知れない。

「でも待てよ、今上げた2つはいずれ世界から殆ど根絶されるじゃねーか！そうしたら新しい血はどうやって入れるんだ？流石に身内だけだとどの道維持できないぜ？」

「だからこそこの3つめだよフィー、いつの時代でも生まれる者・・・戦災孤児を最後の選択肢にいれるんだ」

「な・・・ガロード！てめえ、何いつてるかわかってるのか！！戦災孤児を仲間にするって事は一度味わった死の恐怖にまた立たせる可能性があるって事だぞ！！！」

前者2つはいずれ世界が否定し、その規模を大きく削りやがて多くの場所で無くなるだろう。

そうなれば自分達は構成員を維持できずいずれ瓦解する・・・、それでは魔法世界に対する牽制にも、神に対する備えにも使えない。そうなってしまうてまずい。神がどんな手で来るかは不明だけど、1人で対処できない方法”多数の場所が同時に危機に陥るか2人程度では到底対処できない物量で来ることを示唆してる事だと思う。

それがどんな手段かは知らないが、多分神の悪戯”この地の最終戦^{アルマゲドン}

争に近いものになると僕は想像している。

それだけは阻止しなければいけない、折角この地に通常とは異なるとはいえ命を貰い、いろんな人と出会い、別れ、また新たな出会いがあるのにそれを途切れさせるなど。

だからこそ、最後の人員は人類が生きている以上、この地球上でほぼ必ずといっていい程発生しているもの・・・戦争を利用して人員を確保するしかないのだ。

「うん、自分でも腐ってる判断だと思うよ。でもね、仕方が無い事なんだよ。神様達は必ずしかけてくる。その時に人が居ませんでした、だと神様はどう思っただろうね？さぼってるだけの役立たずだけならいいけど、身勝手な神様だしこの世界の一つぐらい簡単に消し去るだろうね。・・・それこそ、この世界が出来たみたいに」

「・・・っ!」

「引き受けました、楽しみました、怒られました。さあ、さようなら。じゃ、どの道この世界は終わる。また、世界を巻き込んで対抗して多分気分を害するだけだと思う、あくまでこれは神様にとって『遊び』なんだから」

「ガロード、おめーの言いたい事はわかる。しかし!」

「そう、この力が救える人達も巻き込むんだ。でもね、この力で戦争を止めたからって、それで戦争の火種が無くなるわけじゃないん

だよ？・・・人類は決して平等じゃないんだ。だったら僕達はその零れ落ちた人達を一人でも多く救い、仲間にいれるだ」

自分が間違ってることは分かってる。・・・そして傲慢であることも。だが人類はその程度の差はあれど誰だって傲慢だ。むしろ傲慢でない人間など存在しているか怪しい。

更に、さっきは自分が今ある力で救える人が居るだって？それこそ傲慢の極みだ。これは借り物、良くて貰い物の力だ。

自分の力なんかじゃ、断じてない。それにこの能力をフルに使ったって、必ず零れる人間は出るし、必ず誰かに恨まれるだろう。それこそ”正義の味方”がしたみたいに。

しかもこっちは借り物の力。彼と比べるなんておこがましいにも程がある。だけど、これは必要なことだ。表だけとはいえ世界のバランスを最大限崩さず、裏の力を維持する為に。

「・・・なあ、ガロード。本当にそれしかないのか？私の力だけじゃ足りないのか？」

「いや、フィーの力は十分すぎるほどだよ。だけど、永遠じゃない。いつかは僕達は居なくなるんだ。だったらその為に備えておかなくちゃいけない。それに神様もそれくらい計算に入れてるだろうしね」

そう、なりふり構わずフィーに頼んで召喚してもらえば、とりあえず数は確保できるだろう。

それさえあれば3つめどころか3種類全ての人を入れなくてもいい。ただ、それは絶対に神様が納得しない。

だって、それは『神様』の力だから。神様が遊びたいのは『人間』の力であって、フィーの能力は多分その補助でしかないのだから。それにね……。

「じゃあ、逆にフィーに聞くけどそうした場合の2つの種類の人はどうするの？見殺し？それでもいずれ消える勢力に縛り付けるの？もし、自分達が去って急激に弱体化したら周囲はどう思うかな？」

「それは……」

そう、自分達が消え牽制の意味を無くした組織がどうなるか。そして其処にかかわった人がどうなるか……。どんなに樂觀しても、どれだ最悪な方向を考えたとしても、その時自分達はいない。

これは結局の所、最初から無責任な計画なんだ。だから少しでも、そうほんの少しでもそれを和らげる為に試行錯誤しなきゃいけない。そして現時点でたどり着いた結果が『戦災孤児』。

「わかったよガロード。おめーが其処まで考えてるなら文句はいわねー！けど絶対に納得なんかしねーからなー！」

「うん、フィーはそれでいいんだよ。納得なんてしてくれなくてもいい。ただ、できれば支えて欲しいんだ」

「・・・しかたねーな。私がガロードを支えてやるよ。なんたって成り行きとはいえ兄妹でパートナーだからな！」

どうやらフィーは着いてきてくれるみたいだ。僕にとってこれ以上心強いものはない。

最初は本で、次に自分が知ってる少女になって、僕が混乱して、彼女が怒って、名前をつけて仮とはいえ兄妹になって、契約してパートナーになって・・・原作開始にちつともたどり着いてないのに、随分長い冒険になる。

でもちつとも辛くはない。その先には新たな出会いがあつて、そして・・・その横にはいつも妹でありパートナーでもあるフィーが居るのだから。

「んで、いい所で終わらせようとしてるみてーだが、場所と人の当てはあるのか？」

「んー、人の当てはとりあえずは道中魔女狩りに会った人や奴隷の救出、及びセーフハウスでも作って暫く待機してもらう。場所についてはイングランドだ」

「ん？イングランドで何かあるのか？」

「・・・戦争だよ。僕達がドラゴンなんて出したから多分少しずれ込むだろうけど史実だと1455年から以後30年も続くドロドロの内戦が始まるよ。後に薔薇戦争なんて呼ばれるけどね」

「さっそくか・・・、わかった。なら其処に本拠地を置くのか？」

「本部はロンドンに構える予定だよ。機能的なのは今すぐ作るけど、象徴的で普段使う本部を構え始める年数は1666年を予定でね」

「・・・んで、その時は何があるんだ？また戦争か？」

「戦争じゃないんだ。前年1665年ペストの大流行でまず人がおよそ10万人死んで、翌年1666年シテイのパン屋から出火した火の手が市壁に囲まれた地の3分の2まで広がり、辺りを灰と化させたロンドン大火が起こるんだ」

「病氣と火災の2重苦か・・・で、その火災の後に建設する気が？」

「その通り、焼け野原となった都市を今度は都市整備で整えようとするけど、これは権利の都合で頓挫するんだ。だからその機に乗じて石製の時計塔になる土台を作るんだ。結社は地下を予定してるけど、かなり奥まで潜らないと後で色々問題が起きるけどね」

「ん？なんですぐに時計塔を作らないんだ？」

「まず、この時代に時計塔なんてあったら不自然すぎるしまだ作れないよ、またロンドンの象徴の1つビック・ベンの着工が1843年、竣工が1859年だからできればその間に着工を始めて竣工後にひっそりと立てたいんだ。いくらなんでも象徴が無くなったら大変だからね」

「なるほど、それなら納得だ。でも、なんで組織名が時計塔なんだ？この時期にそんな名前で組織して、しかも後に同名の建築物が立つって所属する奴が訝しがらねーか？」

「う。そ、それは気にしない方向で・・・」

「おい、ガロード。正直に言ってみろ、怒らないからさ」

「じ、実はTYPE・MOONの魔術組織の異名の1つに「時計塔」があるからそこら・・・」

「・・・てー事はなんだ。あんだけシリアスな会話しといて、その根幹の組織名がおめーの趣味から来るって事か？」

「は、はい！その通りです」

「てめー、そこになおれ！私が成敗してやる！！」

「ちょ、フィー！インファイトとか宣言しないでいいから、本当にごめん許s・・・アッー！！！！！！！」

5・話し合いだよ！（後書き）

うん、無駄にシリアスにしてゴメン。でも手が止まらなかったんだ。しかも、多分こんな作者のなけなしの理論だから穴だらけだろうし。

でも最後までシリアスで行けよ！とか言われそうだけどまだ初めてだし、最後くらいはふざけていたかったんだ。

さて、毎度お馴染み次回予告は、遂に動き出す魔術結社、各地を転々と渡り歩く彼らの前に神に背き外道な行いをしている教会が！更に、遂に神からの刺客が現れる！果たしてガロードは！フィーは！そして、新たな魔術結社の仲間達の運命は！！次回も見逃すな！

・・・あれ？原作キャラ係わる前に最初のカードまで切ってるよ自分。これ、大戦無事たどり着くまで何話かかるんだ？

今回入れなかった小話

「なあ、ガロードなんでおめーギルネタの時『我』じゃなくて『俺』だったんだ？」

「簡単だよフィー。あの時完全にキレてなかっただけで、実際は少しイラッて来てたから地がでたんだよ」

「・・・おつかねーな、おい。て事は、あれか？直撃だったらギル口調かなぐり捨てて、いきなり乖離剣^{エア}の開放の可能性もあつたわけか？」

「うん！多分2〜3発開放してたと思う。だからフィーには感謝しても、足りないくらいだよ」

「おめーは、忍耐力つてもんをちつとは身につけやがれ！傍に居る私が迷惑だー！」

「は、はい！精一杯努力させてもらいます！」

「まったく。わかりやいいんだよ、わかりや・・・」

6・教会だよ！（前編）（前書き）

注意！この話にはR・15にふさわしいと思われる不快な内容が発生しています。

もしそういったことがお嫌いな方は閲覧をご遠慮下さい。

6・教会だよ！（前編）

やあ、あの後泣き落として結社の名前を存続させたガロードだよ。え？お前に誇りはなかった？そんなものは無い！（キリ

いや、まったくないわけじゃないが、結社の名前と天秤にかけたら必要なかったから、遠慮なく投げ捨てただけだよ？

で、また年数ジャンプするんだ。うん、50年ほどジャンプして今は原作500年前、西暦1500年程だね。

「おい、ガロード。今晚はあの街で泊まらないか？少し大きな街だし何か新しい情報があるかもしれないからな」

「そうだね、フィー。ついでにふかふかのベッドとかあればいいね」

その間に起こった事を簡単に説明すると。まず、初めに薔薇戦争。詳しくは割愛するけどこの戦争だけでも大体113人の同士を得た。え？少ないか？見て回れるのが2人だと限界があったんだよ。ただ、内戦で荒れてたおかげで土地確保は容易だったから飯とはいえ本部を設置できたのは僥倖だ。ギルガメッシュの時に黄金律で稼いどいて正解だった。

次に、魔女狩りや奴隷についてだけど、こっちはたどり着く町が良かったのか殆ど遭遇せず12人ほどの同士だけだ。

まあ、同士は多いほうが良いんだけど、こういった境遇の人は少ない方がもっと良いことなのでまったく問題ないが。

他にもすっかり忘れてたけど、キリスト教のイベリア半島の再征服活動、レコンキスタが終了したそうだ。

こっちのほうは詳しい年数は忘れたけど700年頃から恐ろしい執念だが断続的にやってみたいで、最近では足並みも悪く余計な手間を掛けていたみたいだ。

ただ、不可解なのは記憶違いじゃなければ1482年の相手側の内乱が原因で終了したはずなのに、その前年にもの凄い勢いで制圧していつてあつという間に片付いたって話しんだけど・・・、何があつたんだろ？

「う。と、とにかく今晚はあの街で休むんだ！いくぞー！」

「はいはい、でも長居は出来ないからね。そろそろ時計塔に戻らないといけないし」

因みに、魔術結社の方は順調です。此方は当初、僕かフィーのどちらかが世話をしたり、色々教えてたりしたけど皆ある程度育ったら、新しく作ったファミリア？の白猫アルテミスが講師を務めてくれるよ。

・・・いや、本当にネーミングセンスについては気にしないで欲しい。信仰の方も色々と普及し始めて、現在最大勢力はルーフェリア様だよ、やったね！

なんでも、僕が信仰してるのが最大の理由らしくて信者全体の二分の一がルーフェリア信者って人数が少ないけどびっくりだよ！（ちなみに全信者は教団の三分の二程で残りは大抵馬鹿な教会の人間によつて傷ついた人とか色々理由がある人達だ）

次に多いのがライフオス、ニールダの2人の神様だ。ライフオスは元の世界でも古代神やってるだけあつて、その安心感からか信者もけっこういる。ニールダは服飾の神様って所と、多くの戦場でその

腕を使い巧みに逃がしてたのが理由みたいだ。

逆に人気がないのはザイア・サカロスの神様で、ザイアはこの時代の騎士様ってピンキリだからキリに当たった人から憎悪に近い感情で思われてるようだけど、こればかりは仕方が無い。

サカロスについては・・・僕のせいです、すいませんorz

いや、前世でかなりの下戸で更にこの外見。魔族だから問題ないと思っただけど、この時代のお酒は本当に1滴たりとも飲めなかったんだ。(ギルガメツシユ時は王の財宝ゲイト・オフ・バビロンからお酒をだしても、かろうじて1日1杯おちよこにだけ)

このため、禁酒法なんて強いてないのに数少ない大人の人の殆どが自重しちゃってる。

「ねえ、お兄さん。このお宿って空いてるの？」

「ん？なんだい坊主、此処に泊まりたいのかい？とりあえず部屋は空いてるが、親御さんはどうした？まさか坊主1人旅ってわけじゃないだろ」

ただ、禁酒法は強いてないけど、時計塔の神秘の秘匿だけは凄まじく厳しくしてある。もし、この世界において濫りに魔法バレを起こそうものなら即刻抹殺である。

初めこの対策にフィーはもの凄い反対したけど、神秘の秘匿を無視して所構わず魔法バレした時の世界の対応がどう出るかの恐ろしさからフィー以外、結社全員から賛成の意見が貰えたから実施が決まった。

当然決めた全員がそんな事はしないだろうが、2世代3世代は分からない。だからこそ今必要なことなのだ。

んで、こんな深い考え中になにぶりつ子して宿探ししてるんだといえ、いつもはフィーにお願いしてるのだがソレだとあまりにも不公平だと怒り、交代制になったのだ。

交代中はフィーの方が認識阻害を使って大人の振りをしてるから問題ない。てかどんだけ役に立つんだよ認識阻害。

「ん、どうしたガロード。宿は取れたのか？」

「えつとね、フィーお姉ちゃん。お宿は空いてるみたいなんだけど、お兄さんがお宿を取るには親御さんが必要だっていわれたの」

「あー、私が親じゃないがこいつの保護者だ。こいつは風変わりな奴で危険だって何度も言い聞かせたのに、『やだ！フィーお姉ちゃんについてくの！』て譲らなかつたんだ」

「はあ、それはお気の毒に……。で、うちで宿を取るなら1部屋3フランだが何部屋借りるつもりだい？」

「フィーお姉ちゃん、僕一緒がいい！」

「はあ、ガロード。おまえ男の子なんだぞ、ちつとは私の身にもなつてくれ」

「やだ！フィーお姉ちゃんと一緒にいいの！」

「しょうがないな……。悪いが1部屋でお願いするぜ」

「あはは……。はいこれが部屋の鍵だ。場所は2階の奥だからゆつくりしていつてくれ」

「ありがとうな。さ、行くぞガロード」

「はい！」

ふう、我ながら良く出来たぶりっ子だぜ。なんたって2人が1部屋借りるなんて宿からしたら迷惑以外の何者でもないからな。

フィーが僕の演技で鳥肌が立ったみたいだけど酷い反応だ。これで宿代が一人分浮かせるんだから文句ないはずなのに。

別に金に困ってるわけじゃないけど、ただでさえ金銭感覚なんて狂いやすいのに、たまにギルに変身して黄金律なんて使ってるから自重しないと際限なく使って悪目立ちしてしまう。

「さて、ゆつくり休める場所も確保したし明日は教会にいかうかい」

「ん、そうだな。この街の規模なら大丈夫そうだし、後は教会の質

だけか」

そう、今回の旅の目的の1つは結社の人員になる人間を探す他に結社から抜けたくなつた奴を確保できる場所、平たく言えば孤児院を探してるわけだ。

大人は記憶消去して少し整えて送り出してやればいいが、子供の場合そうはいかない。だからこそ自分達と無関係の孤児院は必須なわけだが、正直芳しくない。

どこも資金不足で困ってるし、資金を蓄えてる所は大抵金の亡者で孤児院なんて形だけ。だから適度な規模を探してるわけだが中々見当たらないのだ。

だからそこ此処の教会の孤児院に期待しているのだが果たしてどうだろう？ 街の規模的には中ぐらいだし、適度に物流もあるみたいなので当面廃れることもない。正に理想的なのだが教会が金の亡者である事を祈るしかない。

そんなことを思いながら2人で休む事にしたのだが・・・、この時の自分の判断が誤りである事に翌日気が付かされる。

そう、まさか聖なる教会であんな事をしてるとは、この時まったく頭に思いつかなかったのだ。

そして翌日、目が覚めた僕達は宿の人に挨拶して教会に向かう事にしたんだ。

「うん、ぱつとみ寂れてないみたいだし悪趣味なほど豪華でもない。どうやら此処で決まりかな？」

「そうだな・・・でもよ、ガロード。私はこう、何か言葉にできねーんだが嫌な感じがするんだ。今日だけでも此処を見張らないか？」

僕は教会を見てある程度好印象をもったのだが、フィーの判断は慎重というよりは警戒してるようだ。

フィーの危険探知能力や嫌な感じというのは僕以上に大変良く当たるから僕は反対などせず、今日だけ2人で見張る事にした。

結論から言ってしまうえばフィーの勘は当たった。そう、限りある選択肢の中でも最悪の部類で・・・。

あの後、日が沈む頃に一人、また一人と教会を訪れるのだが・・・どこかおかしい。まず何がおかしいかといえば、こんな時間に教会はまず開いてはいないはずなのだ。

日が上る頃に教会を開け、日が落ちる頃に教会を閉める。なんといつても夜は悪魔が徘徊すると触れてるのだから当然だ。

だとしたらあの連中は何なのだろうか？どうみても教会の人間ではないし、物取りの類でもない。むしろ良く見ればその人間の中にちらほらと貴族が居る事に気が付くだろう。

こうなるとますますおかしい。貴族の密談だけなら教会じゃなくてもできるし、逆に密談なら何故貴族以外の人間がいるんだ？

いよいよこの教会がきな臭くなってきたので僕達は認識障害を出来る限り強くして潜入する事にしたんだ。

「ガロード、こいつら何処に行くと思う？」

「さあ？でもこんな時間に行動するんだ。やましい事には違いないよ」

そうして教会に潜入していくとどうやら地下室に行くみたいだ。昼

間来た時にはすべて見て回ったわけではないがまったく気がつかなかった。

地下の方へ進んでいくと・・・其処は牡と雌と血と腐敗臭が混ざった世にもおぞましい匂いが漂ってきた。

「おいガロード、まさかここは・・・」

「・・・どうやらこいつらは密談なんて可愛く見える事をしてたみたいだ。こいつら全員邪教の信者だよ。そして此処が信者の交尾の場所であり、自分達の神への供物を捧げる場所でもあるみたいだね」

そう、そこで犠牲になってたのはまだ声変わりもしてないであろう幼い子供、それも性別を問わずで、だ。一体どんな邪教を崇めればこんな事をしでかすのだろうか？・・・知りたくもないことだが。

「ガロード、早くこいつ等ぶち殺そうぜ。こんな奴ら1秒だって長生きさせるもんじゃねー！」

「そうだね、フィー。でも僕達ができるより復讐するには相応しい、その権利がある子達が居るんじゃないかな？」

「ガロードおまえなにいつて」

「ねえ、フィー。もし此処でフィーがゴーストを召喚したらどんなゴーストがでるのかな？」

「そういうことが。わかった、すぐに召喚するぜ」

ゴースト。ソード・ワールド2.0の世界においてはその存在は死後、その思いが何らかの形で残りマナ・・・この世界で言えば魔力と反応して擬似的な魔物となった者達のことだ。

彼らは生前の姿のまま、知識・能力もそのまま使える。勿論子供だから元は大した力はないけれど、ゴーストは通常的手段では攻撃できないし、銀か魔法じゃないと傷が付く事も無い。

教会だから銀製のものが一つや二つあってもおかしくないが、残念ながらこの部屋には拷問用の鉄製しか存在してないみたいだ。

そして彼らは生前の無念を晴らせば成仏するので、此処に居るのが全てと言うわけじゃないだろうが、多くの者が救われるはずだ。

フィーが召喚を終えると、其処には信じられないことに軽く100は超えるゴーストが姿を現していた。どうやらこいつ等は1代じゃないのか、戦争を上手く利用して食い物にしてたみたいだ。

突然のゴーストの襲撃に交尾や儀式にふけていた連中は大混乱に陥った。

「ひ、ひiiiiiiii！な、なんなんだこいつらは！！」

「お前は確かに死んだはず！俺が神に供物として捧げたはずなのに何故いるんだ！！！」

「『『『『ユルサナイ・・・ユルサナイ・・・』』』」

「・・・え？アルト？アルトなのか？なんでそんな姿になってるんだよ！お前は貰われて幸せになったはずじゃなかったのかよ！！」

どうやら進行形で犠牲になってる子が、もう犠牲になってしまった子の中に知り合いを見つけてしまったようだ。これはだけは失敗だったのかもしれない。

でも、そんな僕の気持ちに構わず話はどんどん進んでいく。

「ゴメンネ・・・、ヤクソクヲハタセナクテ・・・」

「もういい！そんなことはもういいんだ！！」

「キミガマダイキテルダケデ、ボクハアンシンシタヨ・・・」

「何言ってるんだ！お前も此処に居るじゃないか！！」

「ボクハヨバレタダケ・・・、ヤサシイヒトタチガツカノマイルキカイヲクレタダヨ・・・」

「なんだよ！お前が何言ってるかわからないよ！！」

「モウスコシデオウル……。ミンナムネンノホンノヒトカケラ
ダケド……」

「来るな……。こっちに来るんじゃない！！」

「助けてくれ、もうこんな事はしないから助けてくれ。お願いだ・
・」

「『『『ゼツタイニユルサナイ……。ゼツタイニユルシチャイ
ケナイ……。』』』」

あまりの数に逃げる事すら出来ないようだ。それにしてもこの無念、
僕が想像していたよりはるかに深く、そして暗いものようだ。
あまり考えたくは無いが、もし別の上位の”何か”になってしまっ
たら責任を持つて倒さなくてはいけないかもしれない。……。自分
達で呼び出しておいてなんて勝手だと言われそうだが、この街全部
が悪いはずじゃないから街そのものを捧げるわけにはいかない。
そう考えてるうちに屑どもは死に絶えてしまったようだ。もう脅
威となるものは居ないし、認識障害を解き姿を出す事にする。

「お兄さん達どこから……」

「カレラガボクラヲヨビダシテクレタンダ・・・」

「え？という事は・・・神様？それとも悪魔？」

「残念だけど、そのどちらでもないよ。強いて言うなら『魔術師』だね」

「魔術師・・・」

「おめーら、気分はどうだ？少しは晴れたか？」

「「「「アリガトウ・・・、モウダイジョウブ、ミンナマヨワズ
イケルヨ・・・」」」」

「え？アルト？皆つて、アルトも行ってしまふの・・・？」

「ウン・・・、ソレガヤクソクダカラ・・・」

「やだよ・・・、いっっちゃだよ！ずっと一緒にいようって約束したじゃないか！..」

「ナカナイデ・・・、キミニハエガオデミオクツテホシインダ・・・」

「なんでだよ！なんで逝っちゃうんだよ！！」

「シカタナイヨ・・・、ボクダツテイキタクナイケドモウマワリノ
ミンナトオナジデイキテナインダカラ・・・」

「・・・ナカナイデ・・・、エガオデボクたち、ワタシたち、ソ
シテトモダチヲミオクツテアゲテ・・・」

「うつ・・・、わかったよ、笑顔で見送ってやるよ。でも、生まれ
変わりでも来世でもいい、次こそは絶対一緒だからな！！！」

「アリガトウ・・・。ヤクソクスルヨ・・・、ツギコソゼツタイイ
ツシヨダ・・・」

その約束をきっかけにゴーストたちは次々と天へと還っていく・・・
、僕達3人は今出来る精一杯の笑顔で彼らを見送ってあげた。

6・教会だよ！（前編）（後書き）

・・・どうしてこうなった！シリアスさんまさかの大復帰、しかもライバル登場とか煽っておきながらシリアスさんの奮戦でずれ込んだよ！！

恐ろしい・・・、これが小説・・・。一度設定が決まって書き始めたら止まる気配が無い。

因みに、作中の通貨は仮です。てかこの時代通貨なんてコロコロ変わってるだろうし、地方によっても差が出る詳しく調べたら調べる分恐ろしいものだろうし、これで勘弁してくださいorz

次回こそライバル登場！そして魔術結社「時計塔」その本部も公開！本部の設備は？使い魔アルテミスはどんなキャラなのか？？次回も押して参る！！

書き上がりが現投稿数を抜いてるので急遽連続更新だよ！23時を待ってね！

7・教会だよ！（後編）

皆が居なくなつた後も暫くそのままだったが、いつまでもここには居られないので彼に話しかけることにした。

「君はこれからどうするんだ？」

「どうするって・・・、お兄さん達はこれからどうするんです？」

「私達はこれから本拠地にかえらねーとな。これ以上ほつといたらアルテミスのやろーにどやされるし」

「あの・・・。俺を連れて行ってください、お願いします！」

「おめー、自分が言ってる意味わかってるのか？私達は魔術師だ、つまり危険と隣り合わせ、平穏な世界に返れなくなる。それにさっきみたいな事をちよくちよく起こすかもしれない。それでもついてきたいのか？」

「はい！お願いします！！」

「無駄だよ、フィー。彼はもう決意してるみたいだしね」

「そうか……。しょーがない、今日からおめーは私たちの仲間だ！私はフィーだ、よろしくな！」

「僕はガロード、一応魔術師の長なんてしてるけど気軽にたのむよ」

「は、はい！俺はディアスっていいます、これからよろしく願います！！」

まあ、わかりきっていた事だが彼は僕たちの仲間になる事を選択したようだ。

……。と、いうよりもここで仲間にならなかったら記憶消去を施して一般世界に返ってもらう予定だったのだが、フィーが明らかに後押しして決心を固めてしまった。

止めるはずのフィーが此処までするって事は、流石に今回の記憶消去はしたくないらしい。

「んじゃ、一度本部に帰る前に此処だけでも焼き払おうか」

「だな、こんな屑どもと一緒に火葬は嫌だろうが、彼らはもう成仏したし問題ねーだろ。……。ただ地上の教会まで焼き払うなよ？他の子供達が困るからな」

「わかってるって。んじゃ、此処は焼くからディアスも一緒に一度地上に出ようか」

「あ、はい。わかりました。・・・えと、その前に何か着る物ないですか？」

あー、そういえば色々立て込んで忘れてたが、今のディアスはあれもない姿だからきるものは必要か。

確か予備がポケットにある腕輪の収納ブレスレットの中にあっただし、それを取り出すか。

腕輪から服が出てきた事にディアスは大変驚いていたが、驚きから帰ってくると感謝の言葉をいってから手早く着替えてくれた。

着替えを確認してから3人で地上に戻ると・・・其処には黒い服をきて、更に胸に細かい細工が施された十字架をつけた男がいた。

「今晚は、邪教の使徒よ」

いやいやいや。まで、激しく待て。どうみても教会関係者だというのは分かるがその格好はなんだ？

記憶に該当する格好に非常に似た作品を知っているが、あれはAKUMA討伐が主任務だったはずだ。

とりあえず教会の孤児院に居たであろうディアスに聞いてみる事にする。

「・・・なあ、ディアス。あの男に見覚えは？」

「え？・・・俺が知ってる限りでは始めてみる人です」

「そうか・・・で、貴方はどちら様なんですか？」

「俺の名はボーマン、教皇様直属部隊「黒の教団」に属する者だ」

うわー・・・。これは絶対神様関係だ。原作開始後、早くても大戦からの介入と踏んでたのにもう送り込んでくるとか。

いや、もしかしたら時計塔発足と同時期にできたのかも知れない。しかも彼は「エクソシスト」とは名乗っていない、これはどういう事か？

多分イノセントは持つてるだろうが、それはAKUMAではなく教会に渾名す異教徒や邪教徒を秘密裏に滅する為に使われてるのだろう。

レコンキスタの繰り上げもこいつらの仕業だな。しかし、僕も運が悪い。多分彼らが探してたのは僕らが滅した邪教の連中だろうからとんでもない誤解だ。

とはいえ完全に間違いでも無く、むしろAKUMA代わりに僕達が居るんだから本命扱いされるのか？

「ふん、何を企んでるか知らぬが、その穢れし魂に魂の救済を！」

あ、そこはそのままなんだ！なんてのんきな事を考えていたらボー

マンが突っ込んできた。

流石にディアスを戦闘に巻き込むわけにもいかないし、もうじき夜も開けるここはどうか停戦したい事だけど……。

とりあえずフィーがディアスを抱えて右に離脱、僕もどんなイノセントか分からないまま交戦できないので右に離脱する。

「ふん、俺の攻撃を避けるか、こし抜けどもめ！……む、少女よ何故邪教徒を庇い俺を警戒しているのだ」

どうやらボーマンは僕とディアスが邪教の使徒で、フィーがその被害者と認識したらしい……。なんでさ！

僕はてつきりイノセント的な何かで判別してると思ったのに、性別と不確実な状況証拠だけで動くとかこいつどんだけ脳筋だよ！！

「あたりめーだろ！何勘違いしてるかしらねーが、ディアスは被害者で私とガロードは邪教を潰してきたばかりだ！」

フィーが頭にきたのか直球で答えてますね……。

いつもなら怒りながらも冷静に『ガロード』の部分を『マスター』に意図的に変えてるはずなのにそれをしてないなんて。

「む？ディアスとやらそれは本当か？」

「ほ、本当だよ！嘘だと思っなら地下をみてろよ、あんたの探して

る邪教徒とやら死体で転がってるよ!!」

「ふむ、これはすまなかった。お前達が出てきた場所から禍々しい臭気をはなっていたから誤解していたようだ」

どうやらこの脳筋は話が出来る部類らしい。これならこの場は争わずにすみそうだ。正直何の準備もしてない状況でイノセントとか勘弁して欲しいしな。

「わかってくれたなら助かるよ。僕たちはそろそろ発たないといけなかったからね」

「そうか、お前達の行く末に神のご加護があることを願う。・・・ではディアス、こつちにきなさい」

「やだ！俺はこの人達と着いて行くんだ！」

「こいつはこー言ってるが、無理にでも連れて行く気が、おっさん？」

「いや、己の進むべき道を決めたものを留める気はせんよ。さあ、行くがいい」

「ああ、縁があつたらまたあいましょう」

「ああ、縁があつたらな」

さて、こんな事を言つたができれば2度と会いたくない。どう考え
ても次会う時は敵同士だ。

ただそれを決めるのは神様次第、良くても運次第という奴だ。これ
ばかりは僕にはわからない。

今することは3人で街の外に出てテレポートで結社に帰ることだ。
テレポートでついた先は・・・掘つ立て小屋だった。・・・それも
ボロい、壊れないのが不思議なほどボロい。

ディアスが完全に呆けているが気にせず中に押し込んだ。

「どういう事ですか！なんで掘つ立て小屋が本部なんですか！」

「ん？ここは本部入り口だぜ？」

「え？そうなんですか・・・？」

「当たり前だろう、こんなボロい本部僕だつて嫌だよ」

ええ、実質本部も主だった機能は地下に網羅してあるので地上は偽

装ですね。

僕は壁に掛けてある大きな鏡に短く呪文を唱えると鏡が消え、その奥に無駄に広い階段が姿を現した。

「うわぁ・・・」

「さ、行くよ。僕にすっかりつかまっててね？」

「え？・・・わわわ！！！」

僕達は階段側に行きネギまの飛行呪文を短く唱えた後、飛行して階段を下りていった。

因みに発動体はソード・ワールドの腕輪、代用ができたので重宝しています。また、この呪文も先の仕掛けも、全て以前あったおっさんからし入れた物です。

そうして階段を全て下りると、左右に石造の犬達がずらりと30体づつ、合計60体は並んでいた。

その犬達はどれも精巧で今にも動き出すんじゃないかと思わせる出来栄である。・・・いやまあ、実際動くんだが。

「な、なんかおっかない通路ですね・・・、今にも動き出しそうな・・・」

「ん？動いて欲しいの？んじゃ、顔合わせも兼ねようか。オブシデ

イアンドッグ全員集合！新しい仲間のお出ましだよ！！」

オブシディアンドッグ。こいつは平たく言えばガーゴイルの犬バージョンだ。ガーゴイルを知らない奴は居ないと思うので説明は割愛する。

そして僕がそういうと、左右に安置されてた犬達が一斉に動き出してディアスの方に殺到した。

・・・想像してみたい、薄暗い通路に左右に置かれた犬の石像・・・
・ 狒犬でもドーベルマンでもでもいいが、それらが一斉に動き出し自分の方に群がる姿を。

今までの例に漏れず彼は恐怖に固まった拳句に気絶してしまった。
・ ・・・わかってるならやめろといわれそうだが、これは必要な事なので仕方がない。

登録をしておかずに不用意に接近すれば、当然その役目を果たすべく一斉に襲い掛かってくるのだから。

彼が気絶してる間に僕は彼を背負いつつ、フィーと二人で本部の扉を開けた。

開けた先にあつたのは更に扉と今度はこの施設の主戦力ドウムが4体鎮座していた。

ドウム。これは大型の戦闘機械で大きな砲台、4本の足、腕に備え付けられた機銃・・・更に重そうな見た目に反して軽快に動けるのだから反則物である。

当然、気絶中のディアスをドウムに登録させる。・・・多分彼がこれを見たら又気絶するのではないのだろうか？（ドウムでの気絶率は大体8割で2割は犬で体性ができるか、中でもう見たか、最初から動じないかの3択である）

そしてドウムが守る門を抜けたら今度こそ、我ら魔術結社「時計塔」の本部に玄関にたどり着くのだ！

その玄関で待つて居てくれたのは、本部全人員125人と一匹の白

猫であつた。

「「「「おかえりなさい、ガロード！フィオナ！」「」「」」

「ああ、ただいま皆」

「元気してか？ちゃんとアルテミス話を聞いてたのか？猫だろー
がこいつの話はおまえ達の為になるからな」

「う、うわっ！何？何があつたの！？」

石犬風呂で気絶してたディアスが皆の声でビックリして目を覚ましたようだ。125人によるお出迎えじゃ仕方ない。

そんなことを考えてるうちに、ディアスは皆に攫われていった。多分、他の防衛機能への紹介とか、ここの簡単な心得、何になりたいか？宗教はどうするか？とかもするんだろうがまずは外の話しだらうな。

「あれが主たちが見つつけてきた子供か……。で、主はこれからどうするつもりだ？」

落ち着いたところでアルテミスが本題を話しかけてきた。空気の読める猫で本当に助かる、僕より教え方も上手いし、本当に頼りにな

る白猫だ。

で、そのアルテミスが切り出した内容は当然「黒の教団」の対策についてだ。

「んー、こつちから喧嘩は売りたくないから当面は本部戦力の増加と人員育成かな？」

「私もそれがいいと思うぞ、今下手にちょつかいだしたら身動きが取れくなりそーだし」

「ふむ、主とフィーの意見が一緒であれば我も異議はないぞ」

作ったばかりの組織だから、現在トップの自分以外アルテミスとフィーしか幹部が居ない現状で取れる手なんて限られてるんだよね。それに・・・、後々だと面倒なので暫くしたら長期間留守にする予定だし、無理は出来ない。

「じゃ、当面は現状維持の拡大路線でよろしく」

「んじゃ、私は今日はガーウィでも配置するか」

「それだったら、主には本日我と共に授業をやってくれないか？」

「わかった、今日の教科は何が良いかな？」

「本日はスカウト技能とフェアリーティマー技能の授業だからスカウト技能の方を頼む。どうしてもフェアリーティマーの方に生徒が偏るからな」

「なるほど。じゃあ、すぐに準備するよ」

「ああ、頼んだぞ主」

7・教会だよ！（後編）（後書き）

遂にできましたねーライバル。え？何D・Gray-man汚してんだ？ふざけるな？H A H A H A、我が道を進む作者は止まらないのだよ！

随分あっさり見逃してますが、それは彼らが子供の姿だったからにすぎないって事で！脳筋さんはやっぱり（偽とはいえ）子供切りは嫌でしょうし。

・・・ちょ、魔王様の全力全壊のO H A N A H S Iはやめてー！

まだだ、次回予告をするまでまだ終わらんよ！次回はいつものガロード視点から離れてフィーの視点からお届けする世界！始めた会った人間、そしていつもガロードの横に居た彼女は何を見て、何を思うのか！更に、時計塔で誕生する新たな神、しかもその神はタグに関係する！？次回も更新時間はそのままだからまた見てね！

8 私[・]私の思い、染まる神（前書き）

注意！この話は作者の大雑把な判断より不快になるかもしれません。

予めその事をご了承の上でお読み下さい。

8・私の思い、染まる神

初めて目を開けた時、私の目の前に居たのは人型の生き物だった。

私は幻想の書、神様が暇つぶしの為に作った書物、様々な事を記憶し、神様に選ばれた者をサポートする、ただそれだけの存在。

私が人型の生き物を見ていると、突然頭に情報が流れた。

目の前の生き物が中身は人で素体が魔族である事、その中身の持つ知識やこれから必要な能力の事、そして”彼”がパートナーである事。そして最後に”私”という存在の性格を。

情報を貰った私は考える。”彼”にどう接すればいいか。少し考えた結果彼の記憶の中から最適であろう口上を選らんだ。

結果として、私のファースト・コンタクトは失敗した。どうやら私の元となる存在とのギャップが強すぎたようだ。

仕方ないから私は言葉を選び、再度話しかけてみた。今度は上手く行ったようだ。

その後正式に登録する為に名前を聞き、私の名前を決めてもらったのだが・・・、残念ながら彼にネーミングセンスを問うのは絶望的なようだ。

その際、私は不覚にも動揺して醜態を晒してしまうのだが、きちんとお返しはしたのでよしとする。

ただ、その後の愛称には驚いた。私は彼が名付けたとは言え元は”本”だからそんなに深くは考えてこないだろうと思ったからだ。

私は彼の評価を少しだけ改める事にした。・・・ただ少々うかつな部分があるが許容範囲内だろう。

その後暫く行動し、様々な事があったが彼の結社設立には再び驚かされると共に憤りを感じた。

今でも完全には納得していないが、彼をここで強く止める事は今の私には思いつかないし、また思いついたとしても神様が許さないだろう。

そう、私という存在は長く彼と接しているうちに、本である身としてはおかしいだろうが”情”と言う奴でも芽生えたようだ。

それに、彼が居るからこうしてまだヨーロッパだけとはいえ、世界を見せてくれて何も無い世界から私を起こしたのは間違いなく彼のだから……。

まあ、随分しおらしく回想しているが、既に私は”私”なのだから私のパートナーであり、成り行きとは言え兄でもあるガロードとこれから旅することにはかわらねー。

神様が放つて来た「黒の教団」にも、これから起こるであろう”大戦”や”英雄の息子”の騒動だって、私とガロード、そしてアルテミスや時計塔の皆が居れば全部乗り越えてやるぜ！

・・・とまあ、意気込んだはいーんだがよ、いくら時計塔の仲間とはいえ、まさかあんなのを神にするとか私はぜってーみとめねー！

事の始まりはあれだ、あの脳筋のやるーと遭遇してから10年くらいたって、時計塔の初期のメンバーがようやく使い物になってきた時に起こったんだ。

その日私とガロードは珍しく時計塔にいたんだよ、そしたら本である”私”を紹介して一人の厄介な神がちょっかいを掛けてきやがったんだ。

実は私はガロードにも話してない（単に伝え忘れたんだがな）が、ソードワールド始まりの剣第二の剣に属する神以外なら話す事ができるんだよ。

これは簡単な事で、この世界では私を介してソードワールドのほぼ全ての魔法が発動するようになってるため、神聖魔法も”魔法”の枠組みである以上私だけ例外的に複数の神の恩恵を貰ってる代わりというわけだ。

で、私がいった厄介な神って奴は・・・向こうでの古代神”妖精精神”アステリアだ。なんで古代神なんか話しかけてくるかというところ・・・私は断言しよう、あいつの気まぐれだと。

向こうではかなりの神格の持ち主なんだが、如何せん性格は自由奔放、しかも心変わりが激しいとお前の周りの古代神、特にライフオスやキルヒアでも見習えといったくなる。

で、こいつがなんていつてきたかと言うと。

「ここに中々見所があるものが居るみたいじゃな。ここは一つ小神にしてみるかの。何、遠慮する事はない、わらわがよいというのじやからな」

呆れて物が言えない台詞だ。

いくら向こうで身動きが取りにくいからって、こちらに積極的に興味をもち、あまつさえいきなり神にするとかいわれても冗談じゃない！

まあ、アステリアが認めた奴は時計塔でも幹部間違い無しの伸びをみせる大変すばらしい若者なんだが・・・問題はあいつは無信仰者だったんだ。

いくら古代神でも悪ふざけが過ぎると抗議したが。

「何、わらわが話しかければあやつも必ずなびく。まあ、騙されたと思ってはよう伝えい」

などといわれて取り付く島もねー。

仕方なくそいつにそれとなく話しかけてみたら大変乗り気になりや

がった。なんだ？私はたちの悪い詐術にでもかかったのか？？
程なくその疑問は解消する・・・私にとって最悪の形となって。

「ふむ、よき顔をしておる。ぬし、名前はなんと申す」

「僕はジャンと申します、アステリア様。フィオナ様からお話を窺ったのですがこの僕を小神にするとは誠ですか？」

「うむ、わらわに二言はない」

まあ、ここで騙すようなら流石に私も我慢の限界だが、どうやらアステリアは本当にジャンのやつを神にする気らしい。

だがなんでジャンなんだ？いくら幹部候補でもこいつはまだ一番高い技能でもLv10どころかLv7しかないこれからが本番のような奴だ。

いくら元の世界には影響ないからって、そうはいはい将来有望なやつを神にされても困るんだが・・・。

だが、私の疑問は次の会話で氷解する。そう、神ともなればほぼ必ず必要である事・・・信仰の教義だ。

例えばアステリアなら『妖精神』さらにはエルフの祖とまで言われるだけあってエルフに根強い人気を持つ珍しい部類だが、大抵はライフォスの『調和』やティダンの『豊潤』、キルヒアの『探求』とかル＝ロウドの『自由』等の教義を掲げ信者を獲得してる。

ならジャンは何を教義にするつもりなのか？結論からいえば、此方の世界の神に真っ向から喧嘩を売りつける教義だった。

「ではジャンよ、ぬしは何を教義とするのじゃ？」

「はい、僕は男色を教義に掲げたいと思います！」

・・・はい？ジャンのやつ今何ほざきやがった？男色、男色だと！
！なんだそのふざけた教義は！
一方の私を介してるアステリアは大変お気に召したようでたいそう
機嫌がいい声を上げる。

「ふむ、ぬしも物好きな男じゃな、何故そのように素晴らしい容姿
を持ちながら男色の走るのかや」

そう、アステリアが指摘するようにこいつは容姿がいい。それでい
て筋肉も適度についていて運動神経もいいし、頭も悪くない。
はつきりいつて引く手数多のはずなのに何を血迷ったらそんなこと
口走れるんだおめーは！

「私は女性というものがどうしても好きになれないのです。もちろ
んだからといって偏見などしてませぬが我慢できないのです」

こりや相当重症だ。しかし、其処まで苦手なのに時計塔内でジャン
に男色の噂が立たなかったほうが驚きだよ。

・・・まあ後日発覚するんだが、気が付かなかったのはよく出歩い

てた私とガロードだけで、時計塔では周知の事実で時計塔内の女子の間では密かにBL本まで作ってやがった。

「ははは！これは傑作じゃ。やはりおぬしはおもしろい。ではわらの名においてジャンを男色の神とする、以後の事はこの本にでも聞くが良い」

「はい！ありがとうございます！！」

「よいよい、面白き活躍を期待しておるぞ」

おい、ちょっと待て。神にするだけしといて全部私に丸投げか？ふざけるのも大概にしろ！！

この後私が切れて暴れた為ガロードによって取り押さえられ、ジャンの小神化の事実が時計塔中に広がるのだが・・・、時計塔の今まで信仰してなかった男性の8割が信仰するってなんだよ！

あれか？この世界の神はほぼ男色なんて禁じてるから、向こうも同じだろうと信仰してなかったただけなのか？

この動きを発端として今まで信仰してなかった奴が相次いでリルズの男性・女性半々だが・・・、全員兄妹か姉弟言えば大体の想像はつくだろ？え？なんでアステリアは上がってないのかって？

アステリアは気まぐれだから、お前らが生きてるうちはないって教えてやったから信仰の対象には成らなかったらしい。実際、この後アステリアが神にした奴なんていなかったからな。

また、悪ふざけが過ぎたのか、いくらなんでも軽率すぎると周りの

古代神や大神にたしなめられもしたらしいが、ルーフェリアの事を
持ち出してまんまと逃げ出したようだ。

ちなみにルーフェリアの事を使って逃げた事で一部信者が恨みそう
になったが、ガロードがたしなめたらしい。

しかし、そのたしなめ方も問題だ。なーにが、恋愛は自由だ！おめ
ーのロリコン・ショタコン（初期の知識から知ってた）癖を正当化
しようとしてるだけじゃねーか！！

その話を聞いてガロードに一時間みっちりグラップラー技能の実演
に使った私は悪くないはずだ。

8・私の思い、染まる神（後書き）

正直に言おう、失敗した！

フイーの内心なんてやるんじゃないかった、うまくまとまってない拳句に文字数減少の一翼をになってしまった。

タイトルも悩んだ末だし・・・、あれ？これ原作キャラとか動き出したら俺死ぬんじゃない？

え？後半の酷い方を何とかしろ？あれは必要な事なんだ！主にやる気と伏線とページ数確保の為に！それに直接的な描写や関係はまだないから自分的にはセーフだと思う！

あれ？今回は次回予告はお休み？？それとも・・・。

9・世界樹？だよ！（前書き）

ははは！見る、文字がゴミのようだ！・・・すいません。前話が短かったのでまた電撃更新とかしてみた！

でもって本来する予定だった次回予告はこちら！遂に決意する日本上陸。関西呪術教会との接触。そして世界樹が生えてると思しき場所で見えた光景とは！？そして発動する超ご都合主義の中身は！？君は読みきる事ができるか？

では、本編をお楽しみ下さい！

9・世界樹？だよ！

フィーのせいで危うくこの世界からログアウトしかけたガロードだよ。

あの後、僕は全治半年の大怪我を負って、更にソドワの神様達が自業自得とばかりに回復を拒んでくれやがりましたので復帰に1年かかったよorz

まったくどうやってたら拒めるんだよ！え？ギャグ補正ちくしゃのきまぐれだつて？・・・到底納得できないがそれなら仕方ない。

でもって現在は原作450年前、西暦1550年前後になったよ！うん、なんか50年刻みでイベントを起こしてるけどやる事がいっぱいあるからしかたない。

で、その間起こったことだけど、洒落にならない事の連続だよ、まったく！

何があつたかというと、まずは征服活動。実は前から大航海時代に突入してたんだけど、それが遂に「冒険」から「征服」に姿を変えたんだ。

当然、奴隷や戦災孤児なんてわんさか出てくるし、しかも相手の言葉が通じない（すぐに通話のピアスで解決はしたが）おかげで最初はもの凄い苦労した。

更にドイツでは反乱、デンマークでは肅清、神聖ローマ帝国がオスマン帝国に包囲されるなんてのも発生した。

他にもイギリス国教会がカトリックから分離とかもう上げ始めたらきりがない！

また魔女狩りも絶賛続行中なものだから始末が悪い。人は既に初期の125人から三倍以上に膨れたし、僕達以外に時計塔の初期メンバーで優秀だった子達が頑張って手伝ってくれてるが、とてもじゃないが手が足りない。

まだまだ混沌としてるけど、どうやら日本に無事鉄砲が伝わったみ

たいだし、ここを今はなれるのはまずいかもしれないが今しか機会がないので次の計画を実行しなくちゃいけない。

「で、なんでこの時期に極東の国になんか行きたがるんだ？ガロード。はつきりいって、それなりの理由がないと反対だぞ私は」

「う・・・、今回の目的は2つあって関西呪術協会もしくはその前身となる組織への接触、ついで日本にあると思われる世界樹・蟠桃ぱんとうへの接触及び周辺の土地の確保、もしくは次点で東北の土地の確保をしたいんだ」

「ふむ。主よその協会への接触や世界樹への接触・周辺の土地確保はわかるが、何故土地確保の代案が東北なのか？また、本当にそれは必要な事のかね？」

「まず土地確保の方だけど、これは最悪のパターンを考えただけさ。もし、関西呪術協会との接触は失敗し、世界樹確保に大きく抵抗されたら東北にユグドラシルの若木を置いて世界樹の成長阻害・・・いや、可能なら枯らす事も検討に入れる。で、何故今の時期かというと今を逃すと日本は鎖国して手出しできないからね」

ユグドラシルの若木。ソードワールド2.0の世界において神紀文明の時代・・・簡単に言えば人が始めて持った文明から存在する樹木、その種子から産まれたのがユグドラシルの若木だ。

簡単に言ってしまうえば向こうの世界の世界樹の若木であり、当然そ

の若木であればかなりの力を有しているはずで、特に植物に干渉するような能力は知らないが、様々な知識を有しているので高い確率で持っていると思う。

その力を用いてこの世界の世界樹・蟠桃ぱんとうに干渉を仕掛ければ阻害できるだろうし、複数本召喚すれば枯らす事も出来るはずだ。もしそれでダメならば精霊の力を使えばいい。

「なんだよ、鎖国くらい飛んで行けば問題ねーだろうが」

「確かに、飛んで行けばなんら問題なく入国できるけど、関西呪術協会との話し合いは高い確率で決裂するだろうね」

「ふむ、そういう事情ならしかたありませんな。ですが行くのは主とフィーだけをお願いしますぞ」

現段階の最高幹部会、僕・フィー・アルテミスの三人での話し合いはこうして決定した。・・・え？なんでアルテミスが生きてるんだって？どうもソドワの魔法なのにネギま！の仮契約の法則が適応されてるみたいでアルテミスは僕の眷属になってるようなんだ。

ちなみに、時計塔の初期の人達は現在優秀な人が準幹部で各方面の担当やアルテミスの補佐、普通くらいの人がその下についてヨーロッパを飛び回ったり、魔法や技の講師なんてしている。

普通以下の人・・・つまりソードワールドやネギま！の魔法の適正が極端に低い人は主に新入り達の面倒を見たり、外に出て商売をして時計塔を支えてくれている。

僕がまたギルガメッシュになって、黄金律で支える手もあるけど・

・、それじゃ意味がないからね。多分、もう少しすれば僕たちの話し合いに他の人も参加してくるだろう。

また黒の教団に対する備えも増えたよ！・・・今は詳しく説明しないけど。で、肝心の黒の教団はどうしたんだ？と聞かれたら不気味なほど接触する機会がないね。何度か魔女狩りで見かけたけど、冤罪の人を裁くのを止める側だったし。

多分、僕たちが知らないだけで、教会は多大な戦力を得たと共に多大なる困難も得たんだろう。・・・まあ、監視だけなら居ると思うけど。

「で、あつという間に日本に着いたはいいけどどこ探せば見つかると思う？フィー」

「私が知るわけねーだろ。ガロードが着たいって行ってきたんだからてめーで見つけやがれ」

さて、あつという間に着いたんだけど・・・、何処にけば会えるのかわからねー！いや、あれだよまだ上陸したてなんだが、ビバ昔の日本って感じで全然わかりずらいんだよ！しかも戦国時代の真っ最中で大変物騒だし。

言葉も昔の言葉だから普通じゃ無理でなんとか通話のピアスが使かっているが、今まで疑問に思わなかったがなんでこんな多種多様に対応できるんだよ！これ確か種類登録制限あつて、更に一旦登録したら変更不可って代物だろ？いつ登録したんだよ！！

なんて思いをフィーにぶつけたが、何故か遠い目をされて私も知らないが何故か入ってんだよって言われたよ。

まあ、考えてみたら自分の知らないうちに、普通ありえないものが

体の中にあるって僕より困惑しておかしくない状況だから仕方ないけど。

ともかく、なんか知らないけど使える、多分神様さくしやがなんかしでかしたんだろう。

「にしてもガロードよお。この道中の妖怪の群れ何とかならねーか？毎晩百鬼夜行とかされても困るんだが」

「うーん……。僕も予想外だったけど、多分異国の妖怪の侵略と判断されたんじゃないかな。ここって大陸の妖怪とかたびたび来るみたいだし」

そう、どうもこの身が魔族だったのがいけなかったようで、すっかり西洋の妖怪の侵攻と判断した妖怪たちが夜な夜な大量に襲撃してくるのだ。

向かってる先が京の都だからわからないでもないが、おかげで人里で休めないから正直やめて欲しいところだ。

まあ、この地に支部を置く予定だし彼らの判断は間違いいではないのだが、大妖怪までそう考え無しに正面から来るのは如何なものか。

「しょーがねーな。ガロードいつそ召喚で薙ぎ払わねーか？レッサードラゴンを群れで出せばあいつらも大人しくなるだろ」

「やめてくださいね、そんな取り返しの使いない事。確実に中立になってる妖怪たちも奮起しますし、関西呪術協会も黙ってないでし

ようじ」

どうも連日の歓迎にフィーの忍耐がかなり削られてるようだ。フィーが爆発でもしたら僕の考えどころか最終戦争アルマゲドン一直線だというのに本当に勘弁して欲しい。

ただ、今晩はどうも様子が違うみたいだ、百鬼夜行どころか妖怪一匹見かけない。僕達が訝しがっていると、進行方向に多数の”人影”が見えてきた。襲撃を警戒した僕たちに悟られる事無く。

「おい、ガロード。あれって・・・」

「どうやら向こうから出迎えてくれる見たいだね。まあ、少し考えれば当然か。僕達は多数の妖怪を”退治”して、しかも彼らの守護する京の都に接近する正体不明の化物じゃね」

そうやって、話しているうちに人影の1人が此方の方に接近してどうにか通常の声量で会話出来るであろう位置まで来た。

「初めまして、ご兩人。異国の妖と見受けられますがどのような御用で」

声そのものは静かだが、後の殺気といい和やかな会話は望み薄かもしれない。とりあえずやれるだけの事はやっておかなければね。

「貴方達はこの土地を裏から守護する方々ですか？」

「いかにも、我らは京の都、ひいてはこの国を影より守りし者だ」

「それはよかった。貴方達の長に話があり、西の方から足を運ばせていただきました。長との面会を認めていただけないでしょうか？」

「断る、と申したらどうする気だ」

「それは・・・、悪戯に争う気は僕には無いので、東の方へ行き無断で申し訳ないがそちらに居を構えさせていただきます」

話し合えないなら仕方がないが、無断占拠せざるおえないだろう。当然、強い反発が来るのは承知のうえで。この考えに彼はどう動くのか・・・。

「ほう、これは異なる事を申される。争う気は無いと言いながら争いの火種を持ち込もうとするとは」

「ですから、その事を含めて今代の長と是非お話がしたいのです」

「・・・暫く、時をいただきたい。私一人ではどうやら決めるには荷が重い事ようだ」

「ええ、僕はそれで構いません。代わりといつてはなんですがこの付近に待つだけの間居を構えても？」

「・・・待つだけとの言葉、違いぬならよかるう」

「ありがとうございます」

「では私は長に報告に向かわせてもらおう」

「はい、できればよき返事がもらえることを期待しています」

「それは約束しかねる」

「これは手厳しい、では良い夜を」

息の詰まる会話が終わり、意外にも仕掛けて来ないで隠れて放たれた見張りの式を残して彼らが去った後で、僕はスタッフオブハウスを使い杖から家を作り出した。

うん、このアイテムどう考えても質量保存の法則とかガン無視して

るし、一通りの家具が揃つてるとかどんな構造してるんだよ！

疑問に思っただけ無駄なのでフィーと交代で休む事にした。それから3日の時を掛けて長との対談が実現した。ただ、対談には長と面識のある大妖怪の方々も参加するとの事。

・・・なんで退魔してる人間の長と大妖怪に面識があるのか突っ込みどころ満載だが、どうもこの時期から妖怪の衰退の予兆を感じた大妖怪が接触したようだ。・・・その割には連日の百鬼夜行に居た奴も含まれてるようだが

ここに世にも奇妙な殺気全開の対魔の人間達＋日本の大妖怪と西洋の魔術師兼上位魔族とそのパートナーという他ではまずお目にかかれないう対談が始まった。

「初めまして、私が彼らの長を勤めさせていただいてるものです。此処に居る彼らは突然の貴方達の訪問に大変関心を持たれていたようなのでお招きしました」

「なるほど、僕は西の方で神秘の秘匿と様々な人を受け入れる時計塔という魔術師達の組織で長をさせていただいてるものです。一緒に居る彼女は私のパートナーを勤めていただいてます」

「そうですか、それで神秘の秘匿を掲げる貴方様が如何様な目的でこの国へ？下のものの知らせでは東の方に居を構えたいと窺いましたか・・・」

「はい、僕らの目的はこの地に仮の居を構え万一の備えと神秘の秘匿のための監視と、東の方の地の調査が目的で足を運びました」

「居を構えるのは分かりましたが、何故東の調査など？」

「僕らの仲間に地に働く力が分かるものがありまして、その者の話によればこの地の東に規模こそはそれほどでもないのですがその質においては計り知れぬ物を感じたそうなのでその調査がしたいのです」

もちろん、半分は本当で半分は嘘だ。本当なのは精霊の働く力が分かることで、分かるのは僕や時計塔でフェアリテイマーの技能を取った人達だ。

学ぶだけで精霊の事が分かったかこれも少々反則だと思うのだが気にしない事しておく。そして嘘は、遥か彼方の極東の地の精霊の力なんて現地まで行かなければ分かるわけが無いと言う所だ。

「なるほど、それでその調査でもし何かが見つかったら貴方達はどうなさるつもりで？」

「僕らにとって必要な回収を、そうでなければ下手に刺激したくないので放置し、監視しようと考えています。勿論、その結果はお知らせしますが」

「わかりました。しかし居を構えると言うのは・・・」

「僕らは地上にあまり多くの土地を求めません。神秘の秘匿を掲げる以上、基本は地下に潜り、広げそこで活動していきます。地上の方は東の方の異常の地の僅かな場所・・・家一つ分でも借りられたら幸いです」

これも本当の話だ。現在の本部も地上は掘っ立て小屋だし、本部予定の時計塔だつてその主な機能は地下に集約される。まさか妖怪達の勢力圏が地上のみにあらず地下帝国まで建設しているのならこの話は流れるだろうが、そんなことは無いはずだ。

「あくまで敵対する意思は無いと言う事ですか？」

「はい、此方に来た時の妖怪達の事は我が身を守る為に仕方なくしたことですし、もしかの地を借りれるのでしたら貴方達の要請があれば最大限協力は惜しみません」

家賃と言うわけじゃないが、彼らその地を守護する者達には可能な限り消えてもらいたくはないしね。

もし四散なんてされたら、彼らが持つ知識・技術の消失に繋がるだろうし、先を見据えても協力体制はとっておきたい。

「ではもし、私共がその要求を全て拒否し、貴方達の目的のものに干渉を考えた場合貴方達はどうするつもりですか？」

「その場合は仕方ありません。交渉決裂し尚且つ調査できぬのであれば調査対象の破壊をし、東北の地を攻め其処に上と下の双方に居を構えさせていただきます」

今回も結局恫喝になってしまいが、僕らも今後の事を考えると余裕があるとは言いがたく、どのような手が最善か手探り状態なので自分の手札とならず尚且つ鬼札になるようならば、その破壊も辞さない構えだ。

勿論、これは下策中の下策なので褒められた行動ではないが、もし其処にあるであろう世界樹を放置し、魔法バレなんて事態になったら目も当てられない。

長達は大妖怪達と話し合いを続けてるようだが、どうやら結論が出たようだ。

「わかりました、貴方達の調査や場合によつての回収、居を構えるのを認めましょう。ただし、調査結果は必ず私共に報告する事、居を構えるのは調査対象の地の周辺のみとさせていただきますよ」

これは驚いた、てつきり拒否されるか良くて回収は無理だと思つたのに、あつさり全ての提案が認められて更に要求以上の事を認めるとは。

彼は居を構えて良いといったのを『家1つ分』ではなくその周辺と表現した。つまり後の麻帆良になる地の何割か、下手したら全ての借り入れを認めた事になる。

「僕らが言つにはおかしい話ですが・・・、本当にその条件でよろしいので？何故家一つ分ではなくその周辺と？」

「簡単な事ですよ。多分貴方達が求める地が妖怪達の禁忌の地であり、私共の手に余るからですよ」

・・・は？今なんてった？『妖怪達の禁忌の地』で『私共の手に余る』だつて？おいおいおい、次はどんな刺客ですかorz

世界樹・蟠桃^{ぱんとう}が妖怪に危険であるとか、この地を守護してたもの
手に余つてたとかいう話は聞いた事が無い。

つまりだ、その地にあるのは世界樹・蟠桃^{ぱんとう}ではなく別の木、もしくは別のものと言つ事になる。

多分、世界樹・蟠桃^{ぱんとう}もきちんと存在して『魔法使い』達が後で持ってくるだろうが・・・、問題は今その場所にある『もの』だ。

僕の見立てでは衰退が進んではいいえ、妖怪も守護してる人達もまだまだ十分その下まで強く、双方が全力で来られたら僕ら2人だけだと苦戦を免れない、フィーの召喚に頼る可能性すらあるのに、その彼らですら手出しできないものとは。

確かに、既に色々爆弾を抱えて更に対処できないものを抱えてくれるのであれば寧ろ喜んで提供するし、周囲の土地も自分達に被害の及ばないよう予防線として差し出すのだろう。

そして長は僕がその存在の何かを掴んだ上で、その考えに行き着くと判断して妖怪達を説得したのだろう。

負ければそれはそれでよし、その土地にある”もの”の力を削られるし、もし手に入れたとしても当面は此方を害する意思は無さそうとの判断か。

「なるほど、私の疑問は解けました。では早速その地に向かわせていただいても？」

「ええ、勿論構いません。道中を手の者に案内させましょう」

「お心遣いありがとうございます」

「いえいえ、当然の事ですよ。では向かわれる前にこの書面に誓約していただけますか？」

「それは勿論です、双方にとって益のある結果になって幸いです」

「・・・ガロード・デイル殿ですか。ではデイル殿、道中の安全お祈りしております」

「ガロードで構いませんよ、青山殿」

「ではガロード殿も私の事は重明しげあきとお呼びください」

「では重明殿、またお会いしましょう」

「ええ、是非ともまたお会いしましょう」

書面に僕らの組織名と代表である僕の名前、ついでに血判も押しといたから誠意の方は伝わるだろう。

相手は陰陽師を抱えているから、あの血判と名前さえあれば、僕が危険と判断されたりいつでも僕に対して呪殺を試みれるだろう。

まあ、流石にこの身が呪いで滅ぶとは思ってないだろうが、それでも行動は大きく阻害されると思う。

つまり相手に自分の身体に時限爆弾を着け、そのスイッチをわざわざ相手に提供したのだ。

これで誠意が認められないとは思えない。事実相手は、僕が先に名前で呼ぶのを許したのに対して、自分も同じように名前で呼ぶ事を許したのだから。

さて、その長との会談を終え、僕らは目的地へと案内人……人であったり妖怪であったりしたが、皆此方を警戒しつつ目的地付近、多分のちの麻帆良になるであろう土地付近に到着した。

「おい、ガロード。これってどうみても”カボチャ”だよな？」

「”カボチャ”で正しいけど……、問題は何故”このカボチャ”が存在するか？だよ」

既に危険なので、案内人は離れ式神が後方で監視してるだけなので遠慮なく会話してるが……、あれはどう見ても聖剣伝説にあった主人公が弟子を取るイベントで出てきた”お化けカボチャ”である。なんだ？今度の刺客は聖剣なのか？詳しく聞かなかった僕もいけな

いが、なんで聖剣なんだよ！確かにあれも”世界樹”ぽいのあるけどさ！

しかし、様子が変わる。もしあのイベントの力ボチャであれば、その召喚主・・・弟子イベントのときは2人の子供だったが、特にそれらしい人物は見当たらない。

「にしても聖剣とはな。・・・てことは、ガロード。この奥にある莫大な魔力を放ってるのは”マナの樹”か？」

「そうなるだろうね。ただ、別の存在の可能性も否定もできないよ。例えば・・・宝石王やアーウィン、ティアマツトなんて線も聖剣なら有だしね」

彼らは全て聖剣の格話のラスボス格の存在だ、宝石王が宝石泥棒編、アーウィンがエスカデ編、ティアマツトがドラゴンキラー編のボスだ。

しかし、この力ボチャイベント自身は単発で、弟子を取れば以降は弟子に関連するイベントはあれど、力ボチャに関連するイベントは無かった・・・はずだ。

正直、こう堂々と力ボチャがあると対処に困る。しかも1つ1つが予想以上に魔力を帯びているし、これが爆発する以上迂闊に近づけない。

また、あの物語は愛の化身であるマナの樹の女神を目指すというものだ。しかも、マナの樹は女神の眠る姿でもある。

いきなりクライマックスを押し付けられた気がする・・・。もう”大戦”とかその後の魔法世界の問題とかどうでもよくなるようなものが目の前にあるのだから。

そう、マナの樹の女神は向こうの世界での創造神、つまり神だ。しかもマナの樹は膨大な魔力を放つ・・・多分魔法世界を維持できるくらいには。

自分達もユグドラシルの若木という別世界の世界樹は出せるが、年季も格も段違いである。蟠桃ばんとうだって及ばないだろう。

洒落にならないのは何かここを手に入れてなおこれを放置した場合、超の力シオペアが使い放題になる点もある。なんといっても魔力は垂れ流しで、更に無尽蔵ときた。

だからといってあんな巨大なもののゲートをくぐれるとは思えない此処からは薄暗すぎて見えないが、あれの高さは世界樹の類の例に漏れず巨大のはずだ。

そんな終わらない思考の中、僕はフィーの声で我に返った。

「お、おいガロード。こりゃ、どういうことだ？」

「カボチャ畑が枯れていく・・・？中のいる誰かが僕らを呼んでるの・・・かも？」

カボチャたちが枯れていったおかげで、一応通行は可能にはなった。また、先ほどから感じていた膨大な魔力も急速にその力を失っていく。

一体何が始まったのか？僕ら2人はそれを確かめる意味を込めて奥へと足を踏み出した。奥へ行くと目の前に姿を出したのは、時代背景を完全に無視した建造物・・・マナの聖域の残骸だった。

残骸、そう其処に本来無ければならないもの、マナの樹が存在しないのだ。いやこれでは語弊がある、”マナの樹”は存在している、

ただし枯れた状態で・・・だ。

「おいおい、いったい何がしたいだ、あの神様は？」

「僕に聞かないでよフィー、僕だって頭が痛いんだから」

ここまでお膳立てしといて突然枯れるとはどういう了見だ？あれか？神様のうつかりで生やしちゃって僕らが近づく事で気が着いたから慌てて枯らせたとかそういうことか？

あまりの急激な変化に眩暈を覚えつつ僕らは更に奥へ進んだ。・・・その進んだ先でこの聖剣では見慣れた者が僕らを出迎えてくれた。

「やあ、君らが来るのを待ちわびたよ。ようこそ、枯れ果てたマナの聖域へ」

「草人・・・？僕らを待つてたっていったい・・・」

「騙されるんじゃないぞガロード。こいつは草人なんかじゃねー！姿形は草人だろうが、その内に秘めた魔力は私は誤魔化されねーぞ！！てめー何者だ！！！」

「ん・・・、やっぱ幻想の書にはばれるか、いや今はフィオナか初めましてガロード、フィオナ。この身はイレギュラーなんで性別

なんて無いし、元は女神って呼ばれてるんだけど、とりあえず被らないように「我」にするかな？我はマナの女神、君達のそして物語の最後の鍵になる存在だよ」

現れた外見どうみても草人の、草人もどきはなんとマナの女神を名乗り、更には最後の鍵とかいいだした。

フィーの反応からしてマナの女神で間違い無さそうだけど、”最後の鍵”とはどういうことだ？

「マナの女神ってのは分かったけど、最後の鍵は？」

「ん？わからんのか？我が魔法世界で発芽し、マナの樹となれば魔法世界が維持できると考えついただろうに。我はな、曖昧な物語の”終わり”を明確化する最後の鍵だよ」

「て、ことはなんだ？おめーが魔法世界でマナの樹になった瞬間が私らのこの世界での旅の終わりって事か」

「正確にはもう少し、次の世界に行く前に猶予がもらえるじやろうがな。多分君達がかかった原作キャラの最後の1人が死亡した翌年くらいかな？」

驚いた、いきなりネギま！世界の最大の問題点。”魔法世界の消滅”をまさか神様自身が解決策を送ってくるとは。

しかもアフターサービスも随分まとまな部類だ。それだけに気になることが発生する。

「なるほど、それはわかった。なら君はいつ発芽するんだい？そしてその時に何が起るんだい？」

「私の発芽はそうじゃの、原作の夏休み、魔法世界編とやらにはいつてからじゃの。時間はマナの樹になるまで約3日。そしてその3日が神様からの最大の挑戦となるじゃろ。勿論中身は内緒じゃ」

やっぱり、発芽の時期は魔法世界編までお預けか。・・・こうなると3日の時間が問題だな。何で妨害してくるかは秘密だそうだから可能な限り対策しないと。

「それとな、神様からの伝言だ。」薬味は麻帆良で先生になるまで手出し不可、魔法世界編になるまで教師続行不能不可”だそうだ。
・ ・ ・残念だね、神秘の秘匿が軽い者に手出しが出来くて。勿論違えた時は何が起るか我でもわからん」

・・・最悪だ。これで薬味を攫って再教育すという計画は潰えた。また、逆に神秘の秘匿を第一に掲げる時計塔の面子すら破壊しかない制約だ。

なんといつても時計塔は自覚のない、あるいは悪意がある多人数に対する魔法バレ〃抹殺を掲げている（勿論仕方の無い状況での魔法バレはある程度不問にしている。例えば認識障害に耐性のある人間

等）「魔法使い」「魔術師」問わずで・・・だ。

これは大戦が終わった後ぐらいで時計塔の皆と話し合いだな。勿論全てを話した上で、薬味への僕らが取るべき対応、そして魔法世界で戦う意思がある者の。

神様のことだ、旧世界へはもう僕ら組織に関しては直接的な手の追加は無いだろう。あつて「黒の教団」を動かす程度、・・・こうなると結成時の思考は少し過剰に考えすぎてたか？

勿論、一度も矛を交えた事の無い相手に対して油断は禁物だが、主力は間違いなく魔法世界だ。

折角の『遊び』だ、神様も僕に全力できて欲しいし、もしかしたら誘導して「黒の教団」も魔法世界へ来るかもしれない。

後は、薬味や英雄関係で来るかもしれないが、それはその時々で対処したらいい。・・・神様も全部待ち伏せじゃ退屈だろうしね。

「さて、君の考えはまとまったみたいだし、我もフィオナみたいに名を貰ってもいいか？このままじゃ呼びにくいだろう」

「おめー、結構神経図太いな。ガロードに名前をつけされるなんてニキータとかタマネギ剣士とかつけられても私はしらねーぞ」

「フイー、流石に僕だって其処まで酷くはないですよ？それに同じ関連でつけるのは楽しくないじゃないですか」

「おめー、趣味悪すぎだぞ。確信犯かよ、このやろー」

「で、なんでもいいがさつさとせい」

「んじゃ、君は今日からアーベ、アーベ・タロウだ！」

「馬鹿か、おめーは！……！」

「む……、我でもその名のセンスは引くぞ、ガロード」

むう、冗談の通じないとはなんと嘆かわしい。此処は空気を呼んできちんと物真似するべきだろうに。

間違ってる、お前は間違ってるぞ！といたいだが、フィーが家畜場の豚を見るような目をされたらたまらないので自重しておく。

「ははは、冗談ですよ、冗談。……ディル・リンなんてどうですか？」

「良い名だ、では我は今日よりマナの樹に還るまでディル・リンと名乗ろう」

「ふーん……。で今度は運命か？」

「ハハハ……。ナンナノコトカナ、フィー」

「やっぱり当たりか。2人の槍兵混ぜてよくもまあ作れるもんだ」

「いいじゃないか、本人も納得してるし」

「ったく。で、これからどうするんだ？」

「とりあえずは向こうへの報告。勿論、正体までは教えず確保だけど。向こうに挨拶すれば問題ないと思うし。後は支部の設立だね」

「ん、わかった。んじゃ早速行くぞガロード、デイル！」

「うむ、心得た」

「よし、出発だ！」

9・世界樹？だよ！（後書き）

さて、遂に登場。今作のネギま！完結用のオリジナルキャラ、草人もどき、デイル・リン。

実はこのキャラで終了を思いついたのが書き終わり前日2/6なんだ。それまで終了の予定はだいたい同じだけど、どうそこまでもつていくかが未定だったんだ。

ただ、これ決めちゃうと薬味いらない子確定なんで、救済（？）処置を取りました。

まあ、そんな話は置いて次回予告！下克上が渦巻く戦国時代、整えられていく支部、そこで産まれる新たな仲間、そして交流する東と西。彼ら3人と新たな仲間は一体いつまで日本に居るのか？また見て、次回！

10・チャチャゼロ？だよ！

その後、報告して西と更に仲良くなったガロードだよ。

なんで仲良くなったかと言うと1・役立つマジックアイテムの提供。
2・借りた土地に西の人の支部も置く事にした事。3・長とやりあった事

大きく上げるとこの3つだね！詳しく説明するとまず1・はここに
来る時に使ったスタッフオブハウス。合言葉1つで家が建ったり、
杖に戻したりできるチートアイテムだから各地にいく人にどうかな
って打診したら、少し考えられたけど受け入れてくれたよ！

他にもその流れで各種能力増強の腕輪・指輪とか、泉を調べるのに
常時浮いていられる天使の靴とか、変わった所では水が酒に変わる
酒の種なんかも喜ばれたよ！

2・はいずれ出来る麻帆良に少しでも釘先出来る意味もあってここ
らからお願ひした所、僕らを監視できるって事であっさり了承して
もらったよ！

最後の3・はぶっちゃげ交流試合みたいな物なんだけど、人や妖怪
のギャラリーがひしめく世にも奇妙な交流試合になったよ！

んで、結論で言えば初戦は僕の負け。え？手でも抜いたのかって？
いやいや、そんな失礼な事はしてないんだけど、この身はあくまで
ソード・ワールド2・0の技しか覚えてないわけですよ。

つまり、他種・多彩で妖怪退治を専門とする神鳴流奥義には残念な
がら劣るわけですよ。勿論次に技を封じてもらった剣をるだけの2
回目では圧勝に終わりましたけど。

でも、この交流は大変意味があつて、僕が長に気に入られ、先の契
約書を新しく作って血判付は破棄してくれてしかもその土地の所有
まで認めてくれて、更に神鳴流奥義まで教えてくれました！

なんでも、この異常なまでの剣の才能があつて、技がないのは勿体
無いとの事。血判や土地件も含めて長には感謝してもしきれないで

すよ。

ただ、流石にすぐには会得できなくて免許皆伝に20年かけちゃった、テヘ！

因みにその間フィーがデイルを引き連れて一旦時計塔に帰還、極東の国日本の支部にこれそうな人を打診したのですが・・・人は回せるんですが、誰もがトップを渋ってしまいました。

理由は簡単、トップに立てそうな人がヨーロッパを離れられないからです。今だって僕がここに居るのはまずいみたいなんです、同士達が苦情一つ無く頑張ってくれてます。

なので悩んだ結果、トップが居なければ作れば良いじゃないか！と後の僕が見ても電波な思考に達したのです・・・で、その『作成』の為に再びフィーに日本上陸してもらったのですが・・・

「なあ、ガロード。おめー、馬鹿じゃねーか？いや馬鹿だ馬鹿だとは思ってたんだが、ここまで大馬鹿とか私がパートナーでもサポーターしきれないぞ」

と、ゴミ虫でも見るような冷たい目で言われてしまいましたorz
勿論僕にも言い分があるので、軽いショック状態から立ち直った後反論します。

「いや、フィー。僕は正常だよ。『チャチャゼロ』を作って日本の支部を任せたように思うんだ」

「『チャチャゼロ』だって？ガロード、そいつはエヴァンジェリンの従者をするはずのやつじゃないか。しかも、もうエヴァンジェリ

ンはとつくの昔に亡くなってるんだぜ？」

まあ、フィーの言い分もわかる。エヴァは確かに天寿を全うしたし、その子孫だって居る。

それに、別に本物の『チャチャゼロ』を作れるなんて思ってもいいさ。・・・てか本物作ったら危なすぎて支部まかせられないし。

「まあ、本当は名前なんて何でも良かったんだけどそのほうが後に会うと思う超 鈴音にはうけがいいかなって？」

「おいおい……。で、それでどうして私が必要なんだ？」

「ぶっちゃげ人形術なんて僕が今から開発するのは時間の無駄だろうし、そんな暇があったら”別荘”や”闇の魔法”の開発がしたいしね」

「・・・それが何の関係があるんだよ？神鳴流極める為に20年も使ってる奴のいう台詞じゃねーだろ」

それを言われると辛い。長の完全な厚意で学ばせてもらってるだけに、途中で切り上げるとか面子を潰すような事出来なかったんだよ。んで、免許皆伝に20年。それでも急いだ方だけど、世界は待ってくれないしね。それに、まだ見ぬ同士と顔合わせもしたいし。

「フィーも手厳しいな。流石にこれ以上時計塔の本部をないがしろにするのはまずいし、時間が足りるか疑問なんだよ。これからの2つは手探りだからね。でフィーを呼んだ理由だけど・・・ルンフォで代用したいからジェネレーター作って！」

「・・・おい！種族増やす気かよ!!」

「別に”種族”になるほどとは作らないよ。できるのはチャチャゼロ1人だけだし」

「ルンフォだって寿命はどうするんだ？死んだら順に作るとかするのかよ？私は嫌だぞ、そんなの」

「寿命の方は・・・打診して望んでくれたら仮契約で、無理なら今度こそ誰か他の人をトップに据えるよ」

「まったく、ガロードの思いつきはろくな事が無い」

「失礼な、僕がこの地に降り立ってからどれだけ偉業を成し遂げたか」

「いや、自分で偉業とかいってると痛々しいぞ？」

「と、ともかく。支部を任せる為に稼働してすぐに従事できるルーンフォークが必要なんだよ」

「わかったよ。んじゃ支部で早速作るとするか。んで？性別は女だろーが、サイズは70cmでいいのか？後硬質素材の場所はどーする？」

「性別とサイズはそれでいいよ。場所は・・・足かな？出来るだけ目立たない方が嬉しいな」

ルーンフォークは人間ソックリな上、食事や睡眠なども必要なので、その性質上人と区別する為か首や他の部分の一部を後硬質素材にしなければならいのだ。

僕的にはいらないのだが、ソード・ワールドのルールで縛られている以上、それを無視して作っても動かず、ただのわけの分からない部品が敷き詰められた人形にしかない。

で、ルーンフォークの寿命の方は基本一律50年保証（多分コアの規格かシステムがほぼ同じなのだろう）で、それ以降にある日突然機能停止（寿命）となるのだ。

「了解、性格がいい奴が出来ると良いな」

「そればかりは正に『神のみぞ知る』だよ。ただできれば名前に引

っ張られて『チャチャゼロ』みたいな性格になるのだけは少し困るかな？口調や冗談なら笑って流せるけど残酷だったり暴力的なのは支部を任せるのには困るし」

「まあ、それもそうだな。よし、ジェネレーターを作り始めるからガロードはそっちのパーツを頼む」

「わかったよ」

僕とフィーは早速支部でチャチャゼロの製作に入ってたんだが、これがまた難しい。第一にルーンフォークが普通は『作るのが非常に難しい』からだ。

これは、彼らは僕の現在もつ技術の2000年も前に生まれて、3000年程前にその技術の多くが失われているためだ。

向こうでは培養液を量産できる技術が失われている為、ルーンフォークを作る装置は1年間で1台のルーンフォークしか製造できないのだ。

まあ、フィーも居るし装置の作成年数も考えて2年で支部の代表が出来る予定だし問題は無いだろう。

そして、時は流れて2年後ついにルーンフォークの稼動の日がやってきたよ！

「長い道のりだった・・・、でもこれで支部を任せる事ができるや」

「まったく、思い付きで2年とかこれで無駄になったらどうする気

なんだ？」

「う、・・・来たくれた同士の誰かにお願いするしかないかな」

「まったく、こんなのが魔術師の頂点だなんて世も末だ」

仕方ないじゃないか、いつぱいいつぱいなんだから！支部の方は人が着たのでとりあえず活動してます。

西の方に納得されるか不安だったけど、この戦国の世で孤児の人達を引き取るのは寛容的で大変助かりました。

「・・・と、どうやら起動するみたいだぞ」

「・・・ン？朝ナノ力？」

「おはよう『チャチャゼロ』」

「オハヨウ、アンタガ私ノ創造主力？」

なんだろう、とても嫌な予感がする声なんだが気のせいだろうか？とりあえず創造主を知りたいようなので、素直に教えてあげる事にする。

「創造主は向こうのフィオナって女の子だよ。僕はその助手をしただけさ」

「ガロードが発案なんだから、創造主はガロードの方だろうが」

「・・・ツマリ、2人が創造主だな。デ、私ノ名前ガチャチャゼロト言ウワケカ」

「フイー。言語機能いじったりした？さっきからどうもチャチャゼロの様子が・・・」

「私がそんなことするわけねーだろ。名前に引つ張られたんじゃないのか？それか神様の悪ふざけか」

嫌な予感の正体はその喋り方だった。本物の『チャチャゼロ』そっくりの声なのだ。・・・多分。

口調が同じだとはまったく思わないが、文字に直したら漢字とカタカナだけであらう。

「デ、私が作ラレタ目的ハ？何カノ研究ノ助手力？」

「ちがうよ、支部のトップになって欲しいんだ」

「・・・正気力？確力ニ私ニ与エラレタ知識ナラ不可能デハナイガ、稼動シテスグノ私ノ指示ナンカ聞クノ力？」

どうやら性格のほうはまともなようだ。喋り方で不安になったが、この程度なら問題ない。

多分上手く支部の人間とやっていけるだろうし、現西の当主、重明殿も笑って受け入れてくれるだろう。

「その点は気にしなくて大丈夫だよ。皆の了承は貰ってるし、僕の使い魔だけど今本部は猫が取り仕切ってるからね」

「こいつのいい加減さは折り紙つきだからな。まったく、同土増やすのもいいが少しは本部に腰すえて面倒見て欲しいもんだぜ」

「・・・トンデモネーダメ創造主ダナ、オイ。シカシ、創造主ガ2人ダト区別ガ難シイカラ何カ他ノ呼び方ガ欲シインダガ」

「ん？それもそーだな。んじゃ、私を創造主でガロードを『御主人』でいいんじゃないか？一応一番偉いのはガロードだしな」

「ワカッタ、コレカラ宜シクナ御主人、創造主」

「ああ、よろしく頼むよ」

「これまた、名物魔術師の誕生かもな」

10・チャチャゼロ？だよ！（後書き）

ついつい説明くさくなって文字が固まってしまつて今回も見づらくて本当に申し訳ない。

そして、今回人形の代わりにルンフォでチャチャゼロぽいのを出してみたけどチャチャゼロファンに喧嘩売つてるとしか思えないよね、うん。

じゃ、なんで作つたのかつて？ルンフォ出したかつたんですよ！

次回は突然訪れる黒の教団の使者、そして訪れる激震！初めての時計塔の分裂！！分裂した元同士の取った行動は？そして苦悩する時計塔と、黒の教団との関係とは！？一体何が起ころのか！！と、その後、裏の現在の状況は？あのキャラは今？それをキャラ紹介＋裏情勢にてお知らせ！豪華二本立てでお送りします！見てくれなきや（フィーが）暴れちゃうぞ！

11・黒の教団だよ！（前書き）

2話連続投稿なので今回はこつちを1時間早めたよ！更に、初感想を記念して、3話連続更新の暴挙に出る事にしたよ！23時もお楽しみ！！

また、原作に行く前にネギま！も買ったよ、詳しくは小説TOPを見てね！

11・黒の教団だよ！

結局あの後チャチャゼロと仮契約して、本部に帰ったら人が増えすぎて軽く引きつったガロードだよ。

いやね、確かに22年間本部に1度も戻らなかったのは問題だけだね、人数が支部に100人程割いても4桁超えてるってどんだけ荒れてんだよヨーロッパ！

また、長期間空けてる間に各分野のトップ＋各神官のトップで幹部会ができてたよ。これで独裁じゃ無くなったね！

正直僕ら3人で決めてたから本当に大丈夫かと思ってたけど、幹部会が出来てもそうずれが生じなくて安心したよ。

ただ、ちょっと気になるのはごく少数だけど派閥が出来てるみたいなんだ。

大体現在の時計塔は・・・僕ら主流派が8で、魔術（ソドワの呪文はネギま！と区別の為結社内では魔術で固定）の学習を更に厳重にすべきとの慎重派が1.5で、世にも素晴らしき魔術の世界への発信が0.5なんだ。

…うん、なんかいつの間にか過激派が出来てるんだよね。慎重派は少し臆病になってるだけだから、意思を尊重できるけど時計塔の根幹を揺るがす過激派は危険かな？

などと対策を考えてただけど、原作開始400年前、西暦1600年前後に意外な訪問者が着たんだ。

「主、今よろしいかな？玄関にお客がきているのだが」

「客？玄関について防衛にあった子達はどうしたの？」

「残念だが、この場所に客が来るなど考えられてないので全て返り討ちになったな」

「・・・それは一人で？」

「そうだ。相手は黒の教団を名乗ってるがどうすればいい？」

「フィーはどうしてるんだい？」

「今フィーならその客とにらめっこしてるぞ」

「すぐ行くよ。アルテミスは他の幹部にできるだけ召集をかけといて。後ジャンに奥に隠れてるようにも伝えて」

「わかった」

この時代の完全武装程度なら、軽く蹂躪できる数のオブシディアンドッグの群れと、用心の為のドゥームが1人の多分イノセント持ちの人間に破壊されるか。

A K U M Aとこれらのどちらが上か分からないけど、多分配備した数だけだとA K U M Aに質が劣ってたのだろう。・・・LvいくつのA K U M Aに劣ってるのかは考えたくないが。

ただ彼らの行動の意味がまったく分からない。警告なら破壊して帰ればいいし、侵攻なら数が少なすぎる。・・・まさか協力関係を持ちたいとかいう話でもないだろう。

また、にらめっこしてるのがフィーなのが問題だ。フィーは、基本僕よりは冷静さを維持できるが、突然の手荒い訪問、自分が召喚した物を壊されて何処まで冷静か分からないし。

そんなことを考えつつ玄関に向かうと、お馴染みの教団の服をきた小柄な金髪の少年がフィーとにらめっこしてた。

「フィー、彼が客かな？」

「ガロード！」

「初めまして、黒の教団に所属するリードというものです」

「初めまして、随分乱暴な訪問ですがどういったご用件で？」

外見の年齢からは考えられないほど落ち着いた反応で少々驚いたが、僕も人の事がいえないので気にしない事にする。

フィーの方もただの牽制みたいで怒ってないし、とりあえず安心だ。

「こちらではこれが歓迎の方法と勘違いして、つい手が出てしまい申し訳ない。できれば事前に警告なり質問なりが欲しかったのですが」

「これは申し訳ない、なにぶんここへ訪れたがるものなど居ないと判断していましたので、不届きものの対策しかしてなかったのですよ。・・・で、本日はどのような要件で」

日本の支部が相手する西と違ってこっちの教会は魔女狩りとかして
るし、しかもそれらを僕らは保護して同士にしてるわけだから冷戦
状態の相手が攻撃以外来るとか普通思わないだろうに。

まあ、それでもまったく確認しないで、同士以外攻撃するように指
示しといたのは失敗だったか。

「そうでしたか。実は本日は教皇様の指示で貴方達組織と不可侵を
結ぶよう仰せつかって来ました」

「・・・は？それは本気ですか？」

思わず聞き返した僕は悪くないはずだ。なんたつて彼らからすれば
異端の塊、異教徒達の本拠地であるこの時計塔と不可侵だって？
いくらなんでもおかしいだろ。あれか？今代の教皇は弱腰なのかど
こか抜けてるのか？？流石に彼らには聞けないし、判断に悩む所だ。

「はい、勿論本気です。貴方達は濫りに広めたりもしてませんし、
場合によっては教会の益になってるので双方見てみぬ振りをしたい
との事です」

「なるほど・・・、少々仲間と話し合ってもよろしいですか？もしよろしければ、案内のものに部屋でお待ちしていただきですが」

「ええ、構いません」

「では・・・フイー食堂に案内してあげて。あそこなら飲み物とかもあるし」

「ん、わかった。でも話し合いには私も参加するからな」

「当然だよ。こればかりは荒れそうだけど・・・」

彼の言い分は分からないのでもないのだが・・・、言うては悪いが怪しい。まさか、神の使徒である彼らが嘘をつくとは思えないが、真意がわからないのだ。

だって、現在既に冷戦状態だけど、お互いが矛を交えた事は双方の存在を確認してから1度だって無いのに。

つまり現時点でいつ交戦状態になってもおかしくないが、擬似的な不可侵状態になってるのである。

それをわざわざ話し合いで来るなど、こちらの益になっても向こうの益など存在しないと思う。

会議室に入ると、既に僕とフイーの除く全部幹部達が集まっていた。・・・皆忙しいだろうけど、事が事だけに全員集まってくれたみた

いだ。

「皆集まってくれてありがとう。フィーは後から来るから先に話し合いを始めよう」

「代表、黒の教団の人間はなんと？」

「彼らは僕らと不可侵を結びたいと言ってきたよ」

「・・・は？代表、私の聞き間違いですか？不可侵を結びたいといいましたか？」

「うん、君の耳は正常だよ。間違いなく彼らは不可侵を結びたいと申しd・・・」

「ふざけるな！」

ドンツ！！と大きく机を叩き声を荒げたのはスカウト技能代表だった。彼らはその特性上結社の目となり耳となってるから些細な村の噂など、主に魔女狩りを優先で当たってもらってる。

「異端審問や魔女狩り等をしておきながら我らと不可侵だと、寝ぼ

けるのも大概にしる！」

「確かに、いくつもの魔女狩りから保護をしているが、我等とその全てを保護しきれてはいない。そんな中でそれを実施してるものと手を取るなど・・・」

次に難色を示したのがグラッブラー技能代表だ。彼らも魔女狩りを主に担当してるだけあって反対のようだ。

その後、次々結社の前を守るべき存在たちが相次いで反対側に回ったが、ここで別の意見もあがった。

「しかし、彼らと一枚岩ではない。現に教皇直属であるはずの黒の教団が使者となってくるなどただ事ではありません」

「彼らは自分達の益になるとも言ったのですね？つまり魔女狩りは半暴走の状態になって教会でも手がつけられないのでないでしょうか？」

「もし、そうだとしたらこの話は我らにとって悪くはない・・・か。調和を教義とするライフオス代表としては賛成に回りたい」

結社の癒しを司る神官達が相次いで賛成に回り始めたのだ。実際、彼らは『不可侵を結びたい』とはいったが、『魔女狩り妨害をやめる』とはいってきてはいない。

そもそも、そんなことを言えば決裂は目に見えている。いくらなんでも教皇まで上り詰めた人間がそこまで考えてないとは思いがたい。・・そう考えたのだろう。

結社が二つに割れる中、残りの発言権をもつ神官勢以外の魔術師達はフェアリーティマー代表を除く全てが反対。

フェアリティマー代表が必要の無い争いは避けるべきの考えに対し、他の魔術師は自らを律せ無い者と結ぶだけ無駄との判断である。

さて、そう話し合いが紛糾している中最終的に僕らを除く幹部達は4・6で反対が優勢となり、後は僕らの意思次第となってしまうた。

「代表、我ら代表達を除く幹部の意思は反対の方に現在傾いておりますが、代表はどういうお考えで？」

「僕自身としてはね、彼らと結ぶのも必要だと感じているよ。僕らは教会と争う為に結成したわけじゃないからね」

「な、ガロード、お前何言ってたんだ！あいつ等がここに居る皆の何割かを作り出した仲間なんだぞ！！」

「我は主が結ぶと決めたのなら異論をない」

「アルテミスも何言ってたんだよ！私はぜってー反対だからな！」

最終的に僕とアルテミスが賛成、フィーが反対に回った事により5・

5と意見が平行線になり、最終的に『結びはするが最低限であり、此方に何か干渉があればすぐに解消する』と言う条件になった。反対側に折れてもらった結果にフィーは不満だったが、いくら同士が増えたとはいえ必要の無い争いまで僕はしたくなかったのだ。

「話し合いの結果このような条件になってしまったけど、其方の方は問題ないかな？」

「かえって教皇様にお伺いせねばなりません、多分問題ないでしょう。また、後ほど使者を立てますが今度は私共ではないと思いますので手荒い歓迎はご遠慮できればありがたいです」

「わかりました。話の分かる、別の者達を配置させてもらいます」

「ええ、お願いします」

「では、そちらの教皇様に宜しくお伝え下さい」

「ええ、其方こそお元気で」

彼が帰った後は急いで門番を置きなおすことだ。Lvが高くなると大きい物が多い魔法生物での門番は難しいと判断し、門の横に水源を作り其処をウィンディーネに管理してもらい門番の代わりをお願い

いた。

彼女達なら人の言葉が分かるし、強さも申し分ないはずだ。その後教会の使者から了承の文が運ばれ、ここに時計塔と教会との綱渡りの不可侵が結ばれる運びとなった。

しかし、西暦1665年にこの不可侵に結んでから最大の危機が訪れる事になる。原因はペストだ。

我ら時計塔は現在イングランド北部に本部を構えているが、来年ロンドンに将来の時計塔の本部となる礎を作ろうとしていたのだがペストの存在が許せない者たちが居た。

一部過激派のライフォス神官とティダン神官とザイア神官の3種の神官達である。

「何故、病気で苦しむものを見捨てるのか？」

「死するべき命ならそれを救い、同士とすればいいのではないか？」

彼らは病気で苦しむ者達が居るのに何故、安全な本部に籠り、苦しむ民を見捨てるのだと憤慨した。また、彼らが死に、その後大火事の後にその土地に本部を建てるなど言語道断と幹部にまで食いかかってきた。

だが、彼らの言い分を認めるわけにはいかない。なぜなら神秘の秘匿を抜いても2つの問題があるからだ。

1つは本来死ぬべきものを、此方に引き入れるわけでもなく悪戯に生かした場合表の歴史がどう変わるか未知数だからである。

一見問題ない行為でも、実はその後に泥沼の戦争や内戦の引き金になったりしたら目も当てられない。

引き入れれば問題ないといっても、ペストの死者およそ10万の内

1割未満でも超えたら時計塔の機能は麻痺するので実質不可能である。

なんたつて4桁には届いてるが流石に現段階では3千未満の集団だし、そもそもそれだけの人数が短時間に増えるとは計算に無く、本部・支部がすぐにパンクする。

2つめは・・・既存の宗教の駆逐の危機である。

たとえ黒の教団を抱える教会であつたとしても、もし癒しの奇跡を持って布教などしたり、助けられた結果信仰に目覚めたらどうなるか？

・・・まず、間違いなく駆逐されるだろう。勿論教会側が、だ。

どんなにこの世界の起源に無関係・自分達の本来の神でなくても誰だつて目に見えて、神官になれば神の声すら聞く機会があり、更に精進すれば自身が神になれる宗教が広まらないわけが無い。

だからこそ時計塔所属者全員にペスト流行時は異例ではあるが外出を控えたのだが、なんと離反者がでた。

主にライフオス神官を軸とする結社メンバー27人で過激派の中心である。・・・彼らの纏め役が優秀なので問題ないとしていたのが裏目に出た。

「どうするんだよガロード、このままじゃ・・・」

「時計塔の代表としても見過ごせないね。アルテミス、すまないけど大至急皆に彼らの抹殺指令を出してくれないかな？勿論僕らも動くよ。・・・彼らに救われた人達も信仰に目覚めてた場合は、記憶消去の選択無く保護あるいは・・・抹殺で」

「・・・わかつた。すぐ伝えよう」

最初から決めていた事だけど、いざ実行となると気が重い。しかも今回は宗教、真言魔法・躁霊魔法・魔動機術じゃなく、発動体は簡単な聖印、更に神の声が聞こえる・・・言い方は悪いがこの場合『汚染』された人が居た場合、記憶消去の選択肢は存在しないのだ。妖精魔法もそういった意味では妖精が見え、触媒は宝石なので記憶消去を施しても同じく危険だが、此方を学ぶ人達は大抵、同士以外の人嫌いなのでこういった心配は無いに等しい。・・・あの不可侵の時の賛成だって、本音を言えば自分達に係わって欲しくないからだろう。

そうして着々と出撃準備が時計塔で進んでいく中、招かねざる客・
・この場合は必然というべきか？黒の教団の人間が前と違い大勢で、殺意をちらつかせながら門前に集まっているとの報告がされた。

「お久しぶりです、代表。出来ればこういった形での再開はしたくなかったのですが・・・、宜しければ事情を窺っても？もし無理でしたら、双方にとって残念な結果にしかないと私は思うのです」

「おい、リード！そんなこと気にせずこの異教徒共を抹殺s・・・」

「まだ止めてくださいね、ギンターさん。この件はまずは相手の話を聞けと教皇様に言われたじゃないですか。っとエリザさんも、まだイノセントを発動しないでくださいね」

どうやら、まだ話し合うチャンスはあるようだ。離反者の抹殺と黒

の教団との全面戦争・・・正直、同時だったら悪夢でしかないの
助かる。

まずは彼らと話し合って今回の騒動の原因をきちんと伝えなければ。

「申し訳ありません、リード殿。我が方でもこのような事がないよ
うに外出を禁じ、ペストには係わるなといったのですが、残念なが
ら離反者がでて、そのものが暴走したようで・・・」

「なるほど、君達は無関係だと？」

「言い訳がましいですが、そうです。既に彼らに対し時計塔では抹
殺を決定しました。他にも彼らが治した人に関して我らの神の声が
聞こえるものは記憶処置無しで此方への合流か、抹殺をする予定で
す」

流石に相手から見ても自分達の同士や、自分達にとって信仰の対象で
ある神の声を聞いたものをいきなり抹殺の可能性すらあると言われ、
相手の何割かが固まった。・・・どうやら黒の教団は思ってたより
仲間意識が強そうだ。

「そうですか・・・、その抹殺の動きに僕達がついていても問題
ないですか？」

「ええ、構いませんが・・・できれば殺気を控えられる人だけにして

いただきたい。流石に背に殺気を受けながらでは身動きが取りにくいので」

「ああ、それは約束するよ。・・・ギンターさんとエリザさんは至急教皇様にお知らせを、我らはこれより時計塔の離反者討伐を見届ける・・・と」

「・・・っち、わーったよ。ったく、異教徒が目の前に居るのに殺せねーなんてな」「了解した、直ちに教皇様にお伝えしよう」

「ありがとうございます。・・・仲間の準備も出来たようなので早速いきましょう」

「・・・誰も知らせに来なくても分かるなんて随分貴方は化物染みてますが、わかりました。では早速出発しましょう」

フィーが気を利かせて精霊にお願いして僕に準備完了を知らせてくれたみたいだが・・・、残念ながら目の前の少年に化物呼ばわりされてしまった。

まあ、実化物物と言われたら否定できないので気にしないでおく。さて、すぐに見つかれば良いんだけど・・・。

11・黒の教団だよ！（後書き）

はい、彼らはライバルから一転不可侵でにらめっこする関係になっちゃいました。・・・あれ？これどうしよう。

当初予定として前に出した男色の神が原因で戦闘に突入しようと思っただのですが、この場合途中で止められなかったら教会駆逐しかねないので廃案。

また、イノセントだけとはいえD・Gray-manと戦うのは変じゃね？と自身が思いいたりこのような形へと変更。

男色の神が現段階では死にネタになった（笑）さて、どうしよう・・・。

22時に次の更新があるからきになる人は見てね！

12・現在の関係だよ！（その一）

現在の主要登場人物（大戦前）

ガロード・デール

今作の主人公で皆お馴染みの転生者。生前はニートも一時期してたダメ人間。またロリコン・シヲコンでもある。（時計塔内部の人間には手出しはしてない）

ふとしたことで死亡し、神様の気まぐれで転生する。

外見はスレイヤーズに登場した冥王 フィブリゾのままであり、自身上位魔族で半不老不死の状態。（本来なら歳を取るはずだが多分、さくしゃ神様がなにかした）

魔法結社「時計塔」の現代表であり、時計塔内では全ての魔術師を束ねる『偉大なる大魔術師』の尊称を持つ。

性格は身内に優しく敵対者には残酷、但し取引相手に関しては（恫喝など使用するものの）どんな相手でも（特に取り決めてなければ）命の保証や五体満足は約束する。

一人称は基本『僕』であり感情が高ぶる、もしくは何かのキャラ真似をして似合つてるときのみ『俺』。

また、ネギま！の本契約は実質不可能であり、仮契約すらした相手を着属化し、不老にしようという厄介な特性付。（自身で望めば死ねる為不死ではない）

因みに名前の元ネタは前後ガンダムX。

現在会得してる能力

ソード・ワールド2.0の一部神官技能を除く全て（神官技能はルーフェリア）

変身技能（男性体の人外の化物に1日2回変われ、変わった人物の能力が使用できるというチート。但し、解除も回数を消費するし変身中は変身先の技能以外自身で習得した技能も一時的に失われる）
神鳴流の技全て（10.で20年の歳月を掛け免許皆伝を頂いた）
ネギま！の記憶消去・認識阻害の魔法（4.で取引により入手・雷属性の系統魔法もあるが適正が無く情報のみ）

フィオナ・デール

2.から登場した主人公のパートナー、愛称はフィー。現時点ではヒロインっぽいポジにいるが現段階ではヒロイン未定の人（？）

本体は魔法書「幻想の書」であり、天使のルーレットにより主人公・ガロードの手にわたる事になる。（製作者は神様）

外見はやはり天使のルーレットにより決められた結果、紅の鉄騎鉄槌の騎士ヴィータの姿である（ただし帽子の飾りはのろいうさぎじゃなくアナロ熊）

性格は直線的で思った事は素直に喋る。（ただし、怒ってさえないければある程度の腹芸は出来る）

魔法結社「時計塔」の幹部の1人でソードワールドの全ての魔法は彼女を介して行使され更に複数の神の声まで聞こえる為、時計塔内では『魔術の母』『時計塔の影の支配者』『神の代理人』等の尊称を持つ。

尚、彼女は本であるがゆえにネギま！の仮契約・本契約は一切出来

ない。

因みに名前の元ネタは後ガンダムX、前が実は適当に愛称が付けられる奴で考えられた。

一人称は『私』、最初はボクっ子も検討されていたが、主人公にその座を奪われる（笑）

現在会得してる能力

ソード・ワールド2・0の全ての技能（唯一複数の神官技能が使える）

ソード・ワールド2・0の全てのアイテム（能力行使の補助の為与えられている）

召喚技能（1日に1回ソード・ワールド2・0の任意のモンスター1種を任意の数だけ呼べるチート技能。呼ばれた存在はフィオナとガロード、アルテミスに従う。因みに回収はノーリスク）

ネギま！の記憶消去・認識阻害・雷属性の系統魔法の魔法（4・で取引により入手）

アルテミス

7・から登場した主人公の使い魔（ファミリア？で作られている）で白猫。

主に時計塔の講師や、主人公の留守を預かる便利的存在その1。

一人称は『我』で、性格は少し硬い。但し、自身に大きな疑問がない限り主人公の意見に賛成する。

その外見に似合わず厳しい事、人員不足から勤めてる為猫ではあるが幹部である事、普段の留守を預かる事を踏まえ『時計塔の眠れる

獅子』の尊称を持つ。

本来ならとくに天寿を迎えてるはずだが、主人公の使い魔の為か眷属化し不老となっている。

因みに元ネタは皆様お馴染みセーラームーン。

チャチャゼロ

10．から登場した原作の『チャチャゼロ』に多少外見を似せたリンフオーク。

日本支部のトップにすえる為に作られた。主人公の留守を預かる便利的存在その2。

一人称は『私』で、性格は多分従順。原作チャチャゼロと同じ、独特の口調である漢字とカタカナだけの口調で話す。

しかし、当人は今のところ残酷な性格は姿を見せず、いたって真面目に支部を取りしきる。

時計塔内での認知度は支部から離れない為低く、幹部でもない為現在の所尊称は無い。

11．冒頭で軽く仮契約しているため、ガロードの眷属でもある。但し、アーティファクトは現在不明。

また、どんな戦闘技能があるかも今のところまったく不明。

デイル・リン

9．から登場したこの作品においてのネギま！の話を終わらせる最

後の鍵。

外見は草人だが、その中身はマナの女神。（出典：聖剣伝説 LE
G E N D O F M A N A）

彼が発芽し、魔法世界で根を張り、マナの樹となる事で魔法世界の消滅は阻止され、ネギま！世界の話は終わる。

そのため、彼の死亡は魔法世界の消滅はこの作品では確定事項であり、某薬味の存在が完膚なきに否定される問題キャラでもある。

但し、彼によってもたらされた話により薬味が教職につき、教師をするのは決定事項でもある。

一人称はアルテミスと同じく『我』であり、アルテミスと被るのを嫌がる為かアルテミス登場の回には多分姿を見せないだろう（笑）また、これから先大戦なのでやっぱり危険の為姿を見せないだろう（爆）

多分次の出番は大戦以降？？？イベント後で、最悪原作開始後になるだろう。

性格のほうは少し古い考え方をしようだ。

名前の元ネタは皆様お馴染み F a t e から第四次・第五次の槍兵の名前の取って命名。

ジャン

8．において作者の悪乗りにより脅威のLv7で神になった青年。しかも教義が男色（笑）

一発ネタで終わるのか、はたまた後書きに書いたとおり複線だったのか？既に作者でも分からない存在。

但し、時計塔内部ではそれなりに信者がいる。

ディアス

6・と7・を跨いで出演した少年。彼はあの後時計塔に所属し無事天寿を全うした。最終技能はファイターLv8。

リード・ギンター・エリザ

11・で登場した黒の教団の構成員。（黒の教団の出典は：D・G ray・man）
リードが教皇の指示を貰い、ギンター・エリザがそれに従っていた。

尚、彼らと交戦はしてないのでイノセントは不明。

ボーマン

7・で登場した黒の教団の構成員で脳筋。
しかし、発動こそさせてないがイノセントは原作、神田ユウが所有する六幻^{ムゲン}である。（現在は所有者不明）
また、6・でレコンキスタの短縮の一翼もになってたりもする。彼も天寿を全うした。

現時点の裏の組織とその関係（大戦前）

魔術結社「時計塔」

5．において主人公が設立を決意し、イングランド北部に現段階は本部を持つ魔術組織。

その魔術形態はソード・ワールド2．0であり、また外部への『同士』を採すものには更に、ネギま！の認識阻害・記憶消去を使える事が義務とされる。

神秘の秘匿を掲げ、もし濫りに魔法バレを行うのであれば同士ですら殺害を辞さない厳しい方針を取っている。

その構成員は現在魔女狩り3元奴隷3戦災孤児4の割合であり、やはりいつもどこかで戦争がある為か戦災孤児が多い。

現在は幹部に各種技能のトップと神官勢のトップと主人公達であり合議制で行われている。

また現在の内部の宗教は主人公が長期間集合していたためかルーフエリア信者が若干減り4割、その後にライフオス・ニールダそれぞれ2割にその他の宗教が連なってる状態である。

現在、日本の西の組織と友好関係であり、教会とは不可侵関係である。・・・蛇足だが、最近新たな神が出来てフィオナの悩みの種となっている。

教会

7. において黒の教団の保有が発覚した、現実世界にもある宗教である。

この世界では黒の教団の敵AKUMAが存在しない為、黒の教団は教会に渾名すものなどの粛清等に動いている。

時計塔と不可侵を結んだのは現段階において、内部の膿の方が深刻であり、また教会が分裂するなどの混乱もあり彼らに構ってられないという本音がある。

また、経緯はどうあれ、異端を一つに纏めてくれるのは監視の面でもやりやすく時計塔が世界に、特にヨーロッパに対し大きく動かない限り静観の構えをとる気である。

西の組織（後の関西呪術教会）

9. にて登場した、ネギま！世界に關係する組織。

現段階は関西呪術教会とは名乗っておらず、恐らく関東魔法教会に對抗する形で名乗ると予想される。

時計塔とは9. と10. を通じ、所期の険悪な關係から友好的な關係にまで發展した。

因みに、現段階の組織は原作時の組織よりはるかに強力であり、その力を持って日本を守護している。

また、教会との關係だが、双方接触もしていないし、大陸自体が離れていて更に別なので無關心である。

12・現在の関係だよ！（その一）（後書き）

死に設定のオンパレードまでまとめて公開（笑）いや、年数ジャンプしまくったら、皆の寿命が来る来る・・・、流石に回収は困難なので何個かは捨てちゃいました。

今回纏めた理由は人物紹介の横の大戦前の文字で気がつかれるでしょうが、次回からいよいよ原作に向けて加速します！・・・ここまでの道のりが詰め込みすぎたせいで長かったから次の転生は気をつけないとorz

さて今回は、遂に日本に訪れる魔法使い、彼らとの話し合いはどうなるのか？また、これで西との関係はどう変わるのか？そして近づく大戦の前にガロード達の取る行動とは？次回、『魔法使いだよ！』をお楽しみに！

13・魔法使いだよ！（前書き）

HAHAHA！ストックがガリガリ削れてるけど、感謝の気持ちには変えられないZE！

13・魔法使いだよ！

あの後、思ったより早く発見でき、最終的に彼らが癒したのは村3つだけでした。・・・蔓延するペストに治しても再発の危機が高すぎたんでしょね。

また、記憶消去も完璧で誰も信仰に目覚めてなかったのは驚きです。てつきり勧誘なりして村のペスト拡大阻止+此方に対する対抗手段をとると思ってたので。

どうやら彼ら27人は最初から死ぬ覚悟で当たっていたようです。我々が発見した際もさして抵抗も無く抹殺が終わったので。

後味の悪い結果でしたが、教会との仲も拗れずペストの流行も概ね史実道理大流行したので問題ないでしょう。彼らの事件が終わった後は問題なく本部をロンドンに移しました。

で、今度の年数は通常運行以外やる事も尽きたのでいきなり飛んで西暦1885年・・・麻帆良学園創設5年前、遂にやって来ましたよ、『魔法使い』の方々が。

この間、何もしてなかったのか？と言えば、僕が闇の魔法や氷の魔法などの属性魔法を独学で習得したのと、僕とフィーの時計塔の離脱準備とかがしました。

え？何離脱してるんだ？そりゃ、このままトップのままだと身動きが取れませんし。あ、正式な離脱はこの『魔法使い』達との交渉の後ですが。

時計塔は暫くはトップにまさかの猫アルテミスで、支部がチャチャゼロ据え置きって・・・割とカオスだね！まあ、長生きしているから支えて欲しいとの事。とりあえず魔法世界編まで頑張ってもらうことにした。

また、僕らが居なくなったら時対策で、ソードワールドの魔法を残せないかとフィーに打診して、なんと旧本部に仰々しい神殿建てて可能にしました。代わりに僕らが居なくなったらここが崩壊したら全部

ダメになるけどね。

闇の魔法と氷の魔法は、闇はともかく氷も適正が合ったようでもまエヴァができるよ！始動キーも同じだしね！

それとどうでもいいけど、時計塔で新たな神ができたよ！今度は”百合と腐と掛け算の神”リーネだって、やったね！・・・これについてフィーからの話では。

「いくら最年少20歳でシーン神官極めて、Lv15になったからって勘弁してくれ・・・。ジャンだって私の中に入ってるんだぞ」

そう、神様と話す「神様が中に居るような物だから凄いショックを受けてたよ。でも僕的にはそれが原因で第二の剣の神が抗議してきたってほうが驚きなんだけど。

なんでも本来会話できないはずなのに、”腐”が入ってるから”腐敗の女神”ブラグザバスが泣きながら抗議してきたらしい。

シーンも毎日邪な祈りを捧げられて手に余ってたから神にしたみたいだし、ジャン以上の可能性の持ち主なのは間違いないね！

てか掛け算対象が僕×ジャンだったり、アルテミス×僕だったりして十分被害は受けたんだけどねorzこんな調子じゃ、多分兄妹神か姉弟神も僕らが居るうちに出来るんじゃないかな？

なんか一度に喋ったせいで激しく脱線したけど、今僕らは時計塔代表として魔法使いと話し合いの席についてるよ。

現在席についてるのは、僕・フィー・西の現在の当主様・近衛家当主・魔法使い2名だよ！・・・え？西の当主は分かるがなんで近衛家いるんだって？

それはこっちが聞きたいよ。西の当代が大変可愛がつてるみたいだから仕方ない。てか、現在西と僕らの関係は急激に冷え始めてます。原因はやっぱり西の当代様、どうも僕とうまが合わないようで下の

意見聞かずに取引とか止まったよ。下とは勿論、まだまだ良好です。まあ、土地は僕たちが昔に正式に取ってるから決定権は僕らにあるけど、西の意向は取り入れないといけないし、いろんな意味で麻帆良は必要だからどこかで折れるけどさ。

「本日は私共のために集まっていたき、ありがとうございます。私メガロメセンブリアから派遣されました魔法使いライアットと申します。横の彼は助手のメリアです」

「僕はこの土地を所有する魔術結社時計塔代表ガロードです。横の彼女はパートナーのフィオナです」

「わしは西の当主青山げんのすけ源之助じゃ。横におるのは近衛りゅうのすけ龍之介じゃ」

「私共の願いは、この地に魔法学園を設立したく参上しました。それと、魔術師……ですか。それはどういったもので？」

「貴方達とは異なる魔法の形態をとっているのです、形式的に変えているだけです。で、大変失礼ですが正気ですか？こんな周りが開発が進む上で魔法学園などと、いずれ一般人が入ってきますよ？」

はつきりいつて僕らは上の土地を持っているが魔術・魔法的な物は上に一切ないし、西もその規模は本山に比べ大きく少ないし、既に

単なるこちらとの交流の為の形骸である。

そこにずかずか割り込んで近辺開発が進む土地に魔法学園建設など・
・、分かつてはいたが常識を疑う。実際自分達の本部があるほう
にも来たが、こちらは辺境で僕らも抑えてなかったから話し合いす
ら必要なかつたし。

「ええ、私共は正気です。大変いい難いのですが本国からの要請で
日本の霊脈が集まる場所に巨大な樹を設置しろと言われまして、こ
こ以外の日本にある土地の霊脈は既に使用中か枯れてたので仕方な
く来ました」

なるほど、これなら分かる。多分その樹とは蟠桃ぼとうの事だろう。ただ
確か樹高270mもあったはずなのにどうやって運んでくるのか？
因みに霊脈の原因は最近の日本の急激な変化と西が危ない妖怪封印
等に使ったからだろう。ここは元マナの樹があっただけあって良質
の霊脈であり、僕らはチャチャゼロ作った以外必要ないので使つて
ないしね。

「なるほど・・・、このようなことを仰っていますが西の当主とし
ては如何でしょうか？」

「わしか？わしは別に構わんど。わしの管理する地ではないし、お
主が勝手に判断せい」

信じられない言い草だ。どうやって彼が当主についたか他の西の人

間に子一時間問い詰めたいほどに。フィーなんて肩が震えてるじゃないか。

まあ、西がそういう態度なら僕の好きにできるからいいけど、西の将来が不安だ・・・、これの数代先アレだし。

「その樹の秘匿はどうするのですか？まさか名物にでもするつもりでも？」

「いえいえ、その木の力を借りて巨大な認識阻害の結界と守りの為の結界を張ろうと思っています」

やっぱり、そう来るよな。こないと原作にならないしき。はつきり言って時計塔側からすれば一般人巻き込むとかふざけんな、ボケ！の勢いで追い返したい程度だが、原作の枷がある以上仕方がない。
・ただし、制限はしないとね。

「・・・わかりました。しかし、一般人への被害は見過ごしがたい・・・そこで他の地方の霊脈が回復する・・・、それまでなら許可いたしましょう」

現在の所封印とか色んなことがあって東北の霊脈が著しく弱っているが、120年もすれば回復するはずだ。120年後は2005年ネギま！の全ての事件は終わる頃だし都合がいい。

そこを今すぐ抑えて過疎地にしとけばその後の隔離に使えるしな。いくらなんでも入ってから追い出すでは一般人以上魔法使い未満で

被害がでるだろうし。

「つまり永住は認めない・・・と？」

「我々の支部も地下とはいえここにありますが、そこで承いたただけたら幸いです。ただその場合、こちらの当主様ともお話が必要ですが」

「む・・・？わしらになすりつけるきか？まあ、あそこの回復が終わる頃ならわしも退いてるしよいが、わしらに渾名したらただじやなすまさんかな」

えと・・・、本気で不安になってきた。まさかここまでとか。もしかして・・・この貴方達の場所とかも手放したりしない・・・よね？将来の貴方達の希望を、貴方達の手で守れる唯一の場所になるはずだから手放さないで欲しいのが本音だ。

「その条件で宜しいのでお願いします」

「では具体的な話し合いの方に移りましょう」

どうやらメガ口側としては『日本に建てる』が重要なようで、場所に特にこだわりは無かったらしい。上のほぼ全てと下の一部を霊脈回復の間約120年借り入れてその後東北の地方に移動、反故した

場合の安全保障は無い事。

此方に過干渉した場合も同様に保証が無い事、滞在中はこちらが要請すれば可能な限り生徒など受け入れる事などを認めさせた。

正直、肩透かし食らうほどあっさり交渉がすんだ。良くこんな借りるとはいえ不条理な約束を飲んだものだ。西の下のほうにはこつそり先に内容を教えて納得してもらえないかな。

後、ほっといたら揉めそうな教会にも知らせとかないと。原作と違って日本に興味ないとはいえ、黒の教団とか実戦力持つてるわけだし、用心にこしたことはない。

その後、彼らはゲートをくぐり帰還（この時にこちらもゲートの位置を確認、通行の許可をもらう）再び現れ、5年の歳月をかけて麻帆良学園を建設した。樹の方は”別荘”でのゆそだったよ。

此方も麻帆良学園を利用し定期的に留学生を送った。・・・絶対滞在は1年の制限付きでだが。だってそれ以上は汚染が怖いし。後、無事僕とフイーは代表と幹部を止めてそれぞれ名誉代表と名誉幹部になったよ！

厄介な事に麻帆良の結界で防衛部隊が全滅されました。なんでさ！いや、多分守りのほうなんだろうけどさ、あれって魔法生物に効くんだ・・・。

慌てて対策を考えた結果、剣のかけらを突っ込んだらどんな原理か不明だけど再起動したよ、やったね！ただ、剣のかけらは僕らが居なくなると増産できないし他の物だって有限だから、いずれ防衛は人だけになるどうけどね。

んで、だいたい原作約60年前西暦1940年頃かな？数年に1回のペースでしてるけど、麻帆良学園が事故りやがりました。ええ、魔法かと思ったら入れたての機械で。幸い死傷者0負傷1、そう相坂さよの死亡回避はできたんだけど、同級生である後の妖怪爺が負傷したため西の近衛が不信がって断絶の意味をこめて、こつちにあった支部を時計塔日本支部に投げ捨ててきましたよ。信じられない行為だけど、もう時間ないんで放置して魔法世界に行く事にしまし

た。

「んで、これからどうする気だよ？」

「あれ？フィーには言っ てなかったっけ？」

「私は一言も聞いてないぞ。アルテミスかデイルにでも話して勘違いしてるんじゃないか？」

「ごめんごめん、最近麻帆良関係で胃がいたかったからね」

「わかるわかる、時計塔任せてさあいくぞ！で次々問題出しやがったからなあそこ」

「さよのことを思い出したのは僥倖だけど、数年に一回のペースで小さくない事故は止めて欲しいよ。さよの時は魔法じゃないから対応に大きく動いて西の上に更に嫌われたし」

「それはしゃーねだろ。ありや多分必然だろうし、西の下とは秘密裏に友好だからいいじゃねーか」

トップに嫌われたってめげない！西は改名して関西呪術協会になっ

てるけど恐ろしく弱体化始めてるし、僕は曲がりなりにも神鳴流の免許皆伝もってるから下は無視しないできちんと話し合ってくれるし。

「それもそうだね。目的の件だったけど、暫く暇だし完全なる世界の搜索かな？」

「おいおい・・・、てきとーだな。接触は必然じゃなくていいのかよ」

「つてもない状況で本気で探せって？嫌だよ、最終的には会えるのに砂漠で蟻や砂金探すような行為。それにどうせ末端の可能性が高いし」

実際、ナギ達だってそれなりに頑張ってたし、こっちは『取引』で会いたいただけだから寧ろ、動向さえ知れば嬉しい程度だ。それに『取引材料』確保は今は無茶だしね。

「まあ、そうだがよ。じゃあ何目的なんだよ」

「それは、秘密です」

僕はスレイヤーズでゼロスが良く言う台詞でごまかす事にした。ま

だ言ったら早いし、面白くないしね。

「はぁ・・・、まだ禁則事項です。よりや、ましだがもう少し捻れよ」

「僕の趣味なんだし、ほっというよ」

「はいはい」

13・魔法使いだよ！（後書き）

うん、もうねわからない事だらけでごり押ししたんだ。

麻帆良学園の創設年数やさよの死亡年数は大体あったんだけど、当
時きた魔法使って全然分らないから作った><ついでに西も作
ったけど、物語に都合がいい用になってる件。あんな奴いくらなん
でもトップにしないよね。後近衛の家も今のところ不透明なのであ
いいう形になりました。

色々ご不満もだと思いますが、この作品はこうなんだと受け流し
てもらえると有難いです。

まあ、ネタに色物持つてくるような作者なので（笑）さて、次回は
遂に始まる大戦、活躍する紅き翼、そして暗躍する完全なる世界、
ガロード達の取るべき行動とは？果たして誰が敵で、誰が味方なの
か？？そしてアスナの運命は！？次回を待て！

次回予告のネタが尽きた為、基本これだ！と思った使い回しにな
ると思います。

14・大戦だよ！

完全なる世界が見つからないまま、ついに大分烈戦争が始まって各地が酷い事になってるのを見てるガロードだよ。

ん？見てるだけじゃなくて助ける？てか紅き翼と合流しないのかって？まず助けたら悪目立ちするし、残念だけどこの魔法世界にはマナの樹を除いて表には強く干渉する気はないんだ。

フィーが随分我慢してくれてるけど仕方ない。本来なら僕らここにいないで良いもの。別に原作まで待つてたっていい。・・・神様は『ネギ』の反応でも見て楽しむ気だろうし。

だから、現行動は完全な自分の我侭だ。それに文句一つ無く着いてきてくれるフィーは本当に僕には勿体無い。

「なあ、ガロード。ほんつとくに私は行かなくていいのか？」

「うん、まだ時じゃないしね。フィーが居たらサムライマスターなんて呼ばれて天狗になってる人になれちゃうし」

まったく、あの人がしたいんだろ？あの剣の腕って基本退魔の、いいたくないけど本来僕みたいなので更に質が悪いのを倒すための技を戦争にだなんて。

あれでその後、長就任だろ？下の人間にしてみたらたまらないだろうに。別に組織の貢献ってわけじゃないのに、しかも部下まで巻き込んでさ。

しかも難儀なのは、この身はつい最近まで時計塔の顔だったから見られたら一発アウト、すぐばれる。・・・それが無くても神鳴流の

免許皆伝持つてるし。

ならべない『姿』で、更に僕が『使用しない武器・技』で行けば問題ない。今回求められるのは速さ、それも光のような。

「その代わり、戻ってきてからが忙しいよ。何たって僕ら『逃走者』にジョブチェンジだ」

「はあ、まさか本気で『犯罪者』になる気だとは。私はおめーの常識を疑うよ」

「失礼な、害ばかり撒き散らす正義や、いたいけな少女を監禁して胡坐をかいてるよりはよっぽどマシだと思うけど」

「まあ、それもそうか。んじやがんばれよー」

「そっちなね。きちんと買出しお願いするよ」

「任せとけて。てめー仕込みの悪趣味な奴そろえてやるよ」

「・・・悪趣味は余計だよ」

てなわけで、フィーとはここで暫しのお別れ。因みにお金は0から

ギルに変身して黄金律でここで10年は裕福に暮らせる金ができ
よ！・・・これ本当に問題ありすぎるだろ。

まあ、そんなことをほっという早速変身。体が光に包まれ、光が収
まるとそこには・・・アイルランドの光の御子、第五次聖杯戦争時
槍兵のクラスで戦ったクーフリーンその人である。
ランサー

「ったく、この身体になると戦いに飢えてしかたねーな」

彼もギルガメッシュと同じように神性を持つてるため変身ができる
のだ。ただ、攻め手はその鋭い槍捌きと必殺の看板を掲げる『ゲイ・
ボルグ』だけである。

正直ギルガメッシュより攻め手にはかけるが・・・、大丈夫だ、問
題ない。今回は速さだけあれば何とかなるだろう。・・・なんとっ
て相手は大混乱してるはずだし。

「さて、んじゃ、捕らわれのお姫様を助けるヒーロー・・・。違っ
な、利用されてるお姫様を一時的にとはいえ、更に不幸に突き落と
す道化が妥当か？」

そう、この我侭は不確定要素が多い挙句、最悪は誰も喜ばない、全
員が不幸になる結末だってありえる。

なんたって捕らわれのお姫様を『攫って』、とある組織の『交渉材
料』にして、最終的には被害を抑えるという方法だ。

ここでの不幸は既に捕らわれの姫を『攫って』更に『交渉材料』と
する外道行為にかかわらず、成功率が極めて低いのが問題だ。

まず『ある組織』が認めてくれるか不明、お姫様の心に傷がつかな

いか不明、更に交渉が上手くいっても最後は運、これを博打と言わずなんというか。

ただ、これは『紅き翼』ひいては『英雄の息子』を生み出しつつ、『アリカ姫』を極力不幸にするのを避け、更に『アスナ』を傷つける者から速やかに遠ざけるには他に手がないのだ。

『紅き翼』につくだけではオスティアが滅ぶ、じゃあどうすればいい？簡単だ、『アスナ』を完全なる世界の交渉材料にすればいい。

「んじゃま、いつちよいきますか」

青き姿をした槍兵は地を駆ける、ヘラス帝国のオスティア回復作戦これを利用し、『アスナ』を誘拐する為に……。

「おーおー、派手にやりあってるねえ」

自身が到着した時には既に戦端は開かれ、オスティアは今にも陥落せんとしていたが……落ちない。

『アスナ』が居る限り彼らは多分安泰なのだろう。……余り褒められたものではないが。

「っと、英雄様のお出ましか。こりゃ、いそがねーとな」

不意に、視界に端に巨大な雷が見えた。紅き翼の到着だろう。そうならば、もう見ている必要はない。速やかに『アスナ』を攫っ

て退くだけだ。後は『紅き翼』がなんとかでもするだろう。

「さて、囚われの姫は・・・あそこか」

道中邪魔な人間がいくつか居たが全て昏倒させる。最速を誇る槍兵たるこの身としては物足りないくらいだ。

そして目的の場所に着くと・・・、其処には鎖で繋がれた人形のような儚い姫が居た。

「アナタ・・・ダレ？」

「俺か？俺はお前を攫いに来ただけだぜ。・・・今相手してる帝国関係なくな」

そういつてから、彼女を繋ぐ鎖を一閃で破壊し、素早く担ぐとその場を離脱する。ここで悠長に話してたら『紅き翼』と鉢合わせて面倒だからな。

道中、彼女が抵抗する事は一切無く、また『紅き翼』とも遭遇せず、にこの場を離脱する事ができたのは僥倖だ。・・・槍兵の幸運って妙に低いから不安だったけど。

できれば止まってきちんと話をしたいが、生憎国の重要人物を攫ったのだ。安全圏まで行かなければ意味がない。

そうしていつまで走っただろうか？やっと目的の場所についた。そこはうつそうと茂る森の中、その森の中に嚴重に認識阻害されてるが、堂々と家があるのだ。

勿論、スタッフオブハウスだ。僕は迷うことなく入り、そこで初めて『アスナ』を下ろした。流石に長すぎたのだろうか？彼女は軽く気を失っていた。

「おかえり、ガロード。首尾は上手くいったみたいだな」

「ああ、幸い紅き翼のやろーとも遭遇せずにすんだしな。．．．この身は随分と不満そうだがよ」

「そりやそうだ。いくらなんでも、バトルジャンキーが戦場で人攫いしかしてなきゃ不満も溜まるさ」

まったく酷い言われようだ。こうしてたわいもない会話をしていたらアスナが目を覚ましたようだ。

「ココハ．．．？」

「お、気がついたか。よし、変身っ」と

アスナが目を覚ましたから、僕も攫ったクーフリーンの姿ではなく、本体のフィブリゾの姿に戻る事にする。
いや、あの格好個人的には少し恥ずかしいから．．．。

「エ・・・？イマノハ・・・？」

「初めまして、”黄昏の姫御子” アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシアさん。長すぎるのでアスナさんと勝手に呼ばせてもらいますが、あなたを攫った張本人ガロードいうものです」

「んで、私がそのパートナーのフィオナだ」

「ガロード・・・。ナンデワタシヲサラッタノ・・・？」

アスナがたどたどしく質問してくる。まったく、こんな状態の子に守ってもらってるなんて恥ずかしくないのかねあの連中は。

「少々、交渉事に付き合っていたきたいのが一点、もう一点は単純にアナタを助けたかっただけです」

「ワタシヲ・・・？」

「ええ、あんな非道な状態を見過ごすわけにはいきませんし」

両方事実だから包み隠さず話しておく。助けたい気持ちも勿論あるが、そうしたら完全なる世界が黙ってはいない。それに、原作の軸から離れるから『神様』もなにかしでかす恐れがある。だから交渉が必要なのだ。

「ソウ・・・、ワカッタ・・・ワタシハナニヲスレバイイノ？」

「んー・・・、とりあえずフィーが買ってきた服に着替える事かな？」

「そうだな、そんな服装じゃ問題だらーしな」

「エ・・・？キガエ・・・？」

利用されると思って諦めて聞いてきたのだろうが、生憎完全なる世界とはまだ接触してないし、服がボロボロだから着替えてもらった方がいい。

こうして、アスナはフィーが着せ替え人形のように服を着替えさせ、どこで売ってたんだと子一時間問い詰めたくなるが、原作明日菜が着てた私服の縮小版を着せたようだ。

・・・勿論着替え中は部屋を離れてたんだからね！勘違いしないでよね！！

「ま、こんなもんか」

「うん、素晴らしい見立てだよ。どこで売ってたのか問い詰めたいくらいに」

「私だって、まさかこんなのが売ってるとか予想外だ。でも動きやすいし問題ないだろ」

「まあ、そうだけどさ」

着せ替え人形になっていたであろう、アスナは状況が整理しきれないのか混乱してるようだった。

まあ、たつぷりとは言わないが時間はある。少しずつでも心を開いてくれたら幸いだ。

そんな生活が10ヶ月ほど続いた日、紅き翼はグレートブリッジ奪還作戦も終わらせ、更に反逆の烙印を押された後、とうとう目当てのお客様がやってきたようだ。

僕は、アスナとフィーに隠れてもらい目当ての客……完全なる世界の幹部アーウェルンクスを出迎える事にした。

「やあ、お邪魔しても大丈夫かな？」

「ええ、構いませんよ。完全なる世界のアーウェルンクスさん？」

「・・・驚いた。君とは初対面のはずだし、どうやって僕の名を？」

「それは、秘密です。さ、遠慮なさらずにどうぞお入り下さい」

いきなり秘密にしてる組織名と名前まで言い当てられ面食らったのだろう、部屋に入る足が止まったのでとりあえず部屋に招待する。さて、ここからが問題だ。『交渉』を成功させなければこのような行為をした意味がない。

「さて、君は一体なにがしたいのかな？」黄昏の姫御子”を戦場でまんまと攫っておいて、その後は一切動かないみたいだけど」

「簡単ですよ、僕は貴方達完全なる世界と交渉がしたい為に、彼女を攫いました」

「僕達と・・・？君は一体なにを企んでいるんだい？」

「私は、貴方達完全なる世界と、紅き翼との”完全なる決着”を望みます。そして”完全なる決着”に勝利した方にアスナ嬢を渡したい・・・それだけですよ」

「何を言い出すかと思えば、その交渉に君がどんな利益を得るか僕には理解できないんだけど」

「多分、紅き翼に聞いても理解できないでしょうね、僕と彼らは無関係ですし」

実際、アスナを攫って恨まれはすれど、彼らと僕の接点なんてほぼ無いに等しい。かろうじてサムライマスター程度か？だから余計に不可解なのだろう。この場でまったく関係の無さそうな紅き翼の名は。

「無関係なのは知ってるよ。僕だって大分調べたんだから。あるとしてもサムライマスターただけだけど彼とは不仲みたいだしね」

「其処までご存知なら話は早い。私は私の望むままに動いてるだけです。・・・でご返答の程は？」

「ちなみに・・・もし僕が武力に訴えたらどうするんだい？」

「貴方達が今実行しようと画策してる、黄昏の姫御子を使い「世界を無に帰す儀式」^{ライフメーカー}」「^{ライフメーカー}「広域魔法消失現象」の妨害をするかもしれない。なんなら・・・造物主を倒してもいい」

この台詞にフェイトは固まった。・・・まあ、無理も無い。紅き翼^{ライフメーカー}でさえ造物主の存在は最終決戦で会うまで知らなかったみたいだし。

計画を現時点で、ここまで知られてるのは彼らにとっても困るはずだ。暫くしてようやくフェイトは硬直から回復した。

「・・・君は一体”何”なんだい？」

「そう問われると返答に困りますね。ただ知っていた、それで良いじゃないですか。ここで必要なのは過程ではありません」

「・・・わかった。ライフメーカー造物主に窺わないとわからないけど、君と敵対するより話し合いの方がずっとましのようだ」

「ありがとうございます。詳しくは此方の書面の方でご確認を」

そうして僕は彼にこれからの事を打診する文章を渡した。多分、この様子だと受け入れられると思う。

さて、後はフィーとアスナの2人と一緒に残り僅かな時間を過ごしますか。どうもフィーの方に良く懷いて僕にはまだ余り懷いてくれないようなので。てか、フィー。アスナで着せ替え人形するのは止めなさい、可愛すぎてお持ち帰りしたくなるから！

14・大戦だよ！（後書き）

原作だと造物主ライフメーカー負けてんのに発動とか、おかしいですよ！とおもったのでその幻想をぶち殺すべくアスナを交渉材料に。

うん、物語が破綻してないか大変不安だけど、とりあえずこういう動きをとりました。

さて次回は・・・、遂に始まる紅き翼の決戦！そしてその正体を明らかにするガロード！物語はどのような結末を望むのか？次回の決戦を見逃すな！

15・決戦だよ！（前書き）

Q1 戦わない、派手じゃない、これ本気で決戦か？

A 主人公は今作では中立だから問題ない！（キリ

2 / 14 22:17 次回予告の一部を訂正、以降の文が全部同じなので統一の為。

15・決戦だよ！

遂に迎える最終決戦に今から紅き翼がどんな反応をするか楽しみのがロードだよ。

現在地はオスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』、ここに僕・フィー・アスナの三人は原作だと多分もうアスナが入ってなきゃいけない物体の近くに居るよ！

もし、この決戦で紅き翼が負けたら憐れアスナは犠牲になるね。・・

・いつとくけどそうなったら僕とフィーは助けられないよ？

ライフメーカー
創造主との契約は成され、彼らはそれを遵守しアスナがまだ儀式を行われてないのにこの最終決戦になった。なのに土壇場で僕が裏切ったらよくないでしょ。

因みに今アスナはメイド服に半透明の茨で覆われたローブ、耳には片方だけ黒いドロップ状のピアスをしてるよ。

え？決戦なのに悪趣味だろ？全部マジックアイテムだから仕方ない。メイド服は魔法を効き難くするコンバットメイドスーツ、ローブは危害を加えようとすれば即座に茨を展開し危害を加えようとした人を攻撃する茨のローブ。耳のピアスは1日1回10分間長距離会話できる通話のピアス。・・うん、メイドスーツは趣味だけど、後は実用品だ！特に通話のピアスは毎日こっそり話したいからと、念を押してある。

因みに僕らの他に護衛でクインドウムを2体配置してるよ！

クインドウム。ドウムを更に強化した奴で砲も機銃も倍の2丁づつ備えられてる化物だよ。因みに足も増えて8本あるよ！

あ、揺れ始めたし戦いだしたかな？時間のかけ方は、ほぼ原作道理だと思っし、あとは紅き翼次第か。

「アスナ、どっちに勝って欲しい？」

「出来れば紅き翼がいいけど、フィーやガロードとどの道離れるならどっちでもいい」

「うーん。私も一緒に居てやりたいんだが、ここまでの経緯が誘拐だからなあ。一旦アスナの姉にも返してやらねーとうるさそーだしな」

アスナは思った以上に早く感情が芽生えてくれましたが、今までが今までなので少々そっけないです。

しかし、紅き翼と愉快的仲間達は派手に暴れてるなあ。さつきから宮殿揺れまくりだぞ、おい。

少ししたら更に断続的に派手に揺れたした・・・こりゃ、アーウェルンクスが創造主と戦い始めたか。
ライフメーカー

「なあ、ガロード。紅き翼って勝つと思うか？」

「うーん・・・。原作だと勝ってたし、まあ大丈夫じゃない？」

「原作って何・・・？」

「な、なんでもねーよ！こっちの話だからアスナは気にしないでいいから、な？」

「その情報を知る為には、今のアスナではまだ早いつて事さ」

「・・・なんかずるい」

うーむ、アスナたち皆物語の住人で、しかも大筋でだけこの先までしてますよー、とか暴露したらアスナどう反応するか今の段階じゃ分からないし、もうすぐ（多分来るはずの）紅き翼に預けるのだから仕方ない。せめてあれの後なら話しても良いかな？とか考えてるうちに揺れなくなっただな。

「お、終わったみたいだな、て事は後はどっちが来るかだな」

「魔法世界に・・・いやアスナにとって運命の瞬間かな」

「ん」

そして姿を現したのは・・・。

「姫子ちゃん！ー！！」

まあ、赤髪の男ナギ・スプリングフィールドですね。さて、こいつ話聞いてくれるかな？
随分直線的で話し聞かないそうだからなあ。・・・とりあず話してみるか。

「てめえ、誰だ！！」

「おめでとう、ナギ・スプリングフィールド。見事、完全なる世界の野望を打ち砕いたみたいだね。怪我人がいるなら君を含めて治療するよ」

「んな事どうでもいい！誰だって聞いてるんだよ！！」

「そうだね、ライフメーカーにならってここは贈呈者とでも名乗れば良いかな？勿論本当の名前を知りたければサムライマスターをつれてくればいいよ。彼なら僕のことわかるしね」

プレゼンター
贈呈者、とつさに思いついたが中々いい皮肉だな。まあ、景品がアスナって点が大問題だが。

「詠春がか？わかった、とりあえず姫子ちゃんと一緒にについて来てくれ」

「じゃ、フィー、アスナ行こうか。・・・お前達は僕らの後ろを守ってくれ」

クインドウム2機はもしも創造主が約束を反故し、何らかのトラブルを仕掛けてた場合の保険なので後から来させる。

そして、負傷などしてる紅き翼の残りのメンバーに合流したのだが、ゼクトの姿は既になく、なんかナギが叫んだ。で、一番目を丸くしてるのがサムライマスター・・・詠春だ。

まあそうだろう。なんで敵の本拠地から僕、つい最近代表を辞めたとはいえ、まだ時計塔に確固たる影響力を持ち、更に人外とはいえ神鳴流の免許皆伝者でもある者が出てくるのは驚くよな。

「やあ、詠春。元気にしてた？」

「何故貴方がここにいるんですか！」

「ん？簡単な話だよ。僕の今回の役目が贈呈者だからよ」
プレゼンター

「贈呈者？何をいつ」
プレゼンター

「つまり・・・、こうゆう事。変身つと」

このままだと埒が明かないので変身して説明する事にした。

僕が変身してアスナを攫った主犯の姿になったとたんナギが騒ぎ出した。

「なっ！おめーだましやがったな！！」

「なんのことかな？」

「とぼけるんじゃないー！アスナを誘拐したのはおめーじゃねーか！！」

「落ち着きなさい、ナギ！・・・それで、これはどういう事かきちんと説明してくれるんですね？」

「勿論。掻い摘んで言えばアスナを1秒でも早く連合から切り離したかったのと、創造主^{ライフメーカー}の目的を僕なりに阻止する為かな」

「貴方なりに・・・？」

「僕としてはアスナ助ければもう良かったんだけど、そしたらしくく創造主^{ライフメーカー}がアーウェルンクスとか放つてきそうだからね、先手を打っただけの事。それに多分、創造主^{ライフメーカー}なら自分の死を引き金に儀式を発動させかねなかったしね」

「・・・そこに他意はないのですね？」

「ああ、だから君達に最後は任せたんだよ。僕は今回は裏方、アスナも無事だしいいじゃないか」

うん、我ながら酷い言い草だ。これって言い方を変えればアスナ以外、泥沼の戦争をしようが勝手にどうぞって言ってるようなものだし。・・・まあ、魔法世界の事だし、参加したくないのは事実だけとき。

ここに居るのはアルビレオ・イマ以外脳筋だし、これで誤魔化せるだろう。・・・その問題のアルも僕に対してイノチノシヘンなんてもの使おうとして何故か失敗して気絶してるし。

あれか？生きた年月が長すぎるのか？？まあ、そんなくだらない理由じゃないだろうが、なんでだろう？

「さて、僕は君達を癒したらお暇させてもらうよ。キュア・モータリー！」

「こりゃ、いつたい・・・」

「うお、なんだこれ！傷が一瞬で治ったぞ！」

「っ・・・どこまで化物染みてるんですか貴方は」

あ、そいえばラカンもいたのか、どうでもいいけど。気絶してるア
ルを含めて、魔法の効果人数を拡大して彼らを癒した事だし、ア
スの事を託してさっさとレポートしますか。

因みにフィーとアスナが静かなのは2人で遊んでるからです。あ、
帰るとわかってフィーが手早くクインドゥームをしまったや。

てかなんで紅き翼はクインドゥームに突っ込まなかった不思議だ。

「んじゃ、後は英雄様の仕事だから僕は退散するよ」

「じゃあな、アスナ。元気だな。」

「バイバイ。ガロード、フィー」

「お、おいm」

「・・・いつてしまったみたいだな」

「なんだっ たんだ？ あいつら」

こうして僕らはアスナと軽い別れを済ませて、暫しの別れを済ませ
る。・・・次はあのイベントだな。

15・決戦だよ！（後書き）

うん、キャラがつかめなくて無茶した結果がこれだよ！因みに取引内容はアスナ突っ込まないだけで後は原作道理の件。アルの気絶は神様がわざわざ用意した体だから能力のほうを持たずにパンクですね。

やばい、原作の足音が・・・減ったとはいえ残29人の生徒を擁立してるし、他にもキャラがいっぱい居るし全部は絶対動かせない・・・何人動かせるかが現状一番の悩みです。増えたとその分區別が怪しくなるorz

今回は、逮捕されるアリカ姫！救出に向かう紅き翼！そして・・・増長する『立派な魔法使い』！更にアスナに再び危機が迫る！？次回、もお楽しみに！

大事なお知らせ 2/14ネギま！を読み進め現在、次回以降予約中の文に致命的なミスを見つけたのですが、根の深い間違いなので修正は終わりましたがページ数にしわ寄せがいつて少々差が激しくなった事をお詫びします。また、もう一つ確認し切れてない事があります。が次回に影響する為「仕様」でこり押しする事を重ねてお詫びします。

16・アスナだよ！（前書き）

2 / 1 5 4 : 0 0 P V 3 2 / 6 3 3 アクセス ユニーク 5 ,
0 3 3 人 お気に入り 4 0 件！

このようなマイナーネタとか突っ込んで、更に誤字とか多すぎる作品に対して過大なる評価ありがとうございます！御座います！

16・アスナだよ！

宮殿から帰って2カ月後、魔法世界に留まってただけどアリカ姫が逮捕されたよ！あるえ？

オステイアは崩壊してないけど、クーデターとかで難癖付けられたみたい。流石にアリカ姫までは助ける気はないし、紅き翼が何とかしてくれるからいいか。因みに僕らは賞金首になってません、やったね！

いや、青い兄貴の外見の方はまだ300万ドルの賞金首のまままだけど紅き翼が正体いってないし、もうその姿に変身しないから100→200年もすれば寿命とか思われて消えるかな？

本人が居ないとはいえ、悪い事だけど原作開始前に賞金首になると魔法世界編まで潜伏の未来しか思いつかない件。

とりあえず、形式的な『処刑』のイベントが行われたのを確認してから僕らの世界に帰ってきたよ！

でもまつてたのは堪忍袋の緒がすぐにでも切れそうな教会と、今にも泣きそうな時計塔のSOSだったよ！なんでさ！！

「なあ、あいつら馬鹿なのか？オコジョ刑もふざけてると思ってたが、魔法バレ実は気にしてねーだろ？」

「いや、暴走してるのの一部だけだけど、これは酷すぎる・・・かな」

いや、わかってはいたんだけどね。早速『立派な魔法使い』様がやらかしてくれました。

国連NGOだっけ？に所属して戦争から人助けは立派ですよ？でも、むやみやたらに魔法使うのだけは自重しろとorz

勿論そんなのごく一部だけでだけど、ばれたら記憶消去でいいよね！の精神で動くもんだから漏れた人から広まりかかる自体が何例か発生したんだ。

それに教会が怒って魔法使いの主要な拠点全てに黒の教団派遣しかかったんだけど、とりあえず時計塔の皆がそういった人を抹殺して抑えてくれたんだ。

本当に迷惑だから止めて欲しい、神秘の秘匿薄すぎる『立派な魔法使い』様とか下手な老害（MM）とかよりこの世界限定だけど何倍もやばいから。自分達の首だけじゃなくてこっちも巻き込まれるから。

しかも、実際所属してるのは4割くらいで後自称とかもう何がしたいのか……。魔女狩りの再来とか恐怖でしかないのも、ともかく時計塔には教会と連携して事にあたるようお願いしておいた。そのおかげかそんな迂闊な人間は『減った』けど、魔法世界との仲は一気にマイナスになったよ！……ゲート次通る時は大変かな？

「ガロード。アスナからの連絡はまだか？」

「今日はまだだね。まあ、1日でも遅れたらすぐ駆けつければいいよ。でもアレまで手放されてたら厄介だけど」

うん、次に警戒してるのはアスナの記憶消去なんだ。え？テレポ―トじゃないけないだろ？うん、『普通』は無理だね。

ソード・ワールド2.0のレポートはあくまで、自分が行った事のある場所か1km以内の視界に入る場所限定だから、アスナが記

憶を消されるであろうポイントなんて普通はわからないね。

そこで便利なのがマジックアイテム！アスナに渡した通話のピアス実は特別製で、会話機能以外にレポート先に出来るよう改良してあるんだ。

伊達に600年以上生きてはいないよ、はぐれた時用に何とか1つぐらいと思つて作った力作です！（でも量産できずにこれ1ペアのみ）だからアスナの元には捨てられてない限りすぐたどり着けるよ！・・

・あの眼鏡が余計な事しなければね。

てか、どうやって記憶を封じたんだろ？記憶消去は間違いなく存在するけど、アスナに効くかまず怪しいし、それ以前にあの眼鏡魔法使えないんじゃない？

・・ツボでもついて記憶消したとか？確か北・か南・にそんなのあつた気がするし。え？世界が違う？ですよね！。

「・・・ガロード、今大丈夫？」

「大丈夫だよ、アスナ。今日は遅かつたね？今日は何があつたの？」

「ナギ達がリヨウメンスクナとか言うのを封じてて、遅くなつた」

「ああ、あれか」

そいえば、そんなイベントもあつたな。確かフルボッコにあつて再封印だったかな？でもあれも何で解けたかいまいちよくわんないし、自作自演じゃなきゃいいけど。

「フイーも横に居るの？」

「勿論いるぜ、アスナ。ちゃんと飯くってるか？遊び相手とか出来たか？」

フイーは随分アスナを気にしてるみたいで、毎日聞いているみたいだ。まあ、気持ちはわかる、僕だって気になるし。

「ちゃんと食べてるよ、今日はタカミチと一緒に遊んだし」

「そうか、でもタカミチ以外にも遊び相手とか作るんだぞ」

「わかってるよ」

なるほど、こうやってアスナが懐いてたから解散後はガトウとタカミチについていったのかな？

その後いつも道理10分間話し続けて本日の会話は終了した。・・・

会話時間も改良しとけばよかったかな？
こんな状態が暫く続いて紅き翼の解散もアスナから聞いた。そろそろかな？と、身構えてたらその日が遂にやってきた。

「・・・ガロード、助けて!!」

「っ、テレポート!!」

返事をするのも惜しくてテレポートの拡大でフィーごと現場に飛んだ。テレポート先はアスナがすぐ近くで泣きじゃくってて、その横で眼鏡をかけた男が何かしている。

下に魔法陣、手に怪しげな魔法書、なるほどこれで記憶を封じたのか。てか良く発動できたなそれ、詠唱入らずで記憶いじれるとか一般人も使えるんじゃないか？

「パーフェクト・キャンセレーション!!」

「な、馬鹿な!!」

とりあえず放置は問題外なので即破壊。いきなり僕らが現れた事、そしてたった一言の呪文でどれだけ頑張ったか知らないけど、魔法陣が一瞬にして消滅したことにタカミチは驚愕していた。

「ガロード! フィー!!」

「助けに来たぞ、アスナ! てめー、アスナになにしようとしやがった!!」

「大丈夫？アスナ。フィー、少し抑えて・・・で、貴方はアスナに何をしてくれようとしたんですか？高畑・Ｔ・タカミチさん」

「君達は一切誰なんだ！僕はガトウさんの遺言を果たさなくちゃいけないんだ！！」

「まず君の質問だけど、僕はガロード。ナギ達から聞いてない？宮殿で最後にアスナを渡した２人の話。で、更に追加に質問だけど遺言って？・・・別にこたえる気がないならいいですけど、まさかアスナの幸せを頼まれたから記憶を消すって事でしたら阻止させていただきます。」

とりあえず間に合ったみたいだから話し合おうと思ったんだけど、熱くなってるから会話になるか非常に怪しい。とりあえず質問したけど答えを返してはくれそうもないし、仕方ないので勝手に答えを言い当てる事にする。

「なっ・・・。君達に何の権利があるんだ！！」

「・・・逆に問いますが、貴方に何の権利があるんですか？どう見てもアスナは嫌がってるようでしたか？」

「彼女が幸せになるには必要な事なんだ！！」

「話しになりませんね。フィー、多分ガトウさんって人の死体はもうダメだと思うからポゼッションを使おうと思うんだ。後頼める？」

まあ、初対面の人間がなにいったって効く耳持たないだろうし、仕方ないので僕自身での説得を諦めて「死んだ」ガトウさんに御願いするでしょう。

「ん、わかった。私たちよりずっと適任みてーだからな。これでもし、死んだガトウって奴も同意見ならすくいよーもねーかな」

「ははは・・・、それは僕も考えたくないかな」

「何を言ってるんだ、君達は！ガトウさんはもう死んでるんだ！！」

「そうみたいだね、・・・アスナ、辛いだろうけど今付近で最後に死んでるのはガトウさんでいいんだよね？」

「・・・うん、そうだよ。何する気なの？ガロード」

「簡単な話だよ。死んでるのならその魂に一時的に僕の身体を貸すから、僕の変わりにその人を叱って貰うだけさ。・・・ポゼッ

ション！！」

ポゼッション。躁霊魔法の1つで、その場にいない死者の魂を自らの身体に降ろして他の人と会話をさせる事が出来る魔法だ。

死体があるなら同じく躁霊魔法の蘇生ができるリザレクション（ただこれも万能じゃなくて、ほとんど人離れする”穢れ”ってのがたまつていくけど1回なら対処はできるから問題ない）でもかければいいけど、付近に死体が見当たらないから使えない。なら、その魂だけでも呼んできちんと説教してもらえばいい。

まったく、多少リスク（穢れ）はあるとはいえ蘇生できるリザレクションといい、交霊術みたいなポゼッションといいソードワールドの呪文も大抵チートだよな。（因みに何故死んだ順を聞いたのかは、ポゼッションの効果が死者の持ち物、または付近で一番最近に死亡した人が呼び出されるからだよ！）

僕は何を喋ってるのかは分からないけど、効果時間が終わって辺りを見渡すと放心してるタカミチと、やっぱり涙目になってるアスナと、それを宥めてるフィーの姿が目映った。

どうやらガトウはまともな人だったようだ、これなら多分フィーがうまくやってくれるはずだ。

「フィー、どうだった？」

「アスナの事をよろしく頼みますだってよ。タカミチのやるーはこつびどく叱られてたぞ」

「そうか、多分暫くは動けないだろうから僕らは帰ろうか。フィー、アスナ」

「そうだな」

「・・・うん！」

僕らは放心してるタカミチを尻目にテレポートでその場を離れた。
その後も僕らは賞金首もならず、タカミチも諦めたのかアスナを探
そうとはしなかった。

ただこの事件の後、西との仲はトップ限定だけど更に悪くなって、
これ以上悪くなる事はないって位敵視されちゃったよ！

16・アスナだよ！（後書き）

今回はこのような形を取らせてもらいましたが、いかがでしょうか？犯罪者にならず、更に紅き翼としてでもなくアスナを預かる方法が他に思いつかなかったんだ。

魔法バレの方はネギの対処といい、オコジョ刑といい、魔女狩りとか流行った旧世界への認識が少し、いやかなり甘いのではないかと思っ
てこうしました。なんたってカモ君ことアルベール・カモミール
の下着ドロと同じ扱って……。現代だと魔法バレ〃主要な国の
恐怖（記憶消去や強すぎる力等）〃昔の魔女狩りが可愛く見える混
乱と大虐殺の未来、つても可能性だが十分ありえそうなので、決
して過激な対処だと思っ
てない自分。宗教一つ違うだけで殺し合い
出来るんだし、認識は間違っ
てないはずだ。

さて、次回は暴走する西、暗躍するガロード、果たして何が起こっ
たのか！？次回を待て！

17・西だよ！

アスナの騒動から暫くたったガロードだよ。

色々大変だったけどエヴァが住んでた住所にあった家を買ってそこで暮らしてるよ。

タカミチはその後、一度は納得してたみたいだけど、妖怪爺になんか言われたのか若干警戒してるみたい。

学園結界の中だしこれは仕方ないのか？まあ、ガトウの遺言をそれでも優先してるみたいだからこつちに接触はないけど。

で、ちよつとたったら西の末端の人からSOSが来ました。んで、その日の夜アスナが寝てから早速相談。

「いつかこうなるんじゃないかと思ってたが、あいつ押さえる気ないだろ」

「まさか、説明もせずに木乃香さんを東に送って来たとは正気を疑うね。・・・僕でも長い間は押さえられないし、詠春には長を辞めてもらうしかないかな」

長とはもう関係修復は不可能だけど、下のほうは逆に冷えた分だけ信頼を寄せてくれて、今回穏健派の話によるといきなり木乃香さんを東にやって、しかもそれは長の独断らしい。

おかげで今まで我慢してたんだろう過激派が、深夜に東に侵攻するとか恐ろしい計画を考えてたよ。僕が慌てて何とかするから抑えてくれて頼んだけど。

でも、過激派は『もう我慢の限界だ』『何故お嬢様を東にやったん

だ！』『あれが長をしたのは間違いでは？』なんて意見が出てるらしい。

正直な話、今の西の下が動いても奪還できないし、無駄に力を失って『立派な魔法使い』に西への介入の口実を与えるだけだから大変怖い。

仕方ないから、この際詠春には西の長を止めてもらおうと思うんだ。木乃香さん送って自業自得だから仕方ないよね！

「で、長を引き摺り下ろすとして、西のこれからはどうするんだよ？まさか木乃香を生贄でも捧げるのか？」

「まさか！西は時計塔と同じく幹部の話し合いで動くように変わってもらつて、時計塔との仲を昔に戻した上で、免許皆伝持ちの僕が冬に稽古に行くって話して了承してもらおう予定だよ。んで、木乃香さん・刹那さん・詠春の3人は西への出入りを禁ずるって感じかな？」

「おいおい・・・、詠春はともかく木乃香と刹那まで故郷に帰れなくなるのかよ。やりすぎじゃねーのか？」

「いや、そうしないと西が納得しないと思うし。『近衛』の血を全て追い出す勢いじゃないと過激派がまた暴発しかねないよ。問題は木乃香さんを手放すのを納得してくれるかだけだね。どっちみち戻しても傀儡にする程度だろうし、あの魔力以外居ても居なくても問題ないと思うからね。刹那さんは別にどちらでもよかったんだけど、恐ろしいほど木乃香さんに執着あるから」

可哀想だけど、こればかりは仕方ない。産まれ不幸を呪ってもら
うか、西の下の人達の意見を無視した行動をする詠春を怨んで欲し
いものだ。・・・育ったら刹那さんが切りかかってくるかもしれな
いけど。

「なるほどな……。木乃香もかわいそーに。いくら自分が知らな
いとはいえ、ただ東に來ただけで故郷に帰れなくなるなんてな」

「まあ、東にはおじいちゃんもいるし、お父さんと大好きなせつち
ちゃんも一緒だから寂しくはないはずだよ」

「んで、今書いてる手紙はどこ宛だ？日本語で書いてないから西じ
やねーだらけどさ」

「教会用だよ。僕ら時計塔だけで認めても反発がきつそうだし、『
立派な魔法使い』様の陣営に引き込まれかかってるといえば喜んで
賛成してくれるはずさ」

「あー……。そつか。一応体裁は取り繕つとかないとまずいのか」

「その通り。時計塔と教会、旧世界の2大組織の賛成なら流石の関
東魔法教会も否とはいえないからね」

『立派な魔法使い』様が頑張ってくれてる現在、異教徒の本部であるはずの時計塔と教会の仲がいいという奇妙な状態が起こってるからこそ出来る策だ。

まあ、彼等に見てみたらこの世界に居る異教徒より、良く分からない魔法世界の、たまに魔法バレしそうになる魔法使いの方が脅威らしい。

「これでよし・・・っと。とりあえずレポートで時計塔本部を経由して届けてもらって、土日にも時計塔・教会の結論が出次第、詠春にはご退場願うとするよ」

「了解、その間はアスナは私が見といてやるから安心して詠春のやるーを引き摺り下ろしてこいよな」

「うん、ありがとうフィー」

そして木乃香さんの件で揉めたとはいえ、今の長を降ろせるならばと話し合いは進んで、西の人の話から2週間後僕の学校の休みに併せて詠春の引き摺り下ろしをする為に西に来たよ！

集まった人は西に顔が効くから時計塔代表からの依頼を受け僕・黒の教団の人が1人・西の主だった人達の構成だよ！まさか教会まで来てくれるとは思ってなかったけど、それだけ注目してくれてるみたいだ。

「本日は皆様にお集まり頂いて誠にありがとうございます。自身の組織の長に渾名す事だというのにこれほど賛成をいただけるとは正直驚きです」

「いえいえ、僕は既に時計塔の代表を引いた身ですが、かつて友誼をかわしていた貴方達の現状を見過ごす事なんてできません」

「我等教会としましてもこれ以上魔法世界の侵食を防ぐ意味も兼ね、貴方達に頑張っていたいただければと思い教皇様からのご指示により微力ながら支援させてもらいます」

「本当になんと申したらよいか……。長は本日ガロード殿から話があると言つてこの部屋の奥に居てもらつてます」

「わかりました、それでは向かいましょうか」

僕らは西の人に案内され、詠春の待つ大きな部屋に通された。詠春には僕が来るつて事で待つててもらったんだけど、来たのが僕以外にも沢山いるから目を丸くしているや。

「ガロード殿後の方々は？教会の方や此方の組織の人間もいるようですが・・・？」

「わからない？詠春。彼らは貴方が長であることを認めない人達ですよ。・・・勿論、僕や時計塔・教会の意見も同様です」

「っ、これはなんの真似ですか？」

嫌いなはずなのに、公的な場だからかきちんと返す姿勢は立派だけど、いきなり長辞めろって言ったら凄い怖い顔になったや。でもね、詠春。君は下の意見をきちんと聞いているのかい？

ほら、何か言いたげな西の人達が今の君をどう思ってるか言ってくれるみたいだ。

「長！貴方は自身のご息女の立場をなんら考えてない！更に、私共の意見をまったく聞こうとしないどころか東の言いなりになっている事はわかっているのですぞ！！」

「私共は貴方の道具じゃない！この組織は貴方の道具じゃないのです！！」

「これ以上貴方を長として指示を仰ぐ事は私共にはできません、無論、西の誰もが貴方に従う気などありません！」

「詠春・・・、貴方はもつと下の意見を聞くべきだったんだよ。みてよ、彼等の顔を。彼等の顔が自身の長に向ける顔に見える？」

「私は・・・西の為を思つて・・・」

「木乃香を東に送つた時、誰にも話してないじゃないか。組織の間を信用してない長なんて、長じゃないよ。安心してよ、僕らも鬼じゃない。別に親子を引き離したりはしないよ？貴方と木乃香さん、お友達の刹那さんの3人は西からの追放で済ませるからさ」

「な！」

「西の人達は渋つたけど、最終的には合意してくれたし、此処にも貴方の居場所はないよ。いや『近衛』の居場所がないかな？」

随分過激なやり方だけど、戦国時代から知ってる僕としてはこれ以上はまずいからね。僕の知る西に比べたらその半分程度しか実力者がいないとか、時代の流れをいれても減りすぎだ。

彼が下にそれほど尽力せずに自身につき従う少数だけしか信じないおかげで、神鳴流の使い手だつて大幅に減つたり腕が落ちてる。

過去に対処できたはずのリョウメンスクナを、紅き英雄に頼つて封印とか本来なら西の面子にかかわる事なのにさ。あんな大事な封印、まだ時計塔と仲が良かった戦国の時代に似たような奴が暴れて封印があつた時は、西は「私共にも面子がある」といつてキツパリ断つてきたし。

面子面子ばかり言うのも問題だけど、まったく無いのも組織として危ないからね。

詠春は何か言いたげだったけど、既に積みな状況で諦めたのか素直に書面に同意してから西を去ったよ。

「これで、西は本来の姿に戻る事が出来ます。時計塔・教会の皆様にはなんと申し上げたらよいか・・・」

「気にしないで下さい、僕らもこれであるべき姿の西に戻ってくれるなら嬉しい事ですよ。また、西の方へ必要な物がありましたら時計塔のほうに頼んでおきますね」

「これで魔法世界の侵食が防げるのなら教皇様もお喜びになります。教皇様は強引な魔法世界の行動に随分心を痛めてますので」

「麻帆良に関しても僕と時計塔の支部が監視してるし、もうすぐ地方に移設するはずですから教皇様の心痛が少しでも和らぐ事を願っています」

「ありがとうございます。では、私は報告があるのでこれで」

「ええ、僕も失礼させていただきますね」

「はい、道中お気をつけて」

17・西だよ！（後書き）

さて、ここには本来次回の話が入ってこの話が逆に次回になるはずだったのですが・・・すいません、木乃香の麻帆良来る時期完全に勘違いした結果です。

てつきり中学だと思って調整してたので前後に多大な被害が出てしまいました・・・。（本当ならアスナだよ！の前に入れたほうが良さそうなのですがどっちも似たような時期に転校だったのでアスナ先、木乃香後と判断もできるかと思いここに落ち着きました。少し強引ですが「この世界ではこうなった」と思っていただければ幸いです

この結果、あおりを受けて後ろの方で3人ほど出番を失うか大幅に減るという結果が・・・、今後はこんな大損害が出ないよう頑張りたいと思います。

今回は、襲来する火星人、明かされる真実、そして茶々丸は無事誕生するのか？次回をお楽しみ！

18・超だよ！

年末をゆつくり3人で家から迎えようとしてるガロードだよ。

遂に来年の2001年、薬味の生徒になる子達の入学式があるよ！僕らも、もう少ししたら（学園長を）脅して入学する予定だ。顔合わせは早い方がいいし、それに是非とも会いたい人もいるしね。

まあ、時計塔の取り決めでだして入学するだけだから脅すって程じゃないかな？ただの「お願い」になる予定だけど、学園長僕ら時計塔を敵視してるからね。

理由は1つは相坂さよの事だ。あの後、妖怪爺が負傷している間に相坂さよがなんと親の都合で転校、別の街に移ったから会う機会を失ったんだ。てかここから転校って珍しい。

まあ、もう1つは間違いなく西の体制変えたせいだろうね。

あの後僕を呼びつけて、『なんてことをしてくれたんじゃ！』とか『嬪殿を元の地位に戻すんじゃ！』とか老害まるだしの発言してきて困ったよ。

勿論、『既に時計塔・教会も認めていますし、西も望んでいない。強引に行くなら東は戦争を望まれるのですか？』て脅したら黙ったけどね。

また、アスナは原作の明日菜と違って成長したけど髪はロングだし、正確はどちらかと言えば長門みたいなもの静かなタイプで全然似てないよ！ついでに時計塔でファイターの技能も手にれたよ！

他にも、毎年冬に西に顔出してるけどお出迎えが、千草さんで稽古相手に月詠さんが混じってるのは驚きですが。千草さんはなんでも・・。

「東にえらい圧力かけてるそうやし、邪魔な長取り除いてくれた人くらい一目見ても罰当たりまへん」

との事、暫くは力を蓄えるし、何か有ったらずに仕掛けるとはいってたけど、現状はこっちに配慮して動かないらしい。

思ってたよりは冷静な人で大変助かった。多分、東に協力的な長が抜けたことによつて心に余裕でもできたのかな？

後、月詠さんですがバトルジャンキー万歳としかいいようが無い。他の人の稽古は待つてくれる最低限の自制心は持っているようですが、後は倒れるまで戦い続けてきます。

「こないな素敵な死合。ウチ、やみつきになりますわあ」

それが、なんと夏休み滞在中毎日だから何処まで戦いに飢えてるんだと。なんでも今までに無い戦いで病み付きだそうで・・・、おかげで小太郎君探せなかったよ。

犬耳少年とか貴重すぎる属性を見学できないとか、なんて勿体無い事なんだ。・・・え？自重しろ？すいません、無理です。

翌年の冬は頑張つて（無理矢理）余裕を作り小太郎君にあつたよ！勿論スキップとして拳で語り合つて（グラップラー技能で頑張つた）お友達になることに成功しました！

「なかなかやるなあ、あんた。でも、俺かて次はぜつてーまけへんからな！」

と言つて、次の日から月詠（戦つてるうちに自然に変わった）と小太郎（同上）が同時に襲撃して来ました！なんでさ！！

おかげで今まで本気出さなくて済んでたけど、この2人相手とかつい本気になって戦った場所が何箇所か大幅に陥没して千草さんに怒られました……。

直しはしたけど、あまり派手なのは問題だからね。でもこの2人はお構いなしだし……。ただ、凹んでばかりでない。

小太郎に勝つたら毎回耳をもふもふさせてもらってます！本人大変嫌がるけど、気持ちいいから仕方ない。

しかし冬休みも終わりそうになり、貴重なもふもふ要員と別れ帰路に着きました……。あれ、うちの子にできないかなあ。

そんな事を思い出しながら、3人居間でTVを見ながら新年を待ってたんだけど、突然玄関のチャイムがなったんだ。

「おい、ガロード。おめーこんな時間に客なんて呼んだのか？」

「いや……、チャチャゼロは明日のはずだし、アルテミスとジャンは遠すぎるし、誰だろ？まあ、魔法関係だろうけど」

「私が出ようか？」

「まてまて、魔法関係じゃアスナがでたら逆効果だろうが」

「ここは僕がでるから、2人はここで待っててよ」

「ん。わかった」

「早く帰ってこいよ、もうすぐ除夜の鐘が始まっちゃう」

にしても本当に誰だ？今もう夜の11時だし、時計塔ならまず火急のようなら直接チャチャゼロが室内に来るだろうし、それ以外がこの住所を知ってるのはおかしい。

妖怪爺は不干涉といっても気かなそうだから教えてないし、教会は時計塔をまず通さないと僕に接触なんてしてくるはずがない。その疑問は予期せぬ訪問者を見る事によって氷解する。

「こんな時間にどちら様ですk・・・、貴女でしたか超鈴音さん」

「初めましての筈なんだがネ、時計塔元代表”偉大なる魔術師”ガロード・デールサン」

・・・驚いた。今まで原作知識を使って名前を言い当てフェイトの出鼻をくじいた事はあったが、まさか自分がされるとは。

何に驚いたかと言うと、とりあえず時計塔元代表の件も名前の件でもない、尊称の事だ。

前者2つはエヴァが居ない事、代わりに調べたら本来の世界にない組織がある事、その代表の事などは知る事は可能だろう。

いくら秘匿しても、魔法世界などに名が知れてるので当然だ。ただ、尊称に関しては時計塔内部のみで、更に幹部しか言っていないのでまず分かるはずがないのだ。

「……どこでその名を知ったかは知りませんが、どうぞ中へ。関東魔法協会に教えては無いとは言え、いつ見られるとも限りませんし」

「わかったネ、遠慮なくお邪魔させてもらっヨ」

ともかく、彼女と接触する事自体は予定にあつたからそれが少し繰り上げになったと判断して家に招き入れる事にする。

考えてみれば原作では2年前に来たと言っていたが、茶々丸完成が2001年1月、そして稼働が4月だから既に居てもさしておかしく無さそうである。

ともかく、アスナとフィーが居る居間に招きいれ、話を始めることにする。

「さて、必要ないでしょうか改めて紹介させていただきます。僕がガロード・デイル、気軽にガロードと呼んでくれていいですよ」

「私はフィオナだ。もう一人は紹介しなくても分かるだろ？ 火星人さんよ」

「まったく、なんで全部分かるのか聞いただいたいくらいだネ。この分だと紹介は不要だろうケド、超鈴音ネ、好きなように呼んでくれていいヨ」

「で、超さんは何の用なのですか？」

「貴方達が行う”マナの樹”創造まで私の先祖を監視させて欲しい
三」

今なんと言ったこの火星人？・・・どうやら僕はとんでもない勘違いをしていたようだ。僕は原作の『超鈴音』が存在しないエヴァの事で来ると思ってたけど、此処に来たのはこの世界の未来の『超鈴音』のようだ。

しかし、これはおかしい。本来の彼女の目的は”魔法世界の崩壊”が始まるからその前に蟠桃ばんとうを使い”魔法バレ”させ世界に強制的に受け入れさせようというものだったはずだ。

なら今の彼女の目的はなんだ？確かに薬味・・・ネギ・スプリングフィールドは彼女の祖先だったはずだが、それを監視する意味がわからない。逆に彼女が存在している”ネギの生存だろうし、魔法バレが起きなかった事にならないだろうか？

「君の目的は本当にネギの監視ですか？失礼ですが蟠桃ばんとうを使った魔法バレを画策してるのでは？」

「なんで私がそんな無茶しないといけないネ、そんなことしたら貴方達が教会に即消されてしまうヨ」

彼女の言ってる事は正しい。もし、原作の彼女通りそんなことを画

策すればまず間違いなく教会・時計塔の双方は危険を冒した麻帆良を地図から物理的に消すだろう。・・・多分どっかの軍でも使つて事故に見立てて核でも落としかねない。

僕ら時計塔に勿論軍を動かす力なんてないが、世界の宗教である教会ならそれぐらい造作もないはずだ。だとしたら本当に薬味の監視か？

「おいおい、そんなじゃおめーの得はどこにあるんだよ？あんなの監視するためにわざわざ2101年から来るってただ事じゃねーぞ」

「年数までばれてるとは驚きネ、貴方達本当にこの世界の住人なのか？」

「いい質問ですね、超さん。どうも私の知識とかみ合わない所もありますし、貴方とちようど居るアスナにも全て話しますか」

「私も？」

「お、おいガロード。いいのかよそんな事して」

「ええ、アスナもそろそろ知つても問題ないでしょう。・・・私が知る限りで”起こる筈”だったこの世界の事を」

丁度アスナも居たし、どうもこの火星人と話がかみ合わないのは気になるので、いつその事全てを話す事にする。それにしてもアスナが絡むとフィーも熱くなるな、嬉しい事だけどさ。

ただ、僕が知ってるのはエヴァの事からネギが指名手配をされる所まで・・・だが。結局原作だと、どうやって解決するんだろ？

流石に長い話になり、折角除夜の鐘をTVで見ようとしてたのに無駄になったが仕方ないだろう。

「・・・つまりその世界の私は、「悲劇」を回避する為に魔法バシを狙うト」

「そういう事です。ですので貴方が此処に来て、エヴァの事を聞かず、薬味・・・ネギの事を聞きだした時は驚きました」

「私、あのままだと利用されてたの？」

「まあ、そうなるな。本来のタカミチのやろーが何考えてたのか私にはわからねーがな」

「ここにいる私はそんなことしないヨ、私の目的はネギに無事に生きて欲しいだけネ」

「その言い方だとやはり薬味は・・・」

「貴方達に肅清されるネ。まあ、貴方達にとっては自業自得といわれたらそれまでダガ」

「では超さん、「貴女」は何故ここに居る事ができるんですか？」

この世界の未来の超が来た以上、薬味は殺さなくて済むと思った自分が馬鹿だったか。

だがそうすると、何故彼女「超鈴音」はここに存在できるんだ？あれか？まさか10歳でクラスメイトか他の誰かと一線を越えたのか？いや越えられるのか？・・・それはいくらなんでも想定外過ぎるんだが。

「簡単な事ネ、”英雄の息子”の血を惜しんだメガロが僅かに残ってたネギの血や体液から子孫を作っていたヨ」

おいおい、其処までやるか普通。やるならまだナギのほうが良いだろ。あれか？ネギの方が扱いがよかつたからか？

流石に非人道的とか非常識にも程があるぞ。まあ、餓鬼相手に上級悪魔差し向ける所だしありえるのか？しかし殺そうとしたり、無理矢理子供作ったりとんでもない組織だな。

「それはまた・・・、魔法世界の事は余り干渉しなくなかったので、メガロはやはり居るうちに潰した方がいいですかね？」

「それはクルトに任せておけばいいと思うネ。そのネギの元から作った子を使って、彼がメガロの老害を掃除したみたいだカラ、別に居なくてもいけると思うヨ」

なるほど、なら係わるのはやめておくか。必要以上に係わったら逆に策にかかって教会とかと泥沼になりそうな気がするし。

だとすると、目的は先祖の生存させ自身の存在を明確にしたいのかな？原作ネギの結婚相手は不明だけど、どうせアスナだろーが、この世界はまずないと思うんだけど。・・・この世界だと意外とアーニヤとでもくつつくのか？

「超さん、貴女何がしたいのか分かってるのですか？下手をすればそれが原因で貴女が消える恐れもあるんですよ？」

「心配してくれるのは嬉しいが、私の先祖がそんな曖昧なのは我慢できないネ」

そういえば、こういった頑固なところは薬味譲りだったけ。まあ、彼女が居てストッパーになってくれるなら大歓迎だ。薬味被害さえなければ、僕としては彼に興味はないしね。

「そういう事情なら此方から御願いたいくらいです。無駄な殺生は時計塔の誰もが望んでませんし」

「そういつてもらえると有難いネ」

「そういえばガイノイドの製作の方はどうですか？」

「そちらの方は問題ないネ、貴方達が残した”ルーンフォーク”の技術も流用してるから1月には出来るヨ」

「・・・は？まさかここでルーンフォークの名前が出るとは予想外もいい所だ。確かに日本支部にジェネレーターは残っているが、培養液を作る装置は破壊してあるし、その作り方も破棄してあるんだが。」

「・・・よく使えましたね。装置は多分片付け忘れてでしょうが、肝心の培養液は残ってなかったはずですが」

「真似たのは装置の一部だけヨ、2101年の技術でも全部は解析できなかったネ。記録によると1体のルーンフォークが稼動しているとなってたケド、それはここにはいないの力？」

「チャチャゼロなら、ここ日本支部のトップですからね。一応明日・・・日付が変わっているのもう今日ですが、此方に新年の挨拶も兼ねて顔を出す予定です」

「その場に私が居ても問題ないか？一度実物を見てみたいネ。後、出来たらその余所行きの喋り方も止めてくれると助かるヨ」

「勿論いいよ。もう必要な交渉もないしね」

「ったく、いくら先祖が曖昧だからってそれだけの理由で未来から来るなんて酔狂すぎるだろ」

「ほっというてほしいヨ、未来人にだって色々事情があるネ」

まあ、個人の事情に首を突っ込むような無粋な真似はしない。てか多分、聞いても禁則事項だろうし。・・・超だとうっかり喋ってくれそうで、別の意味で怖いが。

結局この後チャチャゼロが来るまで滞在し、入念に調べてから帰っていったよ。アスナは流石に寝ちゃってたけど。

ついでにその際に茶々丸（名前は今回の話し合いで決定した）の開発協力もすることになったよ！これで多少脱線してるけど原作茶々丸が生まれるかな？

そして、あつという間に3月、春休みを見計らって、関東魔法教会の長、妖怪爺こと『近衛 近右衛門』にアポを取って会いにいつて今日の前に居るよ。本当は向こうは顔も見たくないだろうが、こっちが用があるから仕方ない。

「わしになんの用かの、元時計塔の代表よ。わしはこれでもいそがしいのじゃが」

「では手短に、僕・フィー・アスナの3人は今年の麻帆良の学校に入学したい旨のお知らせを。・・・こちらが時計塔からの要請書です」

「む、アスナまでとは・・・。おぬし一体何を企んでおるのじゃ」

本当はアスナは入れたくないんだけど、僕らが目を離すには余りにもネームバリューが強すぎるし、それに自分達がない間に紅き翼とかが動かないとも限らない。

それなら、僕らと一緒に学校に行つた方がずっと安全だ。・・・ただ、周りのクラスメイト以外の環境と目の毒が2・Aの最後の方から来るのが問題だけど。

「さあ？ただ要請を見ていただければ分かりますが、可能な限り僕らは三人同じクラスにするようにとさせてもらってますので、心苦しいですが僕も女子中学生に混ざる事になりますね」

「ふお！おぬしはなにをいっておるのじゃ！！そんなの認めれるわ
k」

まあ、アスナの警護ならフィーだけでも良さそうだけど、薬味に注意しながらだとやっぱり僕もいたいからね。教師は無理だから生徒として・・・だけど。

「できますよね？2003年を目処に若干10歳の”英雄の息子”を教職免許もなしに学校の教師に・・・更にクラスの担任を狙ってるくらいです。これくらい簡単ですよ？ああ、クラスはもちろん1-Aを御願いますね」

「くっ・・・良からう、おぬし等の要請を飲もう。ただし、ネギ君には一切手出しはしないでもらおうかの！」

「勿論ですよ。何好き好んで”英雄の息子”なんてのに係わらなきゃいけないんですか。ただ、貴方達は神秘の秘匿に関して関心が薄いようなので其処だけはご注意を」

「当然じゃ！用が済んだのならさっさと出て行ってくれんかの、仕事の邪魔じゃ！」

「ええ、ではお仕事頑張ってくださいね。それと、移転先の方も受け入れ準備が着実に整ってるそうなので、暇がきたら人のほうを派遣してご確認もお願いしますよ」

僕は言いたい事も言ったし、妖怪爺の許可も取ったので、さっさとこの部屋を後にする事にする。眼鏡はどうやら出張みたいでここにはいなかった。

・・・あれ教師のはずだけど、1月に何回出張してるんだろ？勤務

日数も怪しいだろ絶対。『立派な魔法使い』様は足元がおろそかだから困る。生徒の将来をなんだと思ってるんだろ？

18・超だよ！（後書き）

これで吸血鬼事件・親書・学祭騒動の3つのイベントが消える可能性が？どれも大きいイベントだから後が怖い件。後半絶対別物になるだろうなあ・・・、既に手遅れか。

核ネタは文庫の方で事故に仕立てて落とした作品を見かけたので其処から採用しました。宗教からの御願いじゃなかったけど、お願いされたら狂信者の1人や2人喜んで行動に移しそうだし。

さて次回は、千雨に接触するガロード、彼女はどんな選択をするのか？次回もお楽しみに！

19・千雨だよ！

2001年4月無事入学したガロードだよ。

クラスは勿論1-Aで、僕・フィー・アスナの3人は同じクラスです。超と協力したから茶々丸もいるよ！（茶々丸開発の協力には時ハカセさんには会えなかったけど

ついでにネジの都合で茶々丸は家に住む事になりました、やったね！因みに席は僕の行動によって居なくなった2人の変わりかと思ってたんだけど、茶々丸とハカセさんがそれぞれ明日菜・さよの席になつて前から順にフィー・アスナ・僕の順になったよ！ついでにタカミチが目を丸くしてたから、妖怪爺は伝えてすらなかったのかな？また、このちゃんラブの狂犬せつちゃんこと桜咲刹那さんの殺氣がやばい件。

魔眼とか持つてんじゃないかと疑うほど睨んで来るんですが。した事考えれば当然なんだろうけどさ。

逆に、美空さんは厄介ごとに巻き込まれないように目もあわせてくれません。まあこれは当然か、原作でも極力厄介ことは避けてたし。龍宮真名さんは関係者の中で唯一、好悪の感情がないので普通に接してくれますね。

とりあえず、今上げた人が薬味に係わっても僕らは感知しませんね。全員関係者だし、身内の事まではちよつかいだしません。

グレーなのは古菲さん・長瀬楓さん・ザジさん・明石裕奈さん・長谷川千雨さんの5人で前者2人はバトルジャンキーならいつか自分から首を突っ込んできそうだし、なんだかんだで半分一般人やめちやってるから、ザジさん魔法関係者かは怪しいけど人じゃ無さそうなのでとりあえず、裕奈さんは一応お父さんが魔法先生だから、千雨さんは認識阻害効かないからなあ。

これまでも何回かそんな人が居たけど、それらは全て発見次第麻帆良に報告して、きちんと対策させてたんだけど、今回は時計塔に連

絡をした上で引き込む事にしました。

理由は薬味の従者候補だろうから対応しないだろうし、したとしても妖怪爺に任せとくと不安だからです。

しかし、千雨さんのいい接触が思いつかないから無難に、彼女がHPでしてる名前で呼び止めることにしたよ！

本当はもう少し考えたかったんだけど、フィーが『あいつぜってー心の中で”グイータ”呼ばわりしてるから早くしてくれよな！』といわれたから仕方ない。

「すみません、少しお時間いいですか？」

「すみません、急いでのので・・・」

「いえ、お手間は取らせませんよ・・・”ちうタン”」

「な、おま・・・ディールさんは何をおっしゃっているのですか？」

「隠しても無駄だよ？放課後、屋上で話があるから・・・この麻帆良の真実を教えてあげます」

「っ、何をいつて・・・居ない？」

ここで騒がれて、魔法生徒や魔法先生に干渉されても困るので用件

だけ伝えて退散したけど着てくれるかな？ちなみに学校内では常時この喋り方をしてます。いつもの口調だとシヨタコンの人の餌食になるから・・・。

まあ、意味深な台詞と”ちうタン”でダメなら打つ手を考える必要があるかな？なんて考えてたけど、放課後千雨さんはきちんと屋上に来てくれました。

「お待ちしてました、千雨さん。いや”ちうタン”の方がいいですか？」

「ざけんな！私をその名で呼ぶんじゃないー！！」

「うわっ、フィーを”ヴィータ”って呼んだときと同じような噴火だ・・・。まあ、ともかく来てくれたのですから麻帆良の真実をお話するとしましょう」

「麻帆良の真実だって？はっ、実は魔法使いの学校ですとでも言いたいのか？」

「当てられると身も蓋もないんですが・・・、その通りですここは魔法使いの学校でもあります。因みに証拠はこれで勘弁を」

「証拠って、ただの筈だろーg・・・なんで、飛んでるんだよ」

「これはそういう魔法の道具ですからね。・・・1日1時間しか飛べないと言う欠点がありますが」

東にはれないよう、僕はソードワールドの魔法のほうきを使って証明する事にした。数ある珍品のうちでも一番オーソドックスに理解されると思ったし。

「これはどんな手品だ？私を騙そうたってそうはいかないぞ」

「いや、騙す気はないんですが……。千雨さんは麻帆良をどう思いますか？」異常”だと思いませんか？」

「そ、それは……」

「僕らのクラスはどうですか？ほかと比べて明らかにバランスが悪いでしょ。それに担任が良く出張する、おまけに生徒に明らかに口ポットが居る……。これを疑問に思わない生徒は”普通”いませんよね」

「じゃあ、それも全部魔法使いの仕業って言いたいのかよ！」

「正確にはある”人”の為に意図的に作られたクラスですね。2 -

A になって3学期くらいにいくと思いますが10歳の子供先生の為です」

まあ、ロボットは超や僕の仕業だけどクラス分けに係わってるわけじゃないし、同じだよな？

「・・・は？子供が教師になれるわけねーだろ」

「他ではまず無理ですね、労働基準法違反とか引っかかりますし。でも・・・」麻帆良ならしかたない”。この言葉ですんでしまうんですよ。ここは」

その理不尽さは、自身が一番良く分かっているはずだ。こういう事態をなくす為にも、早期にこの麻帆良には消えてもらいたいのだが、残念ながら当分はお預けだし。

「・・・んで、なんで私に話すんだ！私は『普通』でいたいんだ！お前等の勝手な都合に私を巻き込むな！」

「僕もそうしたいのは山々ですが、千雨さん貴女はこの麻帆良では”異常”なんです。なぜならこの麻帆良は異常を”普通”と認識させる結果が張ってあるのですから」

「なんだって？そりゃ、どういうことだ」

「認識阻害結界と言んですが、それによって一般の方がこの麻帆良の異常を”麻帆良だからしかたない”と思わせてるので、今の千雨さんは麻帆良からすれば”異常”なんです。・・・貴女自身は普通だと言っのに」

「じゃあ、私をどうする気だよ？」

「一応何個か選択肢がありますね、1つ目は麻帆良に保護してもらう。まあ、歴代の方々はそうしてもらって転校なりしてもらったのですが、今回は学園長がアレなので望み薄ですね」

「あのじじいがトップなのかよ・・・」

「ええ、残念ながら」

あの妖怪爺じゃなかったら、普通に麻帆良に伝えて、多分記憶消去なり話し合いなりした上で、転校とかそういった処置で済んだのだろうが、今は受け入れ先にしてた西との仲も酷いから無理だろう。

「2つ目はここで話した事を覚えて自衛してもらう事。ただ、これはお勧めしません。下手に”知っている”というのは”知らない”

より危険ですし」

「もし、これを選択したらどうなるんだ？」

「監視がついて、更にネットとかでばらそうとしたら即日、刺客が来て貴女は冷たくなりますよ」

「じよ、冗談じゃねーぞ！」

千雨さんは、ちうのホームページとかしてるし、かなりパソコンが使える。つまり発信力が高いと言う事だ。そんな人物を監視なしで放置は出来ないので当然つく。で、間違っただけで口走ったりでもしたら、憐れその日のうちに冷たくなるといいうわけだ。

「3つ目は今までの異常全てを忘れる事。ついでに認識阻害を個人で強いのをつけるとかですかね？ただ人格にまで影響を出す恐れがあります」

「それって私を止める・・・自己否定しろって事かよ」

「それが一番正しい認識ですね。ただ、子供先生が着たらどうなるかの保証も無いですが」

「最悪じゃねーか、それ」

記憶消去は万能ではない。もし彼女が”異常”だと思った事全て忘れ、認識障害が効くほど強めたらとりあえず脅威は去るが、確実に人格やその他に影響が出る。てかアスナ絶対”明日菜”になった時影響あつただろ。

「4つ目最後の選択肢ですが、1つ目の選択肢に近くなりますが、麻帆良ではなく僕が所属していた組織の庇護を受けるですね」

「おまえの？て事はなんだ、魔法使いの組織つてのは、そう何個もあるって事か？」

「はつきり言ってしまうばありますね。日本だけでも支部込みで3つ、世界になると更に複数・・・宗教も似た様な物を持ってますね。後、もう一つ世界があつてそちらにならば全部の組織がそうですね」

「・・・頭が痛くなってきたぞ、私は。と言う事は何か？私はどこかに所属しない限り、記憶や人格を弄られたり命の危険があるって事か？」

「はい、そうなりますね」

いやまあ、僕ら時計塔や教会が無ければ命の危険は旧世界に限れば落ちるんだけど、既に存在している以上、仮定の話は意味が無い。それに原作だと何だかんだで魔法世界にいつてたし、彼女は必ず『選択』を迫られるのだ。

「で、おまえはなんで私に4つも選択肢を持ちかけてきたんだ？強引にでも1を選択すればいいじゃないか」

「簡単に言ってしまえば僕の我侭ですね。現在のこのトップである学園長と僕の組織の関係は大変悪い、しかもこのクラスが子供先生の為にあるみたいなんですし、極力こちらの方で保護したいのですよ」

「なるほどな。で、おまえとしては私を仲間に引き込みたいと」

「望んでない人を引き込むのは不本意ですが、状況がそれを許してくれませんか」

こんな状況でなければ、彼女にもう少しまともな選択肢を提示できたのだが、僕が今提示できる選択肢はこれで最大なのだ。

「勿論、仲間になったからといって神秘の秘匿以外何かを強制させ

るつもりはありません。情報を共有して危険があつた時は貴女を守る事だっています。できれば僕らの組織を選んでくれたら嬉しいのですが」

「わーったよ。ったく、なんでこんな事になつたんだ。私は普通に居たいだけなのに」

「麻帆良という地がなければ貴女は普通に暮らせてたんですが、仮定の話は無意味ですね」

「はあ、んじゃよろしく頼むぜ。私はあんまり係わりたくねーからな」

「わかってますよ。あ、これ魔法のアイテムで通話のピアスついています。嫌でしょうが、携帯電話以外の連絡手段も欲しいので持っていてください。後の説明はフィーがしてくれます。・・・女性同士の方が話しやすいでしょうし、千雨さんならそっちのほうがいいでしょうし」

「な、なんでそっちのほうがいいとか言うんだよ、私はそっちの趣味はねーからな！」

「いや、フィー・・・フィオナは”ヴィータ”に似てるしさ」

「おまえ、口調が変わってるぞ。まあ、似てるが……まさか本人とか言わないよな？」

「口調はこつちが素だからね。千雨さんだけ素で僕だけ余所行きじや、話し合いも終わったのに失礼だしさ。あ、フィーは勿論”ヴィータ”じゃないけど外見はそっくりな事気にしてるから、きちんと名前で呼んであげてね」

「わかったよ。んじゃ、私は帰るからな」

「んじゃ、僕も帰らないとね。また明日、千雨さん……いや”ちうタン”！」

「じゃーな……って、だからその名で呼ぶんじゃねー!!」

「んじゃ、”チーちゃん”ね!!」

「なんだその渾名は!!!!」

「可愛いからいいでしょ?」

「やめろ、今すぐやめろ。このフィブリゾもどきが！」

あ、やっぱり僕の外見もわかつちゃうんだ。て事は忙しくて確認し
てなかったけどスレイ・ーズとリリな●の存在は確かか。

「あ、チーちゃんひどーい。いくら僕の外見が本人そっくりでもど
き呼ばわりは傷つくって」

「だからチーちゃんはやめろって！気持ち悪いだろ！！」

「クラスメイトの前とかじゃ言わないからいいでしょ？」

「当たり前だ！！」

ちよつとしたスキンシップを楽しみながら、僕はみんなの待つ家に
帰ったんだけど、帰宅が遅いってアスナに怒られた・・・。

まあ、後日ファイがチーちゃん（諦めてくれたようだ）に説明して
たけど、時計塔の方針とか聞いて怒られてしまった。まあ、選択肢
しだいで命を狙うのに僕の組織も入ってるから仕方ない。

19・千雨だよ！（後書き）

ちうたんは皆良く使う（？）し、新しくチーちゃんって呼び方してみただけで即出だったらごめんね。ただ、作者の明らかな力量不足によりチーちゃんこと千雨と、フィーことフィオナの区別がつかなくなる恐れがあるのが一番の悩みだ。・・・悪乗りが過ぎるだろ？自覚はしてるけど止められないのです！原作の千雨さんなら、絶対認めてくれないと思うけどね、そこら辺は「仕様」で通させてもらいます！

そして見直すとネギ従者候補以外に多い件。グレーの人も最初NGにしようかと思ったけど、バトルジャンキーとかふとしたきっかけで、自分からくるんじゃないかと思い、更に今後も考えてグレーゾーン設定。千雨さん抜いても10人（超・茶々丸・刹那・木乃香・美空・龍宮・古菲・楓・ザジ・裕奈）、やったね従者候補に困らないよ！でも、本屋さんに手を出したらNGだから超と茶々丸の苦労はこれからだ！

さて、次回は束の間の平穏、巡る季節、仲間達はそれぞれどう過ごすのか？そして、物語の始まりを告げる薬味先生の就任は？次回をお楽しみに！

20・日常だよ！（1）

日常を楽しんでるガロードだよ。

相変わらず刹那さんは殺意MAXだけど、あんなに殺気立っていると月詠とか見たらどんな反応するんだろ？

ただ、その殺気の影響か、古菲さんと楓さんが何度か挑んでくるのだけは勘弁してほしい。適当にあしらったらこの2人はあっさり諦めてくれるから嬉しいけどさ。

月日が流れて少しずつ慣れてきたのか、皆どんな騒がしくなってきた。例えば・・・。

「なによ、このショタコン！」

「なんですって、このブラコン！！」

はい、アスナとあやかさんの喧嘩ですね。アスナは性格まったく変わってしまったし、更にあやかさんとの幼少期の接点が不足してるはずですが、やはりどこか相性がいいのでしょうか、見事に言い争いをしてます。・・・喧嘩中はアスナの性格も明日菜に似るし。

ただアスナはタカミチを追ってる訳でも好きなわけでもないのに、僕と接点が多いという事からブラコン扱いされてます。

どんな形にしろ仲がいい事は微笑ましいので、フィーと仲良く見ています。ただ、取っ組み合いが過激になる前にフィーがきちんとめですが。

こんな感じですが、クラスは一部を除き大変平和です。また、1年で初めての麻帆良祭ではなんと時計塔本部から草人のデイルが来て、

莫大な人にまぎれて祭りに参加するなんてのもありました。

「こんな大きな祭り事、我がまじったとしても何、ばれることはないさ」

正直、生きた心地がしませんでしたし、思いつきり探すのに夢中で楽しめなかったのですが、きぐるみか特殊メイク程度にしか見られませんでした。・・・流石とはいえ、恐るべし麻帆良の認識阻害結界と祭りの熱気。

で、こんな調子で学校が進み最初のテストが始まったんだけど・・・。

「ガロード、この問題分かるか？」

「この問題は答えはこうだよ、チーちゃん。あ、フィーはアスナの問題見てあげて、何個か引っ掛けがあったからね」

「ん、わかった。アスナ今どこやってるんだ」

「問4だよ、フィー」

「あー、そこは引っ掛けだからその公式はそうじゃなくてこうだな」

「そうなんだ」

「皆さん、飲み物の準備ができたので休憩しませんか？」

「そうだな、喉渇いちまったよ」

「ありがとう、茶々丸」

「賛成、私も喉が渴いたから」

「皆だらしねーな。まあ、私も乾いてはいるし休憩もいいか」

絶賛テスト勉強の最中ですね。因みに僕やフィーは伊達に長生きしていないのでこの程度なら簡単ですが、アスナやチーちゃんは引っ掛けとかに弱いのでこうしてテスト勉強しています。

茶々丸もしてあげようかと思ったのですが、やろうと思えば超（この間呼び方を変えた）が詰め込むらしいので断られました。

因みに結果は僕・フィーは同点1位（満点）でアスナ・チーちゃんが6位と12位と破格の成績を叩き出しました。（茶々丸は目立たないようになのか471位でしたが

やはりアスナは『明日菜』にならなければものすごく賢いようで、フィーも教えやすかったらしいです。（チーちゃんはかなりのスパルタだったのは内緒だ

ただ、この程度ではクラス最下位は脱出できませんが。
次は夏休み、ちよつと野暮用があつて時計塔の本部、ロンドンまで
行つて来たよ！まあ、自分の信仰する宗教の様子とか見たかつたか
ら仕方ない。

ただ、麻帆良に歸つた後は一気に勉強会でした。・・・なんで僕以
外の皆も勉強してなかつたのかと子一時間問い詰める作業も込みで
したが。

で、来る10月、原作には無い麻帆良体育祭がありました！まだ騒
ぎ足りないのかこの学校はと思うくらい盛況で・・・。

「1、2のペースでいくからな、ちゃんとタイミングを合わせろよ
千雨！」

「そんなに急がないで・・・って、早い早い早いです！」

フィーとチーちゃん（猫かぶりモード）の二人三脚や

「がんばれー、アスナー！」

「はっ・・・はっ・・・、茶々丸、後お願い」

「わかりました、見ててくださいね」

「茶々丸。そこだ、抜けるよ！」

アスナと茶々丸のリレーや

「ガロード、負けるんじゃないぞ！」

「ガロード、がんばって」

「ガロードさん、がんばってください」

「がんばってくださいね、ガロードさん」

「皆、いつてくるよ」

僕の200m走や、他にも綱引き（以外にもあっさり負けた）や騎馬戦（古菲さんとアキラさんと楓さんが無双してた）や借り物競争（これが一番やばかった）等一見ベタなのだが、中身がここでは言えないほど濃かったとだけいっておこう。

しかし、一番意外なのは猫かぶり状態だけどチーちゃんが僕を応援してくれる事かな？あまり注目されずに平穩を望んでたはずなんだけど、何度も接してるうちに勉強とかで会う以外にも積極性が増したと思うし。・・・コスプレの方はそれでも大変頑張ってるみたいで、更新楽しみだけどさ。

結局僕らのクラスは4位に終わりました。最下位じゃないしまぁいい事なのかな？

そして迎える冬、テストを終えた僕は西に行きました！月詠と小太郎とのスキンシップは取れたけど・・・皆と長い休みを過ごす暇がないなあ。

2年になりまたテストを受け、麻帆良祭で今度は僕とフィーがコスプレショーに参加したり・・・。

「おまえ等はいいよな、私服がコスプレみたいなもんだしさ」

「ばっ、私をヴィータって思っただろ今！」

「いや、その格好で言われても何の説得力ないし。帽子まできちんと本家にしてる今じゃ、間違いなく”ヴィータ”のコスプレだぞおまえ」

「フィー、流石に帽子まで用意されたんだから諦めも肝心だよ」

「私は良く似合ってると思うよ、フィー」

「ガロード、お前はいいのか？フィブリゾもどきとか思われてるんだぞ！？」

「コスプレだと思えば全然。それにそっくりなのは事実だしさ」

てか僕の場合はそのものになるのか？此処らへん曖昧だからなあ。
あの天使、「容姿」とはいつてたけど「身体」の事まで言つてたから、実は本人の体を死んだ後に密かに取つてたとか？

まあ、参加した僕らは盛況に終わりました。因みに茶々丸がないのは、超がお店の手伝いをして欲しかったそうです。

あそこ儲かつてるし、この3日間ていくら稼いでるか考えるだけで恐ろしい。

まあ、2年の麻帆良祭もこれまた無事終了。来年カシオペアを超に借りてもつと見て回るとかもいいかな？・・・薬味の出方次第なのが不安だけど。

そして再びのテストを経て夏休みは皆で海に行きました！

「ガロード、西瓜割りしようぜ、西瓜割り！」

「おいおい、張り切りすぎて西瓜碎くなよ。あれビーチで碎けると食えたもんじゃないからな」

「大丈夫だよチーちゃん、割る用と食べる用は別にしといたから。アスナと茶々丸は？」

「あの2人ならもう海だぞ。ったく、ロボが海水とか如何なってるだよ・・・」

「超とハカセさんが随分頑張ってくれたみたいだからね。2人も誘ったんだけど研究が忙しいとかで出て来れなかったし」

「はあ、私もHP更新とかあるのに。部屋に籠りたかったぜ」

「こらー！何話しこんでるんだよ、早く西瓜割りしよぜー！」

「はいはい、チーちゃんは2人を呼んできてくれる？折角だし皆でしないと」

「かわったよ」

ちなみに西瓜割りの結果は、フィーが張り切りすぎて初っ端から西瓜に的中、粉々にするという結果に終わったよ。

周りの空気が凍って後が凄く大変だった……。まあ、最後は全員楽しめたし問題ないよね？

夏休み後の麻帆良体育祭も、競技が何個も入れ替えられてて楽しかったよ！てか3年間で既存の競技全部やる勢いつて無茶苦茶な量こなさせられてるけどさ。

そして、騒がしくも平穏な日々が別れを告げるときが近づいてきました……。そう原作の2-Aの3学期の足跡が近づいてきたのです。

最後の平穏である冬休みは、月詠と小太郎とのじゃれあいの回数をなんとか説得して減らしてもらい、西の方々との話し合いでつぶれ

ました。

”英雄の息子”は流石に、心構えが出来てないと千草さんが暴走し
かねないしね。

皮肉にも詠春の長を下ろす話し合い以上に紛糾したけど、どうにか
抑える事に成功したよ。・・・これをフェイトとかに引っ掻き回さ
れたら、間違いなく東と衝突しそうだけどさ。

万全の状態とはいいがたいけど、全ての体制を整えたとしても最後
は時の運なんだし、出来るだけの事はしたと信じて僕はその時を待
つことにした。

そして・・・、2003年 2月7日この日、ネギ・スプリングフ
ィールドが麻帆良学園へと着任する。

20・日常だよ！（1）（後書き）

体育祭とネギ着任を捏造してみたけど、反応が怖いなあ。（ネギの着任は2月上旬で正確な日数がわからなかった。体育祭は存在そのものが捏造、魔法世界編が夏休みだし、学校戻ってないから適当に実際やってそうな時期に当てはめてみました

日常パートを年単位にしたから随分手抜きになってるけど、多分1日の尺度に直すと作者のボロが露呈していくと思うんだ。（なのでこれからが大変

それでも気にせず次回、これまでの流れで変わった事や、修正のありがどこにあったかの説明と着任するネギ、苦悩する超、献身する茶々丸、彼女は歴史を修正できるのか？そしてネギは『立派な魔法使い』としての道を歩む事が出来るのか？の2本をお楽しみに！

大切なお知らせ 私事ながら周りがゴタゴタするので、現在書き上げてる22日付けをもちまして無期限停止とさせていただきます。見ていただいてる方も増えて、作品もこれからだというのにこのような事になって申し訳ない。

出来る限り早い復帰を心がけますが、復帰予定は現在完全な未定とさせていただきます。

21・現在の関係だよ！（その二）

現在の主要登場人物（原作前）

ガロード・デール

今作主人公。13・で自身が設立した魔術結社を脱退、名誉代表になる。だが、現時点では代表、日本支部ともに自身の使い魔と仮契約者がトップな為、影響力に陰りはまったく無い。

現在は2・Aに生徒をしており唯一の男子生徒となっている。（色々事情がある事になっている

所在地はエヴァが住んでいた場所とまったく同じ場所に住んでいる。（現在共に住んでいるのはフィー・アスナ・茶々丸

毎年冬に関西呪術協会に顔をだし、神鳴流の稽古をするなど彼等の自力上げなどにも協力している。（その際千草・月詠・小太郎等ともあっている

また、変身時外見の1つ「クーパーリン」は14・の結果300万ドルの賞金首になった。

フィオナ・デール

主人公・ガロードのパートナー。ガロードと同じく13・で魔術結

社を脱退、名誉幹部になる。

2・Aにガロードと同じく生徒で、当たり障りのない程度の付き合いをしている。

多分、現時点でも一番ヒロインっぽい位置に居る子。

デイル・リン

修正のあおりをモロに食らった人その1。予定ならもう日本に来て支部に住み着く頃だが、何故か学園祭に1回来た程度。

多分重要すぎるから本部奥深くで守られてると思う人。次の出番は未定。

アルテミス

13・で基本は話し合いで動くとはいえ、まさかの時計塔トップに就任した高性能猫。猫は本来気まぐれのはずなのだが、日々時計塔の為にがんばっている。

多分合流できるのは終盤。

原作キャラで変更があった（もしくは変更がありそうだった）人

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

←

アスナ・デイル

14・でガロードが攫い、15・で一度紅き翼と合流。16・でガロードについていった。

現在は時計塔仮所属の扱いであり、ガロードが面倒を見る形をとっている。

ガロード達と同じく2・Aの生徒もしている。

因みに3人は血は繋がってないが兄妹関係という設定で、兄、ガロード 姉フィオナ 妹アスナ の順ではあるが背はアスナが一番高い。

「明日菜」とは異なる道を進んでも係わらず、あやかとは良く喧嘩する。

彼女はヒロインになるのか不明。

近衛詠春

17・でなんと長の座を下ろされた人。一気に修学旅行イベントに

暗雲が起こってしまった。

また降ろされた際に、娘の木乃香と刹那まで西から永久追放を食らう。

今後の出番は不明。

桜咲刹那

修正のあたりをモロに食らった人その2。修正前は小説半分を使った専用パートすら用意されてたが一気に出番が削られた。詠春と同じく西から永久追放された人

ただ、今後の出番はちよくちよくあるかもしれない。このちゃんラブだからヒロインにはなり得ない。（てか関係的に無理

龍宮真名（修正前のみ変更有、現時点では変更点無）

修正のあたりをモロに食らった人その3。修正前はなんとガロードを刹那以上に怨んでいた（笑）

が、せっちゃんパートが消えると同時に絡ませるのが大変そうなのでその設定もおじゃん。

因みに怨んでた理由は前のパートナーの死亡原因をガロードが作った時計塔にしたため。

多分、刹那とは違い出番が一気に減るかもしれない。彼女もヒロイン候補にはならない。

近衛木乃香

17. の影響で西から永久追放された。ただせつちゃんとは離れ離れになってはいないので原作より接点は多い。また、呼び方も原作とは違い2人の間は「せつちゃん」「このちゃん」のままである。ついでに魔法についても知っている。(父が教えた

ただ、ガロード達の事は自身が元から東にいたし、父や大好きなせつちゃんと一緒にいるから2人ほど怨むという感情は無い。薬味の現時点の従者候補？

超鈴音

18. でガロードに接触、原作とは異なりこの作品の未来から来た火星人(でも来た年数是一緒

目的は近い未来、時計塔によって肅清されるであろうご先祖様ネギの監視・魔法バレの阻止であり、製作した茶々丸と共にネギのサポートに回る予定。

出番次第でヒロインになれそう？

絡繰茶々丸

19・完成20・から登場。基本は原作茶々丸のままだが、製法に一部チャチャゼロのルーンフォークの技術が使われている。ネギのサポートに回されるはずだから次話から出番が減ってしまう可能性大である。
薬味の従者候補？

長谷川千雨

19・でガロードが接触、原作前に魔法の存在を知る。しかし、チーちゃんなる渾名を付けられる。
戦闘能力はまったくなく、時計塔の非戦闘要員の位置に収まる。多分ヒロイン候補・・・かなあ？

天ヶ崎 千草

17・で詠春が失脚したため18・で登場。原作ほど過激ではなく幾分か落ち着いている。
でも麻帆良が2005年に東北に移動したらどうなるかは不明。現在には主にガロードが西に来た際の窓口になっている。

月詠・小太郎

18・で登場。ガロードが稽古に来る為か詠春が失脚した為かは不明だが月詠も西に所属している。

両方冬の稽古中に滞在中毎日ガチバトルを展開してくる。なお小太郎はヒロイン(?)要員兼もふもふ要員(オイ

チャチャゼロ

13・で日本支部トップ継続が決定。今更だが身長70cmの脅威の小ささを誇るルンフォ。多分最小の存在だろう。(普通ルンフォは人間サイズ、多分普通の最小でも小学くらいだと思われる

この原因は作者が原作のチャチャゼロのサイズを確認せずに決定した為である(あ

本を買ったことによりこの身長が明らかにやばい事に気がついたが、手遅れなので修正を見送った。

これから多分出番がもらえるだろうが、いつアーティファクトが使われるか不明。(そのため性能も不明

現時点で亡くなってる人(確認含)

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

3 . で吸血鬼化しなかった為、寿命で死亡。

相坂 さよ

1 3 . で自身が幽霊となる事故に巻き込まれなかった為生存し、その後寿命で死亡。

現時点の裏の組織とその関係（原作前）

魔術結社「時計塔」

代表と幹部一人が抜けたが、穴埋めに代表の使い魔を新代表に置いた組織。長生きしてなきや酔狂の領域だと作者は思う。（オイ

現在も活動が続いているが新しい構成員は、ほぼ戦災孤児になっている。また戦場での魔法使いとの遭遇も何度か起こった。対処は主に2つで1・相手が神秘の秘匿を尊重してるなら自身は後退2・濫りに使用してるならその場で抹殺。である。当然1の機会の方が多いのだが、たまに2・のケースも発生している。そのため魔法世界との中はきわめて悪い。

教会

今日もどこかで頑張ってる組織。多分AKUMAの代わりに何か出てきてるのだろう。ついでに時計塔以上に魔法使いに過敏な組織。魔法使いが色々頑張りすぎるせいで時計塔との仲が昔よりよくなってる。ただ、やはり異端の相手なので完全に相容れることは無いだろう。

でも、西の長の失脚に協力するなど、それなりに足並みはとってる模様。

関西呪術協会

17・で長が失脚、体制が大きく変わった組織。なお現在の組織は前回紹介時より大幅に弱体しており、半分程度の力しかない。原因は、時代の流れもあるが、東が着てから長に恵まれなかった事が大きいようだ。現在はガロードが冬に神鳴流の稽古等をして自力の回復に努めている。

関東魔法協会

詠春の失脚などにより時計塔・教会・関西呪術教会の3者との仲が悪化。現在は孤立しているがその分原作より詠春を抱えるなど戦力的には向上している。

2005年に約束により、立ち退かねばならないがその兆候は現在見られない。

21・現在の関係だよ！（その二）（後書き）

日の目を見なくなったボツ設定がまた出ちゃった。今度は自爆だけにつらい物だ。

でもって、一番問題なのは実はせつちゃん。理由はあれだ、エヴァ減って更に刹那に嫌われるってモチベが（笑）でも小太郎君確保したから問題ないか（マテ

月詠は可愛いけど、難しい性格だから・・・小太郎君は耳だけでその座をつかめるけど、他は希少属性が少ないし（あ

さて、次は23時更新をお楽しみに！

22・新任教師だよ！

今日、新任の教師が来るらしいから早めに教室に居るガロード達だよ。

え？薬味の様子は見なくていいのか？いや、確か原作初日来るまでなら「明日菜」に疑われる程度だし、肝心のその人が居ないんじゃないじゃ流石に問題ないと思うからね。

ちなみに、茶々丸は一緒にはいません。昨日、超が回収していきました。・・・まあ、何がしたいか分かってるし、茶々丸ご愁傷様としかいえないけど、上手くいくのかな？

教室を見てみると、新任教師用に罌を仕掛けてる人がいるけど、あれがクラスにとって（ほぼ誰も気がつかないけど）最初の違和感になるかと思うと今から頭が痛い・・・。

そして、暫くすると木乃香さんと茶々丸がやってきました。あ、刹那さんが一緒に着たのに驚いて木乃香さんに話しかけてる。

昨日まで警戒対象だった人と一緒にきたら仕方ない。・・・てか、超はどうやって学園長に売り込んだんだろ？未来人の謎はまだ多いみたいだ。

そして、望んでもないけど遂に新任教師の最初の一步が・・・こけた？どうやら茶々丸が黒板消しを浮かせる前に消しゴムが何かで狙撃した模様。障壁壊すほどの消しゴムって大丈夫なのか？

まあ、問題はあるが黒板消し回避した後、全トラップにもれなくご招待。チーちゃんとフィーが頭抱え始めちゃった。で、やつぱり、子供が来たって事で皆が群がって、しずな先生が鎮めたみたいだ。そしてやっとの事、自己紹介。

「今日からこの学校でまほ・・・英語を教える事になりましたネギ・スプリングフィールドです」

知ってるとはいえ、早速魔法と言いかけるなと言いたい。とりあえず持ち歩くのに非常識な杖が現在見えないだけでもマシだが。まあ、刹那が刀持ち歩いてるくらいだし、麻帆良限定ならもってるだけなら、少し変な趣味程度が疑われもしないんだろうけどさ。

「3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

つと説明終わりか、耳栓しないと。一瞬の間をおいてから凄まじい声量がクラスを駆け抜けた。あ、アスナとチーちゃんに渡しそびれたから耳が若干痛かったようだ。

そして好奇心旺盛なクラスメイト達がまた群がり質問タイム。てかしずな先生、もう少し強めて止めてあげないと他のクラスの迷惑ですって。

この後、原作なら取っ組み合いだけど、どうやらショタコンのあやかさんがネギ先生に突っ込んでいった。暫くしたらしずな先生が止めてくれてお開き。早速葉味先生の授業が始まった。

背が届いてなくてしずな先生に助けてもらったりしてたけど、別に消しゴムで妨害とかないから思ったよりはまともに終わったかな？で、あつという間に放課後だ。僕らはそれとなく本屋さんを探して、一杯の本を持っている所を発見、3人で手伝って運んであげたよ！てかなんで夕映さんが居ないか聞いた所、凄い小さな声でだけどタカミチになんか頼まれたらしい。まったく、元とはいえ自分の教え子を危険に晒すなんて、とんでもない事をする眼鏡だ。とりあえず本屋さんの手伝いをして別れてから、チーちゃんと合流したよ！

「まさか本当に10歳のガキに教師させるとか、何考えてんだあのじい」

「まあ、タカミチと大差ないだろうし気にしないでいーんじゃねーか？」

「たまに半月は出張してるタカミチと、そんなに差はないとおもう」

「ま、魔法バレしなきゃとりあえず大目にみるよ。超や茶々丸が可哀想だしね」

授業を今まで受けてて思ったが眼鏡は酷い、本当に酷い。別に教える方は悪くない、むしろ良い方だと思うのだが、出張の回数がおかしい。

NGOに6教師に4くらいの振りって何考えてんだよ！そりゃ、祭り好きでバカルテット（バカレンジャーⅡ5人が維持できなかった為）とか居るけど、基本彼女達だつてきちんとすればそれなりに覚えてくれるはずなのに、明らかに助長させてると思えない。

だから教師としての出来はぶっちゃげタイプが違うだけで迷惑に変わらないし、今まで介入しなくて薬味になったとたん教師にネチネチ言うのもアレだから基本みてるだけになるかな。

それに僕教師じゃないしね、いつでも無駄だと思っし。え？じゃあ、なんで生徒枠でごり押ししたんだ？そりゃ、「立派な魔法使い」か、その候補の尻拭いを贈呈されるの確定なのにしたいか、って言われても・・・僕には無理です。そりゃ、介入しやすいけど、夏や冬の休みが潰れる。冬とかこっちも西に用事があるのに。教師は長期休

みだからって仕事がないわけじゃないしね。

「んで、次はなんだ？私はもう帰りたいんだが・・・」

「次は確か子供先生の歓迎会だったか？私もパスしたいところだな」

「私も子供先生は嫌だけど、歓迎会って殆ど全員参加のはずだから
いったほうがいいよ」

「そうだね、歓迎会で魔法を使うイベントも潰れてるはずだけど、
確認も兼ねていこうか」

「だりーな、私はすぐ帰るからな。今日のHPだってまだ更新して
ないからな」

「”ちうのホームページ”か、おめーも趣味とはいえ大変だよな」

「私も今度着てみていい？」

「アスナもチーちゃんの格好に興味があるの？」

「ん、ガロードが良く見てるから私も着てみたくなっただけ」

「おいおい、私のサイトを見てるのは知ってるが、そんなに回数多いのか？」

「大体1日2〜3回は見てる。他のHPとか、見たこと無いMMOのついでみたいだけど」

「・・・おい、ガロード。「また」MMO増やしたりしてねーだろうな？」

「な、ナンノコトカナ・・・」

「はあ、修羅場するなら、私は先にいつてるからな」

「私も一緒にいく」

「ぼ、僕も一緒n・・・」

「そこに正座しろガロード！おめーは電気代の事まったくかんがえてねーし、何よりアスナの教育に悪いだろーが！！！！」

「う、ごめんなさい！」

むむむ、ふとした会話でフィーにMMOをしてる事がばれてしまった。転生前の人生の癖で見かけたらついっついやっちゃうんだよね・・。

アスナが呼びに戻ってきてくれなかったら、延々と説教されてた可能性が高いから助かった。

で、歓迎会のほうに行ってみると既に始まっていて結構な騒ぎだ。完全に遅れちゃったねこれ。

気にしないだろうし薬味の様子を見ると・・・、タカミチとなんか話してる。あ、こつちを薬味が見て若干にらんでる？

何吹き込んだあの眼鏡？あれか、アスナの事か？多分違うな、「時計塔」関係者だともいったのかな？

今じゃ「立派な魔法使い」や目指す人の天敵だからな。余計な警戒心をされたかな。

面倒だから無視して辺りを見渡すと、もうチーちゃん帰ってるし。僕らも帰ろうかな。

22・新任教師だよ！（後書き）

遂に登場、皆大好き（？）ネギ先生！この作品ではネギ先生の奇怪な教師活動を阻止できないのは申し訳ないのですが、まずさらりと流してた日常でタカミチに突っ込んでない主人公に残念ながら介入する権利はないです。

もちろん、それは「教師」限定の事なので「魔法バレ」に対しては動いていきますよ？後、こっちにも害が着そうなのは動きますが。

そして原作を見た方ならすぐ気がつくでしょうが、「明日菜」代打にエヴァが不在なので「茶々丸」を起用しました。茶々丸なら明日菜と違って最初のイベントの大半は潰せるだろうし。（最初のイベントは薬味が明日菜になにかするか、明日菜の失言（？）から行動を起こすかって感じですし

さて今回は、接触をする薬味、彼は考えとは一体？また、ウルスラのお姉様の魔の手が迫る！次回もお楽しみに！

23・ドッジ？だよ！

通学途中に薬味に絡まれたガロードだよ。

歓迎会の翌日、本来なら惚れ薬騒動がある日だけど、事前にフラグが折れてるはずだから油断してたらいきなり薬味が目の前に出てきた。いや、あんた教師としての仕事は！

「すみません、少しいいですか？」

「どうしたのですか、先生。こんな朝早くに、教師の方は既に学校で準備してと思うのですが・・・」

「なんのようなんだよ、先生。私達通学途中なんだし、歩きながらでいいよな」

「おはよう、先生。話って？」

普段薬味薬味言ってるが、別に本人を煽りたいわけじゃないので一応「先生」と呼んでおく。・・・そうしないと教室でもうつかり「薬味」呼ばわりしてクラスメイトとの仲が悪くなるしね。

「ガロードさんたちは「狂気の塔」の関係者なんですよね？なんであんな酷い事してるんですか！」

「まてまて。なんだ、その「狂気の塔」って？私達いつからそんな物騒な所に所属してる扱いなんだ？」

「フイー、多分「魔法使い」の方の呼び方なんだよきつと。「時計塔」は基本「教会」「関西呪術教会」以外仲が悪いしね」

「ネーミングセンスがガロード並に悪いと思う」

「アスナ、それは余計だよ」

「ふざけてないで答えてください！どうして「立派な魔法使い」の人を邪魔して、更に・・・殺してるんですか！！」

僕らは早めに通学してるし今現在一般人は見えないとはいえ、そんな大声で喋る話じゃ決してないんだが・・・。それに、「立派な魔法使い」の邪魔と言うが実際そこまでいつてるのは最近ではごく僅かだ。

流石に「魔法バレ」で命を捨てたがる奴はそんなに居ないらしい。それに大抵は遭遇しても問題ないから帰ってるからね。

「先生、それは通学中に話す事なんですか？一般人の方に聞かれたらどうするつもりなんですか？まさかこんないい加減な事で記憶を

消すとか言わないでくださいよ」

「いい加減な事って・・・人の命をなんだと思ってるんですか！」

「おいおい、ガロード。こいつにそんな説明じゃ逆効果だって。いか、先生。先生は今、此处で何してるんだ？「教育実習生」としてここにいるんだよね？」

「そ、そうですね、それが何の関係があるって言うんですか！」

「つまりだ、関東魔法協会が「教育実習生」無事終わりましたってしてくれないと先生は「修行失敗」ってわけだな。だが、先生の行動で関東魔法協会が「無くなった」らどうする気だ？」

「え・・・？」

「先生が私達を問い詰めてどうこう言うのは勝手だが、それでもし手出しでもしたら、先生がいう「狂気の塔」とやらがどう反応するんだろうな？いっとくけど、関東魔法協会より古くからここにはその「狂気の塔」の支部があるからな」

フィーはどうやら、僕らに手出ししたら関東魔法協会を潰すぞって脅しをかけて干渉を避ける気のような。まあ、アスナ・チーちゃん

は所属してるからあながち間違いでもないけど、流石に即刻潰すとかはありえないから。脅しには効果的だからいわないけど。

突然のフィーの脅しに薬味が次に言う言葉に困ってるみたいだし、面倒だから畳み掛けますか。

「それに先生はタカミチ先生になんていわれたか僕は知りませんが、ど、関わるなとも言われませんでしたか？」

「そ、それは・・・」

「タカミチ先生は「立派な魔法使い」なんですよね？ならそれを目指す先生がその言葉を無視するなら、先生は「立派な魔法使い」にならなくてもいいって事だと思えますが？」

「そんなことない！ボクは「立派な魔法使い」になる為にここに修行に来たんだから！」

「ならタカミチ先生の言う事を守って、僕らには関わらないでくださいね、先生？」

「んじゃ、そういう事だから教師さばんなよ先生」

「先生は急いだ方がいいよ？」

「あ、待ってください!」

「嫌ですよ、先生は僕らに遅刻しろって言ってますか?」

いくらなんでも通学中に話しこむわけには行かない。僕らは皆勤賞を一応狙ってるんだから。

なので、言いたい事も言ったし話を切り上げさつさと学校に向かう事にする。

もちろん学校に着いたら、速攻で学園長室を訪れ釘を刺すのを忘れないでおく。

「貴方達が魔法バレしない範囲ならどう修行しようと勝手ですが、そちらから干渉してくる場合問題が起きる事を”英雄の息子”には十分注意してくださいよ?今朝早速接触があつたので」

「なんじゃと!ネギ君が……。わかった、後で注意しておくから出ていってくれんかの?」

「当然出ていきますよ、生徒が学園長にそう何度も用があるなんてありえませんし」

これでとりあえず、不満はあるだろうけど接触は控えてくれるだろ

う。ただ、それでも先生がこつちを良く見るのは迷惑だが。

翌日、薬味が補修を変わりにするようになる日だが、特に問題も無く過ぎていった。「明日菜」と薬味って、一緒にいると化学反応起こすように問題行動してるけど、単品だと現時点では其処まで酷くはならないようだ。

そして薬味が着てから5日目、ドッジの日だがとりあえず皆が遊んでる場所を3人近くで眺めていた。一緒に遊んでもいいのだが、そうしてたらいつの間にか忍の人とか、中国っぽい人とか混ざって全力で来るし。

暫くたつとウルスラの人達が見えてきた、そろそろかな？

「どうしたんですか？ウルスラ女子高等部の皆さん？」

「どうしたですって？・・・あら、なんで男子がこんな所にいるんですの？生徒みたいですが此処は女子部ですよ、男子は速やかに出ていってくれないんですか？」

「すみませんね、僕は事情がありまして一応彼女達と同じクラスメイトなので、その要求には答えられないんですよ。で、質問の答えをいただいてないのですか？」

「簡単な話ですよ、ここは私たちが使いたいから彼女たちにどいてもらうだけですわ」

「って、ウルスラの人は言ってるけど了承したの？まき絵さん」

「私たちは納得してないよ、ガロード君」

状況が状況だし、まき絵さんは若干固めに答えてくれた。僕が、普段親しい人とししかあんまり喋らないせいもあるんだろうけどさ。下手に喋りこんで仲良くなりすぎると、薬味じゃないけど「魔法バレ」が怖いし。クラスの人達って明るくて良いんだけど、仲良くなりすぎると一部の人を除いて遠慮がなくなるから……。

「と、まき絵さんはいつてますが？」

「そんなこと関係ありませんわ、私たちが使いたいのですから中部のお子ちゃまは私たちに譲るべきなのよ！」

薬味じゃないけど頭痛くなってきた……。もしかして麻帆良って教育にかなり悪いんじゃないのだろうか？いや、体育会系なら基本でこんな感じなのかな？

「随分強引ですね、……。フィー、ウルスラの高等部から誰でもいいから先生呼んできて」

「ん、わかったぜガロード」

「お待ちなさい！何故そこで先生が出てくるのですか！」

「だって、先輩達高等部の人でしょ？引いてくれそうもないし、強引に力技でこられたら中等部の僕らじゃ、怪我しちゃうよ。だからここは先生を呼んで叱ってもらうのが一番効率的だしね」

中等部から呼んだほうが早いんだけど、呼んでも来るの薬味だし・
・ねえ？学年とクラスも知ってるといえば知ってるけど、僕が知ってたからおかしいし、僕から聞いたって「お子ちゃま」に答えてくれるとは思えない。

「で、どうするの？このまま話し合いを続行するなら先生に来てもらうけど？」

「くっ、覚えておきなさい！」

三下の台詞いつて去っていく高等部のお姉様方・・・、マリ●てとまでは言わないけど、もう少しマシな台詞はなかったのかと問い詰めたい。

「あ、ありがとうガロード君」

「気にしなくていいよ、それよりこの事はネギ先生には内緒にできるかな？先生に言っちゃうと高等部の先生にも伝わって逆恨みでまたきそうだし」

実際には言わなくても来るんだが、とりあえず薬味の介入を減らしたいからね。

「ネギ君に？わかったけど・・・」

「ごめんね。僕はもう行くからゆっくり楽しんでよ。じゃ、行こう
フィー、アスナ」

「そうだな」

「ん、わかった」

さて、次は体育の授業の時に折らなきゃいけないんですが・・・はい、僕参加できないので僕自身は無理です。

だって僕、クラス唯一の「男子」だよ？流石にいろいろ問題だし、この授業だけは保健室待機させてもらってます。

まあ、フィーとアスナが居るし何も問題ないと思うんだけど、薬味が来る前に話しを決めないと、ドッジ↓脱げのコンボとかしそうだし。

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

s i d e フイオナ

ガロードが体育だから保健室にいつちまったし、手早く着替えてアスナと2人で屋上にいったんだがウルスラの奴らがまた居やがる。めんどくせー。

「おい、おめーらここで何やってんだ？」

「あら、また会ったわねあんた達、偶然ね」

「・・・だれだっけ？」

「さっきあつたでしょ！ウルスラ女子高等部2・Dよ！！」

「で、そのウルスラ女子高等部2・D様がこの中等部の屋上に何の用があるんだ？」

「私たち自習だからレクリエーションでバレーやるのよあんた達は？」

「私たちは「授業」でバレーをするんだ。「自習」ならお引取り願いたいんだが？あれか、おまえらは教師に本当にいわれなきや分らない奴なのか？」

「私たちが先に使ってるのよ！」

「「授業」と「自習」は別物だよお姉さん達。フィー、もうすぐ先生達も着ちやうし私が行こうか？」

「ん？アスナが行くのか？・・・あんまり目を離したくないんだが、こいつらほっときたくないしな」

「わ、わかったわよ、どけばいいんでしょ！いきましょ、皆さん」

まったく、教師にばれる覚悟も無く着てたのかよ。2 - Aの奴らは
お喋りしながら着替えるから、多分鉢合わせとかは起きないはずだ。
ガロード奴が羨ましいぜ、体育の時間私はいつもの2人が相手した
がるからな。

23・ドッジ？だよ！（後書き）

うん、初めてまき絵だしてみたけど、口数すくないし特徴掴んでないから誰だコイツ状態になってしまったorz

んで、作者は女子中学に男子生徒がばれた状態で1人ぼつんと居る状態なんてわからないから（ばれてない奴なら本で見たことあるけど）とりあえず、保健室にいればいいんじゃないかな？と思って処理しました。

またウルスラの人と薬味って、会わせると生徒の身分だと厄介そうなのでとりあえず全部折る方向で持っていきました。

次回は、ついに薬味の最終課題、図書館島のイベントは発生するのか？また、薬味は無事に課題をクリアできるのか？次回もお楽しみに！

24・テストだよ！

あつという間に期末試験が始まりそうだよ！

あれから薬味は刹那さんみたいににらんでは来るけど、接触とかはしてこなくなつたよ。やつたね！

とりあえず薬味の先生としての質はともかくとして、毎日来るだけあつて生徒の目からしたら「教師」してるように見えるけど、職員会議とかにはでてるのかな？

そんなどうでもいい事を考えながら、ホームルームHRが始まつたけど、随分意気込んでるな。

「今日のHRは大・勉強会にしたいと思います！」

今日が言われた日なのか、日数に関しては曖昧だったから細かくは分からないんだよね。

で、ことはそろそろあの提案がでるのか・・・？

「はい、提案提案！」

「はい！桜子さん」

「では・・・お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

「なつ、ちよつ！？皆さん！？」

「お、おい。何考えてんだよ！！」

「無茶言わないでくださいね、桜子さん。僕とか居るし、教室で『野球拳』とか新田先生が聞いたら倒れてしまいかねませんし」

まったく、僕が居るから自重してくれるかと思ったけど、やっぱり提案して来たよこの子！！

しかも薬味ったら僕が指摘したのに考えてるし、まさか許可ださない・・・よね？

「どこが問題なんですか、ガロードさん！せっかく桜子さんが提案してくれたんだし、やってみないとわからないじゃないですか！」

「・・・先生、『野球拳』を理解してますか？『野球拳』は宴会などで暫し用いられて、ジャンケンに負けた・・・今回は英単語に答えられなかったらでしょうね、その場合不正解者は服を脱ぐ事になるんですよ？」

「え？そ、それはダメです！！」

「えー？しないのネギ君？」

「わかってもらえたなら幸いです。桜子さんも残念がらないでくださいね、新田先生にいいつけますよ?」

「う、それは困る・・・かも」

「桜子さんも納得してくれたみたいだし、先生はH Rの続きをお願いしますね」

反発して提案呑もうとするとかこの薬味怖すぎる。クラスの人も騒げばいいのか、僕がいても平気で今回みたいな事言い出したりするし。

そんなことされたらフィーとか、アスナとか、チーちゃんの僕を見る目が恐ろしくなるから止めて欲しい。

少しトラブルはあったもののH Rも無事終了して（馬鹿騒ぎが無かったから禁断の魔法も出てこなかった）放課後、帰宅してからこれからの事を話す事にしたよ！

「多分、図書館島のイベントがあるとすれば今日だけど、フィーとアスナは起こると思う?」

「いや、無理だろ。あそこ地下3階くらいしかないし、探検部もないんだぞ」

「私も無いと思う。貴重な本なんて、あそこにあると思えないし」

実は図書館島、原作より大幅に地下に場所が取れなくて、地下は半分もないんです！だって、地下は基本「時計塔日本支部」が存在するから、作りたくても作れないですね。

おまけにこんな危険な場所に貴重な本なんて置けるわけ無いので、余り貴重じゃない本しか存在してないし。その割には内に警戒して異常とも思えるトラップがあるから図書館探検部も存在してない。まず生徒が引つかかったら死ぬよ、あそこのトラップ群。硫酸の溜まった落とし穴とか、猛毒付の矢とか、誰かさんのドラゴンとか・
・いや、今の2-A生徒なら少しは進めそうだけど。

「じゃあ、このイベントも自動消滅とみていいのかな？」

「私はいいと思うぜ、なんなら千雨にでもきけばいいじゃねーか。超でもいいだろーがな」

「超の方がいいと思う。千雨に聞いて、無理して巻き込まれたら大変だし」

「じゃあ、超の携帯に少しかけてみるよ」

とりあえず発生しそうな要素は一通りつぶれてると思うけど、図書

館島はそれでも色々本が揃ってるし、バカルテットだって健在、後は妖怪爺が一押しすれば起こりえるかもしれない。」

『どうしたネ、ガロード』

「超、今いい？バカルテットと薬味の様子ってわかるかな？」

『図書館島か？あれなら噂も無いから大丈夫だと思うヨ』

「そう、助かったよ」

噂がないなら安心だ、探検部も無く噂も無いなら探す理由が無いし、逆に行く気になってたら止まるか怪しかったし。

止まらなかったら、フィーにでもお願いしてついてもらってゴーレムに詰問も考えてたんだけどね。

『次の問題があるとすれば「桜通りの吸血鬼」だが、これは吸血鬼そのものがないから現状は様子見でいいの力？』

「そうだね、誰かが代わりにするか「イレギュラー」が現れるかは不明だけど、今は様子見しか出来ないかな」

『わかったネ、それじゃ他の人にばれる前に切るヨ』

「了解、助かったよ」

「んで、どうだった？」

「現状問題は無いみたい、噂も無いから明日もきちんと来るとおも
うよ」

「そうか、ならもう寝るぞ。明日も学校があるんだからな」

「おやすみ、ガロード、フィー」

「「おやすみ、アスナ」」

そして翌日も先生やバカルテットの失踪なども無く無事授業が始ま
った。

新田先生とかの心労が増えなくて本当に良かった、あの先生原作だ
と絶対胃薬のお世話になってるだろ。

そして迎えた試験当日。クラスメイトの遅刻などもなく、無事テス
トを受ける事ができた。

ここまで進んだけど、薬味が魔法バレになりそうなのは大きいのは
軒並みつぶれてるかな？多分見てないところで飛んでたりしてそう

だけど、僕だって24時間薬味の面倒なんて見たくないし。とりあえず、結果を待つだけになったけど……。

「第一位2年F組！！平均点80・8！！」

やっぱり、1位は無理だったのか。薬味は頑張ってたけど、何回かおもちゃにされて授業がつぶれてたりしたし。

24クラスもあるんだし、まあなんとかなるんじゃないかと思って暫く見てたけど……。

「下から三番目の第22位！2年P組！！70・8点！」

いやいやいや、なんで出てこない。あれか？図書館島のイベント無しじゃ突破不可能とかそんなフラグでもあったのか？

冷静を装いつつ、密かに内心パニックになってる中次の成績が発表された。

「次は下から三番目……ブービー賞です！えーと……これは……2・Aですね、平均点70・2点」

「やったー！！！」

予想外にギリギリだった……。3位か4位くらいはいくと思って

たのに。後でわかったのだが、やっぱりバカルテットが低かったようだ。

つぶれた授業の所がモロ、テスト範囲でそこが重点的に壊滅状態だったらしい。後1回でも授業が潰れてたらやばかったみたいだ。

原作だと5人（この世界では4人だが）に図書館島でみっちりとしてたが、皆と同じだったのがいけなかったのかもしれない。

まあ、逆にあれは残された皆の事まったくフォローが見られなかったし、これはこれで有なのかな？

24・テストだよ！（後書き）

教師でも無く、一般生徒してる主人公じゃテストに貢献出来るわけも無いのでブービー賞、なんとか最下位からの脱出にとどめました。

図書館島は下に時計塔の支部あるんだからまず作れなないか？と思いいイベント消滅。地下ぶん取るだけで大きく変わったよ！てか、この区間の魔法バレ行為って学園長がしてるゴーレムだけなんですよ。ね。（発言だけならネギも連呼してますが

てか、試験に生徒の前でゴーレム使うなといたい。他、ほったらかしにした生徒は誰が面倒見たんだよ！？まあ、タカミチだろうけど。（後のお咎めなしから見て

次回は暫くお待ち下さい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6489q/>

連続転生物語～現在ネギま！編～

2011年2月22日22時30分発行